

主要な登場人物

【ル・ラント共和国】



クローネス・マールク 中尉。のち、少将。ナキヤソ宇宙要塞駐留艦隊司令官副官兼作戦主任参謀。レイヴェルゲン大学文学部の学生だったが、意に反して軍人となる。



ネイス・ミュッケル 中尉。のち、准将。マールク同様学徒動員法によりナキヤソ駐留艦隊の一員となり、のちに“知将”と謳われるに至る。通称“ネイ”。



アリシア・ミュッケル ネイス・ミュッケルの双子の姉。アーテミシア・ウェルフォー スレイヴェルゲン大学の学生。ネイの幼なじみの少女。

ミュトゥレイ・ロメイチェフ 中将。のち、大将。ナキヤソ駐留艦隊司令長官。マールクの上官。
ヒースクリフ・ローナク 中尉。のち、准将。金



髪碧眼の美男子。“勇将”と称されるに至る、酒豪のプレイボーイ。

ベイ・ドレソン 中尉。のち、准将。勇猛果敢な“猛将”。学生時代はスプリンターとして知られていた。

ファイトウリック・ラング 中尉。のち、大佐。パイロット。大学では惑星物理学を専攻していた、瀟洒な青年。

セルティ・マックス 大尉。のち、大佐。並外れた長身と猛烈な早口が特徴。大学院在学中に“学徒動員法”で出征する。

レイトゥラント・シャブリ 中尉。のち、大佐。細身の端正な青年だが、年齢の割に髪に白いものが目立つ。用兵の堅実さと兵站線敷設の手腕で知られる。

メル・ヤンデキフィティ 少年兵出身の准尉。ロメイチェフに見出されて中佐となり、ローナクのもとで格闘戦集団を指揮する。剽悍な指揮官。

ヒュンテ・クリュッペル 中尉。情報主任参謀を務める赤毛の青年。

ウォロンステッド・オレーグ 大尉。後方主任参謀。

フェレスレット・ラインク 参謀少佐。

ウェスコット・ローク 中将。本国艦隊司令長官。

クリス・ローク ローク中将の長女。士官学校生徒。アーテミシアの友人。

ドウリユー・ラ・マーク 大佐。たたき上げの老練な士官。本国艦隊副司令官を務める。

ヴィレックス・ターク 大将。共和国宇宙軍参謀本部総長。

デスタリヴァ・ドロク 中将。宇宙軍参謀次長。フォルター・ワシエック 少将。のち、中将。参謀本部作戦次長。

ジェリコウ・シュジュケイ 植民相。“だるま”とあだ名される老朽政治家。

ランルサック・ヘンチェ 共和国政府首席。

【ドレド自治共和国】

フロイラス・ベルサリウス 大将。ドレド宇宙艦隊最高司令長官。

ファウム・シャベル 中将。第一艦隊司令官。

スイグレイ・リッツ 中将。第二艦隊司令官。

リヴェルト・ダウン 中将。第三艦隊司令官。

ロマヌス・ウォーレンスタイン 中将。第四艦隊司令官。

ユイ・モロー 中将。第五艦隊司令官。

ユージン・ヨセフスタート 自治政府首席。

共和国前史

“ドレド戦役”の異称：“歴史上、最も低劣な戦争”……は、戦役勃発前後の信じられないくらいに愚劣な経緯に由来する。

戦役勃発の直接の原因は植民政策の失敗であるとされている。一般には食糧不足が“ドレド戦役”の直接の原因となったといわれているが、これを裏付ける具体的な資料はない。現に、母星もドレドもさして強力な食糧統制を実施することなく戦役を戦いぬいているのだから……むしろ、のちに共和国宇宙軍提督の一人が覚え書きに書き記したように“共和国圏の覇権を賭した戦い”と規定したほうが事実の正しい叙述かもしれない。

惑星ドレドは恒星系ゲッセルの第四番惑星。共和国暦五〇〇年代に発見され、開拓された。恒星ゲッセルは母星系の恒星ダートよりも高温のF型恒星であり、平均距離一億七八〇〇万キロメートルの軌道上を公転する惑星ドレドの気候は、母星よりも高温かつ乾燥したものだった。また、母星の八対二とは逆の比率を示す、三対七の海陸比が、気候の乾

燥化に拍車をかけた。

しかし、事態を決定的に悪化させたのは、ドレドの乾燥気候よりも、当時のル・ヨント社会をとりつめていた“中世的頹廢”だった。淡水資源に乏しく農耕に適さないとはいえ、ドレドの砂漠地帯とゲッセル星系の小惑星帯には膨大な量の鉱産資源が埋蔵されていた。星系外縁部の四つのガス状巨星は、母星系をはるかに上回る重水素とヘリウム資源の供給源となっていた。効率的な海水の淡水化プラントを建設し、不毛の砂漠を沃野に変えることも不可能ではなかったであろうし、また、膨大な埋蔵資源を利用して新規の宇宙探查計画を推進することもできただろう。

しかし、共和国暦六〇〇年代以降、共和国政府は一切の国家プロジェクトを放棄するようになつていった。新規の宇宙開発計画は、提出されただけ却下された。“惑星ドレド緑化計画”、“第二次宇宙コロニー建設計画”、“第三六次宇宙探查計画”など、遂に日の目を見なかった野心的なフロンティア開拓計画は枚挙にいとまがない。

いわく、“時間がかりすぎる”、いわく“五〇年後よりも今の生活を改善するほうが先だ”。そして当時の共和国がすでに衆愚政治に陥っていたことを端的に表現する理由

づけとして“票にならぬ”というものがある。

ドレド自治政府内部に“航路安全保障部局”なる組織が発足したのは、共和国暦六〇〇年代後半である。母星との連絡をより密にするために新規航路を開発し、整備することを目的とする……と説明されたこの組織は、この時期の政府組織としては異例なほどに活発に活動し、それまで一本しかなかった母星・ドレド間の連絡航路を三本に増やし、詳細な航路図を整えた。が、この組織こそ、のちのドレド国防軍の中核になったものであり、従つてこの部局が新設された六〇〇年代後半すでにドレド自治政府首脳には、共和国政府を打倒し、共和国圏内での覇権を掌握しようとする野心が芽生えていたと見るべきであろう。食糧問題はたしかに深刻ではあったが、所詮は口実にすぎなかった。

一方、最後通牒を手交されたときの植民相ジェリコウ・シュジュケイの言葉は余りにも有名である。

「このような書式の書類では受け付けるわけには参りませんな」

呆氣にとられるドレド自治政府代表に向かって、シュジュケイはこともなげに言い放ったのである。

「前例がないのです」

最初の恒星間戦争であるという点においてのみ、シユジュケイは正しかった。

共和国暦七〇九年に始まった“ドレド戦役”は、開戦五年目の七二三年初頭、“母星系の守護神”と呼ばれたアージャナ・ラインの陥落でほぼ勝敗が決したと思われた。アージャナ・ラインは母星系第七番惑星アージャナの衛星軌道上に構築された宇宙要塞群であり、直径一〇キロメートル級の宇宙要塞五つと数百の戦闘衛星、一〇〇〇を越える監視哨戒衛星を組み合わせた要塞線。共和国宇宙軍参謀本部をして“アージャナは難攻不落である”と豪語せしめていた。しかし、そのアージャナ・ラインの攻防戦に、共和国宇宙軍は決定的な敗北を喫したのである。

“第四次アージャナ会戦”にドレド宇宙軍が動員した艦隊兵力は一万五〇〇〇隻余り。対するに、共和国宇宙軍も数字上は一万四〇〇〇隻。

兵力の動員速度と集中においてドレド宇宙艦隊は決定的に共和国宇宙軍を上回った。ドレド宇宙軍の四個艦隊は、フロイラス・ベルサリウス大将のもとに集中指揮され、戦場に投入された。一方、共和国艦隊は、まず

アージャナ駐留艦隊が応戦に出て敗れ、ついで第六惑星の要塞駐留艦隊、更に本国の予備艦隊、ナキャソの駐留艦隊、最後には本国駐留艦隊と、兵力を小出しにした挙げ句に典型的な各個撃破を受けてしまったのだ。ナキャソ要塞艦隊と本国艦隊の動員は、共和国政府の躊躇から著しく遅れ、彼らが駆け付けたときには、友軍艦隊は跡形も残らぬ程に撃砕され、アージャナ・ラインは二万近いドレド艦隊に包囲されて絶望的な坑戦を継続するだけだった。

共和国宇宙軍の損害は六〇〇〇隻を越える艦艇と、六〇〇万以上の兵員。ドレド艦隊は、六〇〇隻余りを失い、死傷者二五万足らずを出したに留まる。一万に足りないナキャソ駐留艦隊と本国艦隊では、二万近いドレド艦隊に包囲されたアージャナを救うことは不可能だった。まして、アージャナ・ラインはすでにその外郭をもぎとられ、中核たる宇宙要塞も分断されて個々に包囲されているとあっては……

アージャナ・ライン陥落直後の共和国暦七二三年五月二七日、ル・ラント宇宙軍に残されたただ二つの制式艦隊の内の一つとなつたナキャソ宇宙要塞駐留艦隊は、ミユトウレイ・ロメイチェフ中将麾下に要塞を進発する。

一方、本国艦隊を率いるウエスコット・ローク中將は、ナキャソ要塞の他に三カ所の小型要塞の武装を整備させ、戦闘衛星群と哨戒衛星群でこれらを繋いだ防衛ラインを短期間で整えるという困難をきわめた仕事を、ドレド艦隊来襲直前に辛うじて完成させていた。

本国艦隊が、ナキャソ要塞を拠点とする徹底的な防御作戦を採る一方で、外宇宙に進出したロメイチェフ艦隊が、すでに二年を超える遠征を続けているドレド艦隊の後方を攪乱し、足並みを崩させる。それ以外の選択肢を彼らは与えられていなかった。

「この際、敵が大軍であることが我々にとつての希望になる」

ローク中將、出撃前の訓示である。

「敵は大軍だ。従つて我々よりも先に腹が減る。ロメイチェフ提督の作戦の効果は間もなく現われるだろう。それまでの辛抱だ」

彼は決して猛将ではなかった。が、この時彼の訓示を結んだ言葉は、その後長く本国艦隊將兵の間で語り継がれることとなる。

「アージャナは陥ち、フェクツチアは失われ、ナキャソの命運は風前の灯となった。諸君、反撃のチャンスである！」

「そんなことはないんじゃないか、と思うんだ」

「そんな分厚い雲が、隙間もなくてすっぽり、

「じゃ、どうして探さないの？」

応じた声は、まだ幼さをたつぷりと残してはいたけれど、真剣さは否定しようがない。

空から転じたエメラルド・グリーンの瞳を、まん丸く睜みはつたグリーン・グレイの両眸が迎えた。

「探す気がなくなってるんだ」

探そうという意欲がすでに失せているのだ
 としか思えない。新規の宇宙探査計画、無人
 惑星の緑化計画、野心的な宇宙コロニーの建
 設計画……いずれも数十年前に放棄され、顧
 みるものとしてない。

閉塞感……新奇なものは排され、非難され、

そして無責任……自ら進んで責任を負おうとすれば、要領の悪い奴と嘲笑され、時には

ぶつていと逆に指弾される有り様。さらには無関心と無気力、価値観の喪失、エトセトラ、エトセトラ。

「他の人が探さないんだったら、自分で探せばいい」

「星雲の向こう側への通り道？」

「そう。向こう側へ」

向こう側に何百億もの星がある。それは、夢と憧れだけではたどり着けない、丸ごとの、荒々しい世界だろう。でも、自分たちだけの世界で互いを敵と呼び、争い合うくらいなら、自身の翼の許す限りの星々の果てへ挑んで飛んでいく生き方の方が勝ること何倍ではないか。

「あたしも行きたい」

それが完全な理解の元に発せられた言葉だったのかどうか。応じた言葉が理性と計算の結果ではなく、感情の支配する領域であったことを、ネイス・ミュッケルは終生忘れることがなかった。

「いいよ、アータ。連れていって上げるよ、
いつか、きっと」

共和國曆七一年。

星雲のこちら側で。

ル・ラント共和国は“史上もっとも愚劣な戦争”のただ中にある。

共和国暦七二三年 八月一五日

……そこで戦争は、政治的行為であるばかりでなく政治の道具であり、彼我両国のあいだの政治的交渉の継続であり、政治とは異なる手段を用いてこの政治的交渉を遂行する行為である……政治的意図が常にその目的であり、戦争はその手段にすぎないからである、そして手段が目的なしにはとうてい考えられ得ないことは言うまでもない。

カール・フォン・クラウゼヴィッツ『戦争論・上』

人間は、国家と家族というふたつの対象に対し至上の忠誠心を有する。そして大部分の人間にとつては、より私的であるところの、家族に対する忠誠心の方が強い……自分たちの家族そのものが脅威を受けている場合には、愛国心・規律・戦友愛の絆も弛んでしまつものである。

バジル・リデル・ハート『戦略論』

アリシアは不機嫌だった。弾性に富んだ彼女の精神も、ときにはバイオリズムを低下させることがある。太陽の恩恵に満ちた夏が訪れていると言うのに地下シェルターに閉じ込められ、外出にもいちいち上官の許可が必要な上に、外出先から外出目的、帰着時間までを申告しろというのは、息も詰まるうというものだ。

「アリシアくらいの美人だったら誰でも引き留めておきたいんじゃないかなあ。しょうがないんじゃない？」

グリーン・グレイの瞳が憧憬を湛えて、頭半分余り背の高いアリシアを見つめている。ポニー・テイルにまとめた淡い茶褐色の巻き毛を、一向に似合わない軍服の肩にからせたその少女……といっている年頃に見えた……は、アーテミシア・ウェルフォース。アリシアとネイの姉弟よりも二歳年下の一六歳。この年にレイヴェルゲン大学に入学したばかりで“学徒動員法”に引っ掛かってしまった。

「呑気ね、アータは……」

「いざとなったらネイが救けに来てくれるもの」

「この娘と弟とは、どこで気が合うのだろう……というのはアリシアにとつてここ数年来の疑問である。呑気で屈託のないアーテミシアと、やや内気で大人しい弟の組合せは、明敏なアリシアにとつても至つて奇妙に見えたのだが……呑気そうに見えるアーテミシアだが、それが彼女の内面の正確な表れでないのだろうことを正確に洞察しているアリシアだったが。

いづれにしても、ネイはナキャソへ出発する直前、寂しげな微笑を湛えて姉に言い残したのだ。

「できるなら姉さんやアータと一緒に母星に残りたかったんだ……でも、しょうがないから……姉さん、アータのことを頼むね」

アリシアは時々夢を見ているのではないかと思うことがある。あの大人しいネイが軍隊に入り、中尉だという。そして、自分もまた少尉の肩章をつけて、宇宙軍の中枢基地に勤務しているのだ。朝、目が覚めたとき、シェールキツヒの居心地のいい自宅ではなく、士官用個室の狭苦しいベッドの中に自分を見出して、夢でないことを再確認させられるアリシアだった。そして、ネイからはこの四月以来、何の連絡もない。

「知らせがないのは無事の知らせっていうもん、きつと無事よ」

アーテミシアが、軍人だった父親をこの戦争で失って、母親とともにシェールキツヒのアリシアの家の隣に引っ越してきてからすでに四年余りになる。最初の頃、父の死に鬱（ふさ）いでいたアーテミシアも、間もなく隣家の美しい少女と知り合いになり、その紹介でネイとも言葉をかわすようになったのだ。そして、一度言葉を交わすようになると、アーテミシアは好んでネイに声をかけるようになり、ネイもそれを歓迎するようになった。

そうと知ったときの複雑な気分を、アリシアの優れた記憶力ははっきりと覚えている。内気で、友人も少なかった弟のネイ……双子であり、同年であることを知っていても、物心ついて以来、ネイはアリシアの“弟”だった……そのネイがアーテミシアと仲良く肩を並べて話し込んでいたのを目にしたとき。そして、それまでほとんど差のなかったネイの身長がはつきりと個性を主張し始めたのを発見したのも丁度その頃だった。何かしら大切なものを失ったような、寂しさに似た感情をアリシアは意識したのだ。もちろん、アリシアの優れて鋭敏な理性は、アーテミシアに巡り合えたことはネイにとつて喜ぶべきことだったのだと理解はしていたのだけれど。

「双子？」

アリシアに紹介されて、アーテミシアはたつぷり一〇秒間、彼ら二人をかわるがわるに眺めやつたものである。どうしても納得できないように首を傾げながら。

「何か変……」

「どう？」

「……？」

「可笑しい？」

当時一歳だったアーテミシアは、こくん、と頷いてみせた。

「らしくないもん。アリシアの方がずうっとお姉さんって感じなんだもん」

「あーっ、傷つくなあ。じゃ、わたしのこと幾つだつて思ってたのよ」茶褐色の巻き毛の少女は、眩しげに長身のアリシアを見上げ、そしてかぶりを振つたものだ。

「んーとね……わかんない」

弟の消息を知りたい、というアリシアの願望は意外な形で満たされることになった。

七月が終わり、八月も末近い二九日、久し振りの休暇をシェールキッヒの自宅で両親とともに過ごしていた彼女は、3DTVの報道する臨時ニュースに目を見張った。

“信頼すべき情報によりますと、我が共和国宇宙軍艦隊ナキャソ駐留艦隊は、メーレン宙域で憎むべき侵略者集団、ドレド艦隊の主力と交戦、これを完全撃破した模様です”

ヴィジフオーンが彼女を呼び立てたのはほとんど同時だった。

『アリシア？あたし、ニュース聞いた？』

アーテミシアだった。ひどく興奮し、声がうわずついている。

「ええ、聞いたわ」

『ネイがね、ネイがね……！』

「アータ、落ちていて。ネイのことをニュースで言ったつけ？」

『ううん、ニュースじゃないの』

巻き毛のポニーテールが左右に激しく揺れた。

『ハイ・スクールのときの友達なの。士官学校に行つて、その娘が本国艦隊司令官の長女なのよ』

アリシアは困惑した。他人の会話を理解するのに困難を覚えたことの少ない彼女だったが、今はその例外だった。

「だから……アータ、落ちていて話してよ、さっぱりわからないわ」

『だからあ……その娘がね、本国艦隊司令官から手紙を貰ったの。その手紙にネイの名前が出てるって……ええと、そうだ、メーレン会戦でネイが大活躍したつて、そういう手紙なの』

「本当に？」

『本当だもん。ね、アリシア、ネイは無事よ、無事なの。ねえ、アリ

シアったらあ！』

「アータ、アータ……落ちていて、本当に、ね、詳しく聞かせてくれない？」

アリシアは、放っておくと手放しで泣き出しそうなアーテミシアを宥めながら、詳細を聞き出そうとした。

興奮の余り、支離滅裂になりながらもアーテミシアは、本国艦隊司令官のウェスコット・ローク中将の娘が、彼女のハイスクール時代の友人であり、その友人が父からの書簡にネイス・ミュッケルの名を見出して、アーテミシアに知らせたこと。その書簡で、ネイが分艦隊指揮官として活躍したことが述べられていたことなどをアリシアに伝えたのだった。

聞くにつれ、アリシアのサファイア・グリーンンの眸も驚愕に見開かれていった。

「ネイが？ まさか……」

その、まさかだった。

ドレド艦隊の第五次補給船団を覆滅した直後の七月二〇日から八月初頭にかけて、ロメイチェフ艦隊は戦闘情報の分析に忙殺されていた。

目的は、優れた戦闘指揮官の“発掘”である。

「戦艦『ワールブル』の砲術長ヒースクリフ・ローナク中尉と、『エツシェン』の砲術士ベイ・ドレン少尉。よさそうです。判断力、戦術眼ともに満足できます」

「いきなり部隊を預けて大丈夫かな。シミュレーションと実戦とは違うぞ」

「では、参謀本部派遣の参謀殿たちに頼るしかありません」

クローネス・マールクの反論にロメイチェフは逞しい顎を歪めた。

ロメイチェフは四五歳。少将になったのは三三歳の時だったが、中将に昇進し、ナキャソ宇宙要塞駐留機動艦隊司令長官に任命されたのは今年、現役に復帰してからである。飾らない、豪放な性格が災いして、三五歳の時に舌禍事件を起こして予備役に編入されてから、実に一〇年ぶりのことである。

「うちの参謀本部の参謀連中は、飯も食わずに戦争できてると思ってるらしいな。戦争するのは人間だ。電気食わせときゃ文句をいわんコンピュータでシミュレーションしかしたことの無い連中にはそこん所が分からんのかね」

そのコンピュータ・シミュレーションによる戦術演習でも、ロメイチェフと五角の成績を上げていたのは、のちに本国艦隊を指揮するウエスコット・ローク少将だけだった。

ロメイチェフもロークも決して士官学校の優等生ではなかった。

ロメイチェフの卒業時の席次は、二二一名中の八九〇番。一方のロークは二一〇八名中の一二五番。“ハンモック・ナンバ二〇番以内でなければ、将官にはなれぬ”といわれた共和国宇宙軍で、彼らが提督の地位を手にしたのは一にかかって彼らの前線指揮官としての傑出した才能にあった。が、それだけに参謀本部の“秀才参謀”たちの嫉視を買う羽目になった。ロメイチェフの発言は、選良意識に肥大しきった彼らの自尊心を強かに傷つけたのである。

参謀本部は、彼の発言を“高級士官にあるまじき不見識”として糾弾し、彼らの突き上げを恐れた共和国政府はロメイチェフに予備役編入を命じたのである。

“ドレド戦役”による連続的敗北で多数の前線指揮官を失った宇宙軍は、止むなく予備役士官の現役復帰を認め、ロメイチェフも三〇〇

〇日近い冷飯食いから中将、艦隊司令官の辞令を手にする事になったのだ。もつとも、だからといって彼が躍り上がって喜んだ、ということではなかったが。彼がナキャソ駐留艦隊司令官に任命されたのが七一年末。すでに三万隻、五〇〇万余りの艦艇と兵員を失ったあとだけに、いささか時期を失した感は免れなかった。この時期に至っても、参謀本部の参謀士官たちは安全な地下シェルターにこもってコンピュータ・シミュレーションに興じ、“以寡撃衆こそ戦略の真髄である”などと豪語し続けていたのであるが。

「じゃあないか。連中を呼べ。そいつらに一部隊づつ預けることにする。これで負ければ、俺もここまでの男よ。マールク中尉、貴官の判断を信ずることにする」

クローネス・マールク中尉が、艦隊司令長官副官としてナキャソ要塞に着任してきたのは七二年の二月。

『優秀な作戦参謀を……』。当てにならぬことを承知のうえで要求を出してあったのだが、レイヴェルゲンの大学の文学部の学生出身で、昨年までは後方勤務本部で伝票計算をやっていたという、この一見頼りなげな青年を前にして、さしものロメイチェフも数十秒間の絶句を強いられた。要求したのは参謀であつて副官ではない。

しかし、この急造中尉が、申し分けなさそうに髪を掻き回しながら提出した一通の書類が中将を驚倒させた。

「ドレド主力艦隊はすでに遠征一年近く、その補給線は限界近くにまで伸び切っている。これを断ち切ってしまうと、ドレド艦隊は戦わずして立ち枯れるしかない。補給路確保のために敵が兵力を分派してくれば、これを各個に撃破できる。もし全軍が一旦後退すれば、戦線は膠着するから政治的に戦争を終息させることも難しくはない……」

母星とドレドとを結ぶ詳細な航路図、兵站線襲撃計画、ドレドの航

路保全部隊を迎撃すべき宙域図などが添えられた作戦計画。

「貴官は本当に軍事教育を受けたことがないのか？」

不審を隠しきれないロメイチェフに、マールクは決まり悪げに頭を掻いたものである。

「いえ、あります。三か月でしたが、速成教育を受けました」

戦闘艇操縦、射撃装置操作、熱線銃射撃、航宙エンジン操作、電子線装置操作など、何をやらされてもからきしこなせず、教官たちを呆れさせた。最初はその都度殴られたものだったが、そのうちに教官の方が呆れ果てたらしく、後方勤務本部へ放り込まれたのだという。

何が幸いするかわからないもので、放り込まれた後方勤務本部の膨大なデータ・バンクが、彼の作戦を補強する豊富な資料を提供してくれた。もちろん、学生時代に知り合っていた経験豊富な専門家たちと再会していなければ、データ・バンクからこれらの資料を引き出すことは不可能だったに違いない。なにしろ、数字の列を見ると頭痛を覚えるマールクであつたから。

「うまくいくかもしれない。参謀本部の作戦よりもよっぽどまとも、というより久しぶりに軍事作戦らしい作戦案を聴かせてもらった。

マールク中尉、貴官は作戦主任参謀と艦隊参謀長を兼ねろ。副官などは適当に見繕うさ。ただし、当分給料は副官待遇で我慢してくれ」

それが、この風変わりな司令官と、参謀長・兼・副官のコンビのスタートだった。

二五〇〇隻程度の内、ネイス・ミュッケルに巡航戦艦集団を、ローナクとドレスンに高速巡洋艦集団をそれぞれ指揮させるものとし、自らは大型戦艦と砲艦、ミサイル艦を主力とする火力集団を統率する。

「空母と格闘戦部隊の指揮官が欲しいもんだな……」

新たに定めた指揮官のリストを眺めながら、ロメイチェフは唸り、

マールクに命令を投げ付けたものである。

「探しとけ」

マールクは肩を竦めて命令を受領した。

軽やかな足音がネイを振り返らせた。

極度に照明を抑えた展望室内は、そのまま宇宙の一角に溶け込んでしまったような印象を与え、踏み込むものをして一瞬立ち竦ませる。

全く躊躇い（ためら）を示さない足音は、所有者の豪胆さを示すものだったかもしれない。

「ここにいたのか、ネイ。また、姉さんを懐かしがってべそでもかいているのか」

金髪が、抑えた照明のなかでも鮮やかなほど豪奢なきらめきを放つ。

透き通った碧眼が青い水晶のような光を躍らせて、硬質ガラスの窓際に佇むネイの姿を映しだしていた。

ネイ……ネイス・ミュッケルは一七歳。階級こそ中尉だが、士官学校出身の生粋の軍人では無縁ない。

彼の父は、共和国首都の国立総合大学に勤める講師だった。学識、経験とも充分なのだが、持ち前の無欲さが災いしてか、助教授の椅子を数年にわたって捉まえ損ねている。本人にしてみれば、学者としての学識ではなく、他人を蹴落とす謀略の才能と、有力者とのコネクションをもつ政治力のみがものを言う共和国の学界にとうに見切りを付けていたのかもしれない。

両親にとってネイと、彼の双子の姉であるアリシアは自慢のたねであり、彼ら姉弟の成長を見守ることが生きがいになっているようでも

あった。特に姉のアリシアは、眩しいほど鮮やかな金髪、サファイア・ブルーとエメラルド・グリーンの交錯する生き生きした瞳の持ち主。内気なほにかみ屋だった弟のネイを、“姉さんっ子”といってからかう近所の悪童どもを毅然とした口調でたしなめるのが彼女のいつもの役割だった。端正な、美しい少女だったが、初めて彼女を目にする者は、彼女の美しさよりもまず彼女の毅然とした態度に強い印象を受ける。

二年前、揃ってハイスクールを卒業したとき、ネイは重力子工学の技術者への道を選択し、アリシアは教育学を自らの専攻に選んだ。共和国政府の介入さえなければ、数年を経ずしてこの仲の良い姉と弟はそれぞれの本来の人生を歩み始めていたに違いない。そう、共和国政府の干渉さえなかったならば……

共和国政府は彼ら姉弟に、彼らが望む人生を歩ませることは、政府の威信をはなはだしく損なうものと判断した……無論、偏見の極みであるが、ネイの友人のひとりが辛辣な口調で政府を批判した言葉だった……ようだった。政府は、彼らの信奉する「正義」をネイとアリシアが甘んじて受け入れることを強要する。

共和国暦七一年、「学徒動員法」可決。文科系統の学生達が戦場へ駆り立てられ始めたのである。いとわしげにきれいな眉をひそめた姉の表情を、ネイは昨日のことのように覚えている。

「何を言ってるのかしら、全く……母星市民が丸となってドレドの暴虐に立ちむかうときが来た……ですって？ 自分たちの失敗を棚に上げて、よくあんなことをぬけぬけといえるものかわ」

きっぱりした口調はアリシアの持ち前のものだったが、吐き捨てるような激しい調子がネイを驚かせた。

「どういうこと、姉さま？」

「あなた、知らないの？ 今度の戦争は、政府の言ってるような聖戦じゃないわ。政府とドレドの主導権争いよ、共和国圏内でのね。」

心配だわ……今は文科系男子学生だけ、なんていつてるけど、その内に動員は見境なしになるわ。ネイ、あなたまで戦争にいかなくてはならなくなるかもしれないの。あなたみたいな不器用な子が軍隊に入ったりしたら……」

本人は、姉が心配するほどには不器用なつもりはなかったのだが。「それまでには戦争が終わるよ、姉さま」

しかし、アリシアの不安は的中した。七二年、「学徒動員法」は一切の制約を解除された。全ての学生は、国家の要請に応じてペンを捨てなければならなくなったのだ。文科系、理科系の区別どころか、最早男女の区別さえなく。

「それとも母星においてきたあの娘のことを思い出しているのか」

「推測は君に任せるよ、ヒース」

ネイは、混じり気のないエメラルド・グリーンの双眸に星々のひかりを反射させて穏やかに応じる。歩み寄ってくる青年に向き直った動きにあわせ、淡い色の金髪が光の粒子を降り撒いたように見えた。

「は、手応えのない」

青年……ヒースクリフ・ローナク中尉は、ネイよりも確実に二回りは大柄な、しかし、見事に均整のとれたしなやかな長身を友人の隣に移す。決して小柄ではないネイだが、ローナクの隣では子供のように見えざるを得ない。二二歳。ネイと同じ、レイヴェルゲン大学の出身。その堂々たる体躯はフットボールのレギュラー・プレイヤーとして鍛え上げられたものだった。二人は美貌という点において共通していた

が、端正で穏やかな印象のネイに対して、ローナクの鮮烈なまでの華麗さは多くの女性の視線と興味を引き付けて止まなかった。そして、ローナク自身、自らの美貌を疎ましく思ったことはないようだった。

「この戦艦は不作だ」

ぼやくように言い、艦内服のポケットから魔法のようにポケット・ウイスキーのビンを取り出すのを、さすがにネイは呆れて見守る。

「何が不作なのかな？」

「言わせるのか、俺に？」

鮮烈な碧眼が一閃する。

「ネイの姉上のような美人をとまでの贅沢はいわんが……」

ネイは呆れているしかなかった。豪華な金髪、勁烈な碧眼のこの青年は、後年“勇将ローナク”の名をほしいままにするのだが、その前に酒豪として、あるいはプレイボーイとしての名声を確立していたのだ。

「君の好みにあわせて搭乗員を選択するわけにはいかないと思うけれど」

「それが気に入らんのだ。俺がこの戦艦の艦長なら、搭乗員は一名一名面接してから決めるさ。まあ、ネイのような“姉さん子”にはわかるまいがね……しかし、飛び抜けた美人が近親者にいるというのはつくづく不幸だ」

「なぜ？」

「つまりだな、どんな女を見ても、まず内心で比較してしまう、ということだ。統計学的に言って、ネイの姉上ほどの美人がそうそう転がっているわけではないから、つい関心を失ってあたらチャンスを逸することになる」

しかつめらしく論評し、半分ほども中身のなくなったウイスキーを

傾ける。

「学徒動員法が全学生に適用されるようになったそうだが、どうせならネイの姉上にもこの艦隊に来てほしかったものだ」

その方が姉にとつても安全かもしれない……ネイは思う。

学徒動員は女子学生にまで及び、アリシアも電子戦オペレータとして防空基地の一つに配属されることになったと言うのだ。いつそ、ナキャン要塞勤務を志願すれば、と勧めてみようかとも思ったが、優しい姉が両親を母星に残すことを肯んじるとは思えなかった。

それに……

“ミュツケル中尉、艦長が呼びです。ブリッジまで出頭してください”

合成音が彼の思索の帳を払った。

「なにかやったのか」

ローナクがやや顔色を改めた。この時期の共和国宇宙軍の士気は、墮天使を喜ばせるレベルにまで落ち込んでおり、特に古参の士官が学生出身の士官に理由もなく暴力を揮う例が目立った。ただ、『ワーブル』艦長のゲイル・ダーク少佐は公正な人柄であり、無意味に部下に叱責を浴びせたりすることはなかったから、ローナクの次の言葉は揶揄を含んでいた。

「服務規定違反か」

「勤務時間中にアルコールを口にしたりはしなかったと思うけどね」

やり返してネイは展望室を出た。

ベイ・ドレسن少尉もマールクやネイたちと同じく、“学徒動員法”で人生の軌跡を歪められた口である。

体躯は小柄だったが、鍛えぬかれた筋肉は一部の隙もなく引き締ま

っていた。やや癖の強い黒髪に、真っ黒に日焼けした顔が精悍さを添えている。学生フィールド・スポーツの第一人者としての激しいトレーニングの賜だった。

だが、その彼にして、この十数か月は髀肉の嘆をかこわなければならなかった。“学徒動員法”は、彼をフィールドから引っぱりだして戦艦の主砲塔に投げ込んだ。反応速度の迅さと正確さにおいて、専門の訓練を受けた砲術士官ですら彼には及ばなかった。余りの鈍さの故に後方勤務本部へ放り込まれたマールクとは逆に、速成訓練終了後直ちに駐留艦隊へ配属されたのも、その常識外れの反射速度の故だったのだが、ドレスンとしては不満が募りこそすれ、それを名譽だなどとは思わない。第一、ロメイチェフ中將はドレド艦隊との交戦を求めようとはせず、彼の反射速度も実戦で試される機会を与えられていないのだ。しかも、狭い宇宙戦艦の艦内ではトレーニングもままならない。

この日も、ドレスンは巡航戦艦『エッシェン』の前部主砲管制室のコンソールのうえで、指に苛立たしげなタツプを踏ませていたのである。

八月一五日、第六次補給船団と会同すべく急行するドレド分艦隊五〇〇隻は、中間宙域であるドライバオム宙域の手前一〇〇光年のメーレン宙域に達していた。

恒星メーレンはありふれた……とは言いがたい……中性子星で、周囲に超新星爆発の名残である希薄なガス雲を伴っていた。もともと、メーレンの強烈なシンクロトロン放射はこの宙域での電子探査装置を使用不可能に陥れるために、航路はこの宙域を避けて設けられている。ドライバオムとは異なり、メーレンは航路上の灯台としての役割を重

視されてはいても、宙域内をわざわざ通過せねばならない必然性は認められていなかったのである。

ネイス・ミュッケルは、メーレン宙域の外縁をかすめる航路上に高速戦艦を中心とする前衛集団八〇〇隻近くを集結させていた。ヒースクリフ・ローナクとベイ・ドレスンはそれぞれ三〇〇隻余りの巡洋艦艦隊を与えられて配置につき、ロメイチェフは残余の一〇〇〇隻余とともに更に後方の空間に潜んでいるのだ。

「これでは、兵力を分散して配置することになります……」

ネイはマールクの示した作戦案に重大な欠陥を指摘せざるを得なかった。これまで、ロメイチェフ艦隊は常に一団となつて戦場に赴いていたのに、今回に限っては四個の分艦隊を数十光秒もの距離において配置することになる。敵が少数だとしても、これでは各個撃破のチャンスを与えるだけではないのか？

マールクはネイの明敏さを称賛する様子で、その指摘を認めた。

「まあ、そうだね。これじゃあ、まるで叩いて下さい、だねえ」

「叩かれるつもりですか？」

「いいや……叩くチャンスだと敵に思わせる。逃げ腰の敵は叩き難い。かかってきた敵は足を掬ってやればあつさりこけてくれるから、かえってやりやすいんだ。で、ネイ、君に旨くやつて貰いたいんだ。一つ間違うと、こけるのはこっちの役割になる。戦場で三枚目は御免だからねえ」

たしかにロメイチェフ艦隊以外の共和国宇宙軍艦隊がやれば墓穴を自ら掘ったことになる……が、ネイとて万全の自信は有り得ない。これまでの戦いは旨くいっているが、敵が小型艦艇を中心とする護衛艦隊だったからであつて、本格的なドレド戦闘艦隊を相手にしたことはまだないのだから。

ネイは旗艦『ブルーリッジ』で、航路上にばらまかれた偵察部隊からの報告を待っている。ワープアウトポイントから数十天文単位を数百の小宙域に区画して、偵察艇隊を配置する計画は、情報先任参謀のクリュッペル中尉の手になるものだ。

しかし、座り心地が悪い……と、ネイは指揮シート……半球形をした艦橋の中央に一段高くして設けられ、周囲には各種の戦闘情報表示スクリーンが配置される……で身じろぎした。旗艦施設のある艦では、そのまわりに幕僚席、艦長席、航法・戦闘・電子戦・機関部門の先任士官席が置かれ、そのまた外周に多数のオペレータコンソールが並ぶ。

『ブルーリッジ』は『クレストルランス』級戦艦であり、旗艦として艤装されていたから、生粋の士官たちに周囲を取り囲まれて、ミューケル“大佐”は落ち着かぬ気分を味わわれていたのだ。ただ、その士官達の中からは“宇宙軍に退却の文字なし”などと戯言を吐く参謀士官の姿が消えているのが救いだった。いま、『ブルーリッジ』の艦橋にいるネイの幕僚は、いずれもロメイチェフに見出された前線士官ばかりである。

「ミューケル大佐、先遣偵察隊から入電しました。“ワープアウトを確認。五〇〇、ないし一〇〇〇隻の戦闘艦隊と認む”とのことす」

電子戦先任士官の声が鼓膜を刺激し、ネイは穏やかな翠色の眸で戦闘情報表示スクリーンを一瞥した。

「全艦に情報を伝達、作戦通りの序列に従い前進開始」

前衛艦隊主席幕僚を命じられているライク・ミュアン大尉がネイの命令を復唱し、発令する。

ミュアン大尉は下士官から叩きあげの老練な士官だったが、この翠色の瞳の青年士官に対しては初対面のときから好感を抱いたようだった。

た。レーダーに敵影が浮び上がり、刻一刻と光点の輝度が上がってくるときでさえ、この青年は穏やかな口調を崩さず、表情は水のように静かである。戦闘に臨んでやたらと神経質になり、あるいは怒りっぽくなつて怒鳴り散らした挙げ句に自滅する指揮官ばかりしか目にしたことのないミュアンにとつて、この青年の態度は驚嘆に値したのだ。

……これは天才的な戦闘指揮官なのかもしれない。この人を支持し、その下で戦つておれば、勝てる。そして、生き延びられるのではないか？ それは今の所は一部、ネイと親しく接することのできた将兵のみの共有する感慨に過ぎなかったが。

ドレド分艦隊もほとんど同時にロメイチェフの先遣偵察部隊を発見し、指揮官のアンドロフ准将は、その動きから後背で有力な艦隊が活動中であることを悟っていた。この時期のドレド艦隊指揮官は無能からは程遠い戦術能力の所有者ばかりだった。

「後退する敵の偵察隊を追わせよ。敵の主力を確認する。優勢な敵とは戦いたくないからな」

アンドロフ准将の命令にしたがつて放たれたレーダー艦は、間もなく急速に接近してくる八〇〇隻ほどの高速艦隊を捕捉、旗艦に通報してきたのである。前衛は、八〇〇。しかし、後方にさらに三〇〇隻ほどの艦隊が一個、または二個配置されているのが観測される。ただし、距離は四〇光秒余り。動く、気配はない。さらに後方宙域はメーレンのシンクロトロン放射が強すぎて、電子偵察装置による観測は不可能。

「八〇〇と六〇〇……か。妥当な線だな。全艦、戦闘配備をとれ。敵艦隊を各個撃破し、このさい一挙に後顧の憂いを断つ！ 中央突破隊形をとり、最大戦速で突撃せよ」

共和国暦八月一五日一七時七分。アンドロフ艦隊とミューケル艦隊は距離五・一光秒に接近、戦艦主砲の射程深くに相互を捕捉した。

「撃てえ！」

アンドロフが吠え、一方のネイは肩の高さに上げていたしなやかな右腕を翻した。戦艦の大口徑主砲が音も無く咆吼し、同時に核融合弾頭装備の大型宙雷が縦横の軌跡を暗黒の宇宙空間に描き出す。

“メーレン宙域の会戦”、あるいは“メーレンの遭遇戦”と呼ばれる戦いがこうして開始されたのである。

最初の十数分間、戦闘は平凡な砲雷撃戦に終始した。エネルギーの牙が戦艦の防禦シールドに躍りかかり、貫通すれば大真空中に閃光とともに爆散し、さもなければ虹色の閃光を放って虚しく宙に拡散する。殄猛な宙雷が小型艦を追い回し、あるいは囷のブラスタ・ユニットに激突して純白の火球を閃かせ、あるいは獲物の艦腹に食らいついて誘爆の五彩の焰で押し包む。

「突撃、突撃、突撃！」

旗艦から単純だが、間違いようのない命令が連呼され、ドレド艦隊は混戦の中で隊形を収斂させ始める。

「どういうつもりでしょう、ドレド艦隊は？」

ミュアン大尉がネイを見上げる。この若者の戦術能力を試してみた欲望が胸の奥の方で跳ね回っているのを自覚しての問いである。

ネイは微笑み、こともなげに言い放つ。

「中央突破をするつもりだと思います、大尉」

「どうなさいますか？」

「中央突破にかかられてからでは遅過ぎますから。直ちに後退命令を出して下さい」

「り、了解であります」

ミュアンの声が内心の驚きを隠しきれずに振幅を増減させる。戦闘に突入してからのネイス・ミュッケルは逆上するどころかますます落ち着きを増して来ているのではないか……

ミュッケル艦隊は激しい反撃の砲雷撃を浴びせながらも、徐々に後退を開始し、アンドロフ艦隊との距離を開き始める。アンドロフ艦隊は、折から隊形を紡垂形に組み直し終え、中央突破をめざしての全力突撃に移ったばかりのところだったから絶妙のタイミングだった。アンドロフ艦隊は何の疑いも抱かずに突進を続け、ミュッケル艦隊は敵におされたかたちをとりながら、後退を続けていくのだ。

「敵は縦深陣を施しているのではないのか？」

さすがにアンドロフ准将は危惧を抱いたが、勢いのついた味方の艦隊を食い止めることは不可能に近く、また先行する偵察艦隊も後方に控えている二個巡洋艦隊が全く前進する気配すら見せないことを報告して来ていた。しかも、ミュッケル艦隊の後退方向は巡洋艦隊の控えている方向とは異なるのだ。その方向とは……

「い、いかん、全艦隊に命令、前進を中止して後退せよ」

アンドロフ准将が蒼白になったときにはすでに遅く、通信士官は絶望の表情で一切の通信が不可能であることを指摘する。いつのまにか中性子星メーレンの強烈極まるシンクロトロン放射宙域の中央に引き込まれていたのだ。

「そろそろ時間ですが……」

戦艦『クレストルランス』の艦橋でクリュッペル中尉がマールクを見遣る。半信半疑の表情だった。

「本当に来るでしょうか？」

「くる、と思うよ」

マールクはけろりとした顔で答える。

「こなけりや、負けだよ」

クリュッペルが呆れ返って肩を竦めたとき、前衛艦隊からの通信シヤトルの到着が伝えられた。予定通りドレド艦隊をメーレン宙域に誘導中、各分艦隊が作戦通りに行動されることを期待する……

ドレド分艦隊が異常に気づいたときはすでに遅かった。それまで後退を続けていたミュッケル艦隊が後退を止めて左右に展開し始めたのが確認されると同時に、艦隊の両翼に回り込んで来る多数の艦艇が見され、ドレド分艦隊の通信回線を警報で飽和させたのだ。

「前進を止めよ。後退、全速で後退、包囲されるぞ」

アンドロフ准将の命令は、しかし一部の艦艇にしか届かず、かえって混乱を増幅させる結果になっただけだった。五〇〇隻の艦隊の三分の一ほどが後退命令に従って反転を開始し、残りの三分の二はそのまま追撃運動を継続する。老練なロメイチェフはすかさず好機に乗じた。

「あの間隙を狙え。連絡の必要はない」

レーザー通信回線では艦隊の三分の一も掌握できないのだ。優れた戦術能力を持つ戦闘指揮官がおれば旗艦の行動からロメイチェフの判断を悟って、それに倣うだろう。

果たしてミュッケルはロメイチェフの期待に応えた。『クレストルランス』が光の槍を投擲した一瞬後、ミュッケル艦隊からの集中砲撃がドレド艦隊の中央部に開いた間隙を灼いたのだ。炸裂する純白の火球が消えやらぬうちにミュッケルの高速戦艦部隊がドレド艦隊の艦列に肉薄し、至近距離から短距離砲撃システムの全火力を叩きつけて凄まじいほどの出血を強いた。

あつと言う間もなかっただろう。ドレド艦隊の三分の二はロメイチェフの重厚な包囲網の只中に陥り、八方から集中する破壊力の乱打の前になすすべもなく立ち竦んだ。

アンドロフ准将は、完全包囲に陥った部隊の救出には拘泥しなかった。救出に拘れば、彼の指揮に従う残りの三分の一の兵力をも死地に投げ入れることになる。

ドレド艦隊は急速に後退を開始、ただ一方向、包囲の網の開かれていく方向への脱出を図ったが、アンドロフはその方向に配置された二個の巡洋艦艦隊の存在を忘れていた。

「来たぞ……」

ローナク“臨時大佐”は指揮シートの上で大きく腕を振り、ドレスン“臨時大佐”は調子外れの口笛を吹くと、『突撃！』と短く吠えた。「敵艦隊、急速接近！」

オペレータの悲鳴にアンドロフが愕然としたとき、天底方向から殺到したドレスン艦隊の先制打がドレド艦隊の後尾部隊に襲いかかり、撃ち碎いていた。最初、炸裂する超融合爆発は連鎖する火球の群だったが、間もなく消えることのない五彩の光の壁となってドレド艦隊後背を覆いつくした。

「逃げろ、全速前進だ」

アンドロフは絶叫する。が、オペレータの次の悲鳴が彼の絶叫を宙に凍りつかせた。

「だめです、前方両側面からも敵です！」

逃げようとする敵と正面から激突するのが愚であることをローナクは本能的に悟り、天頂方向から躍りかかる麾下部隊を直前で二分し、ドレド艦隊を両翼から挟撃する。

アンドロフ准将は瞬時に旗艦周辺が空白になるのを見て取った。至近に敵の巡洋艦が現れ、駆逐艦が肉薄する。

「ミサイル、多数。対応不能！」

一瞬後、アンドロフ准将の肉体は旗艦の艦体ごと宙に四散する。ド

レド艦隊の軍隊としての秩序は崩壊し、個々に撃破され、あるいは包囲されて降伏を選ぶことになった。

一方、ロメイチェフとミュッケルに包囲された部隊は絶望的な状況下でも善戦し、脱出路を求め続けていたが、その努力も限界に達しつつあった。

ドレド艦隊にとつての唯一の勝機は、絶妙のタイミングで艦載機集団を繰り出した時だった。

「敵、小型艦載機多数、急速接近！」

「……しまった！」

さしものロメイチェフが時期を失したことを悟って激しく舌打ちしたのだ。味方の空母部隊はまだ艦載機を発進させていない……

が、ドレド艦隊の唯一の希望も、ひとりの共和国宇宙軍士官の機敏な判断によつて撃ち碎かれることになった。

航宙母艦『キャメル・ステーション』の飛行中隊を指揮するファートウリック・ラング中尉は、彼我の距離が近接格闘戦距離に入ったとして艦載機の発進を具申、『キャメル・ステーション』艦長ロイシュナー中佐は彼の具申を受け入れたのだ。

艦載機の格闘戦により活路を……としたドレド艦隊の意図は呆気なく挫かれ、また一五二三時一分、ドレド艦隊の残存部隊を指揮していた戦艦『レクセル』が、ロメイチェフ艦隊の駆逐艦『ヴェルゲデユレイト』の宙雷攻撃で撃破されてからは組織的抵抗も消滅してしまつた。

一七日〇時一〇分、ロメイチェフはこの宙域での勝利が確定したことを麾下の将兵に伝え、艦列を纏めて撤収の準備をするように命じた。

旗艦『クレストルランス』では、報告されて来る戦果と損害の集計に忙しいクリュッペル中尉を除いては陽気な喧騒が渦を巻いていた。

ベテランの砲術士官が「勝った、勝ったぞ」と叫んで軍帽を放り上げ、新兵たちは蒼白な顔色に漸く血の色を蘇らせて、わけの分からぬ声を上げている。

「大勝利ですね」

クリュッペル中尉は損害の少なさに驚嘆の色を隠せないようだった。

五〇〇の敵艦隊をほとんど壊滅させておきながら、ロメイチェフ艦隊の損失は数十隻の艦艇と一〇〇機足らずの艦載機、死傷者にして一人弱でしかないのだ。

一方、戦艦『ブルーリッジ』では、ネイを中心とする前衛艦隊幕僚が紅茶で祝杯を上げている。……ミュッケル大佐は天才だ。この人の下で戦っていれば、死なずにすむし、必ず勝てる……将兵達の間に、ネイス・ミュッケルという大人しやかな青年への絶対的な信望が生まれたのは、この“メーレン会戦”からである。同じ頃、ローナクは巡洋艦『ロイヤルス』の指揮シート上でウイスキーを豪快にあおつて見せ、ドレンスは軍帽をブリッジの天井に接吻させて、兵の歓呼に和していた。

「勝てたな、なんとか……」

宇宙服のヘルメットをとり、コーヒーの紙コップを手にしたロメイチェフは作戦参謀に視線を向ける。その作戦参謀はミルクの紙バックにストローを差し込み損ねて、顔にミルクの飛沫を浴びているところだった。従兵が失笑をこらえかねて、体を二つ折りにしている。

「コーヒーにしたらどうだ。ミルクは貴官とは相性がわるいようだぞ」

「はあ、そうします」

「で、貴官の感想はどうだ。どうにか勝ったが」

「次の会戦の用意に移るべき時だと思えます。今回の戦いでドレド艦隊首脳も、我々の実兵力を知ったでしょうから圧倒的な大艦隊を動員

して来るでしょう。少なくとも五〇〇〇、多ければ一万ぐらいの」

「五〇〇〇としても倍だ。一万になれば四倍近い。倍の敵を破った戦闘には、戦史でも滅多にお目にかかったことはないぞ。それでも貴官は勝てるつもりか？」

「そうですね……」

「宇宙での艦隊戦闘は本質的に古代の海上戦闘に似ている。陸上戦闘であれば、倍の敵を逆に包囲殲滅した例もなくはないが、海上戦闘で倍以上の敵兵力を撃破した例はほとんどないぞ」

「やっつてのけられるつもりか？」

「マルクはミルクのたつぷり入ったコーヒーを一口飲んでから領いた。」

「なんとかやってみます」

“メーレンの会戦”においてドレド艦隊は三〇〇隻以上の艦艇を完全破壊、ないしは大破させられ、一〇〇隻余りを捕獲された。人的被害も甚大なものだったが、それよりもドレド艦隊司令部を痛烈に刺激したのは、撃破されたのが制式艦隊の一部だったことである。これまでの補給船団護衛部隊は巡洋艦と駆逐艦を中心とする後衛部隊だったが、少数だったとはいえ、戦艦や航宙母艦をも伴った制式艦隊が呆気なく撃破されたことは、ドレドの“無敵艦隊”の矜持をたたかに傷つけたのだ。

母星・ラントまであと一〇数天文単位を残すのみの宙域にまで侵攻したドレド宇宙艦隊は五個艦隊。フロイラス・ベルサリウス大將麾下に、ファウム・シヤペル、スイミグレイ・リッツ、リヴェルト・ダウン、ロマヌス・ウォーレンスタイン、ユイ・モローの五中將が二万

に近い大艦隊を率いていた。

第四艦隊司令官ロマヌス・ウォーレンスタインは自ら掃討部隊を指揮すると主張し、リッツ、ダウン、モローの各提督もこれを支持した。

「敵は三〇〇〇ばかりだと言うことだ。可能な限りの打撃力を伴った方が良からう」

第一艦隊のシヤペル中將も自説の放棄すべきことを認め、逆にいつそ二個艦隊一万余りを動員してはどうか、と提案した。

「指揮はウォーレンスタイン提督にお願いしよう。小官が、副司令官としてこれに従っても宜しいが？」

「そこまでは及ぶまい。シヤペル提督を部下に持つのでは、ウォーレンスタイン提督としてもいささかやりにくくはないかな」

「小官が我意を通す、とでもおっしゃるのか、総司令官閣下は？」

「とんでもない。ローク艦隊の蠢動も座視できぬ状況ゆえ、二個艦隊を割くことはできぬということだ」

「氣に食わんな、という表情で睨みつけるシヤペルの言葉をベルサリウスは否定する。」

「ウォーレンスタイン中將、第四艦隊を動員し、我が補給路に巢食う寄生虫どもを排除せよ」

ウォーレンスタイン艦隊がアージャナ・ラインを発したのは九月一日。第四艦隊五〇〇〇に、未編成だった補充部隊から二〇〇〇隻余りを加えた七〇〇〇隻、一二〇万人の大艦隊であった。対するに、ロメイチェフ艦隊は約二〇〇〇余、兵力三五万でしかない。

母星に連絡がとれるかもしれませんが、と言い出したのは情報先任参謀のクリュッペル中尉である。

「どうやってだ？」

ロメイチェフは目を剥く。アージュナ・ラインを占領され、母星に入る航路は総て封鎖されているし、通信網は全周波数帯域に涉つて妨害を受けている。

「ドレド艦隊の使っている帯域を使つて暗号を送ります。勝利の報告くらいは送れましょう。傍受され、解読されるのを予め知っているわけですから、送信内容もそれなりのものを用意すれば宜しい訳ですし、それに……」

赤毛の中尉はにやりと辛辣な微笑を浮かべる。

「参謀本部の下品な煽動演説の返事を受け取らねばならない懸念もありません」

「わかった……結構なアイデアだ。用意をしておいてくれ。ウェスコットにメッセージを送ることにする。それからな、ヒュー」

ロメイチェフはクリュッペル中尉を“ヒュー”という愛称で呼ぶ。

「全艦隊に布告しろ。妻子にでも、恋人にでも、両親にでもメッセージを用意しろ、とな。文字数やなんかの制約条件は貴官がつけるがいい」

今度はクリュッペルが目を剥く番だった。

「三五十万人分を、でありますか？」

「長けりや長いだけ、ドレドの連中も解読に手間がかかうよ。それに、解読した挙げ句が恋人へのラブ・レターとあつてはたまつたもんじゃあるまい。馬鹿にするな、と頭に来るか、それとも自分達も家族を思い出してホームシックにかられるか……どっちにしても不利には働かん」

「検閲を……しますか？」

「我が艦隊の作戦行動にかかわる部分は削らざるを得ん。そういう処

理のできるシステムがあつただろう。人間を介入させてはならん」

クリュッペルは納得したが、ロメイチェフはマールクがやや不満気な表情をしているのに気づいていた。

「不満そうだな」

「いいえ……」

「貴官に家族がないことは知っておる。これは温情ではない。心理戦を用いよ、とは貴官の作戦案だぞ。遠征一年余り、無敵ドレド艦隊将兵も望郷の念も募つてようからな。そこを衝け、と主張したのは貴官ではないか……ははあ、成程」

「なにが成程なんですか？」

「貴官、恋人はいるか？」

「……いません」

惘然たる返答に、ロメイチェフは破顔して浴びせかけた。

「甲斐性なしめが」

『……でね、ネイがね……あれ？』

アーテミシアが不意に不思議そうに眉を寄せた。アリシアの、描いたように格好のいい眉に較べるとお世辞にも整っているとは言えないが、輪郭のぼんやりした柔らかいブラウンの太目の眉は、この少女に不思議なくらい似合っている。

「どうしたの、アータ？」

『うん……パソナル・メールが来てるんだけど……変だなあ、発信者が不明だなんて、気味悪い』

「中を見てご覧なさいよ、誰が発信したのか分かんと思うわ」

『そうお？うん、見てみる』

グリーン・グレイの瞳が視線を移動させ、ヴィジフォーンの視界外でパーソナル・メールのスクリーンがアーテミシア宛てのメッセージを表示する。とたんに、アーテミシアは両目を一杯に見開き、両手を握り締めて口元にあてる。頬が見る見る真っ赤になっていくのが、アリシアにも見てとれた。

「アータ、アータったら！　どうしたの、何の手紙なの？」

『……え？　何でもないの、間違い……だと思う。うん、混線したんだわ』

嘘です、と表情が語っていた。アリシアを欺し通すのは容易なことではない。

『ごめん、アリシア……用事を思い出したの。あとでまたかけるから……』

「ええ……有難う、アータ、ネイのことを知らせてくれて」

『ううん、いいの……じゃあね』

ヴィジフォーンを切ったアーテミシアは、パーソナル・メール・コンソールのスクリーンに浮び上がったメッセージに視線を落とす。サインはなかったが、それがネイの手になるものであることを彼女は疑わなかった。

ネイはアリシアのもとへはメッセージを送っていない。

……ネイったら、いつだって姉さん、姉さんなんだもん。あなたの姉さまに較べられたら惨めこの上ないじゃない。

彼女はよくネイにそう抗議したものだった。

……ふん、だ。どうせ、ネイの一番大事な人は姉さまなんですよ。いーわよ、あたしは二番目でも三番目でも、その他大勢でも結構ですよだ。

そんなことはないよ……ネイが声を荒らげることは決してなかった。

……僕だって、いつまでも姉さん子ではいたくないから。

それでは、アリシアか自分か、いずれかを選ばなければならなかったとき、ネイはどうするのか？　そう問うたときのアーテミシアは、質問の残酷さを悟るにはまだ幼かった。無邪気な口調で放たれたこの質問を、ネイはかわすことができなかった。

ネイは、あのと時の言葉を守ったのだ、と思う。嬉しかったから、アリシアへの後ろめたさが募って、慌ててヴィジフォーンを切ってしまった。アリシアはいつもアーテミシアに優しくかったから。

カーテンを引き、窓から空を見上げる。星空を期待したところだったのだが、あいにく八月二十九日の太陽は旅程の半ばも消化し終えてはいなかった。

「ロマンチックじゃないなあ……小説のヒロインだったら、星空を見上げて恋人を想う、なんていい場面なのに」

彼女が首を振ると青いリボンでたばねたブラウンの巻き毛が揺れた。ブラウンより金髪の方がいいのにな、というのはアリシアへの軽いコンプレックスだった。アリシアのそれほど豪奢で豊かな黄金色の髪を、アーテミシアはほかに知らないから。

共和国暦七二三年 九月 七日

八月二十九日、ロメイチェフ中将は、航宙母艦『キヤメル・ステーション』のファートウリック・ラング中尉を抜擢して空母機動部隊の指揮を委ねた。またヒースクリフ・ローナクに格闘戦闘部隊指揮を兼ねさせるとともに、駆逐艦『ヴェルゲデュレイト』で敵戦艦『レクセル』完全撃破の偉功を立てたメル・ヤンデキフィテイ准尉を見出してローナクの補佐に当たらせることを決定した。これによってロメイチェフ艦隊の主要な指揮官は、クローネス・マールクが二一歳、ネイス・ミユッケルが一八歳、ヒースクリフ・ローナク一九歳、ベイ・ドレسن二一歳、ファートウリック・ラング二〇歳、メル・ヤンデキフィティに至っては一七歳という前例のない若さを誇るようになった。

もちろん、この異例の人事への反対がなかったわけではなく、殊にそれまでこれらの若者を指揮下に置いていた中堅の佐官からは秩序意識に基づく反論が生じたが、ロメイチェフは彼らの一人一人を旗艦に招き、説得を試みた。僅か三〇〇にも満たない兵力で二万近いドレド艦隊を真つ向から敵に回す以上、既存の秩序意識に従っていたのでは勝利はおぼつかないこと、勝利がなければ、生き延びることかわぬこと。さらには、マールクらの功績が比類のないものであることなど……

「……それにな、奴らが勝利を掴んだら、貴官等も救国の英雄だ。栄達は思いのままではないか。参謀本部の馬鹿どもに従って犬死にするか、それともマールクの孺子に従って救国の英雄となるか、じっくり考えた方がよくはないか、貴官ら」

そのマールクはミュッケル、ローナク、ドレسن、ラング、ヤンデキフィティらの気鋭の戦闘指揮官を旗艦に集めて、来たるべきドレド

主力艦隊との艦隊決戦準備に忙しい。

「さすがですね、ドレド宇宙軍は……」

そう感想を洩らしたのはネイス・ミュッケルだった。ドレド宇宙軍が母星・ドレド間の航路図、及び星域図を完璧なまでに整えていたことに対する素直な感嘆である。立体写真三〇万枚、航路図四〇〇枚、立体スクリーンに表示される3D模型データが二万五〇〇〇枚分……とドレド宇宙軍参謀本部の勤勉さを証明するデータが、捕獲艦のデータバンクから取り出されていたのだ。ドレド宇宙軍側の、この充実ぶりに較べれば、共和国宇宙軍参謀本部は遊んでいたに等しい。本来、仮想戦場の星域図を整備し、未来の戦争に備えるはずの参謀本部が宙域図はおろか航路図さえ満足に整えておらず、開戦後、民間の恒星間輸送会社から商業航路図を取り寄せるという醜態をさらした。将兵二〇〇〇万を数える共和国宇宙軍中、僅か一〇〇〇人ほどの人員を占めるに過ぎない参謀本部は、しかし宇宙軍予算の内の二割以上を独占していたのだ。それらの莫大な予算は何処で消費されたのか？

「うん、そうだね。よっぽど暇だったんだろうね」

マールクの返事は、一堂に会した若者達を哑然とさせたものである。

「暇……ですか？」

「暇じゃなかったら、こんな沢山の資料を整える気にはならなかったとは思わないかい？ いや、そんなことはどうでもいいよ、おかげでこっちは自前で資料を集める手間が省けたんだからね」

本当にこの人物が、ロメイチェフの言うような“名参謀”なのだろうか？

その疑問は、初めて彼に接するラングやヤンデキフィティだけでなく、ローナクやドレスンでさえ露骨に表情に表していたのである。

「マールク中尉にお聞きしたい」

ローナクの声は挑戦的にさえ響いた。

「ドレド艦隊は二万、我々の現有する戦力はたったの二〇〇〇。それでも勝てますか？」

「勝てるわけがないよ」

マールクはあつさり答え、ローナクは呆気にとられる。

「しかし、中尉は、ドレド制式艦隊と戦うと言われたでしょうが？」

「勝てそうな敵が出て来たら戦う。大体二〇〇〇で二万のドレド艦隊とどう戦うんだ？ 一人で一〇人を相手に喧嘩はできないだろう。しかし、相手が一〇人でもその内の一人、又は二人づつを相手にするならやりようはある。そう思わないかい？」

ローナクは虚を衝かれた表情になった。

「確かに……」

率直に認めるところは、固定観念にとりつかれて他人の意見を一切受け付けない参謀将校とは異なる柔軟さだった。

「どうやって各個撃破するんです？」

ローク中将の本国艦隊がここで重要になる。ローク中将の指揮下に入っている艦艇は、本国艦隊五五〇〇とナキヤソ要塞への残留部隊九〇〇を合わせて約六五〇〇……老練なローク提督がナキヤソ・ラインを盾にとつて活発な抵抗を続けていれば、二万のドレド艦隊といえども後方保全に全力を上げることは難しい。

「……で、多分一個、或いは一個半艦隊を派遣してくるだろうけれどね、自然に兵力の逐次投入をしてくれることになる。別にお願ひする必要はないんだ」

「それでも五〇〇〇から七〇〇〇。大変な兵力です」

「うん、ちよっと多過ぎるね。一五〇〇隻くらいで来てくれると有り難いの……」

「ここが綱渡りだ、とマールクは若い戦闘指揮官達を見回す。柔和な灰色の瞳が一瞬、鋼の色彩を帯びたようだった、と書き残すのはファートウリック・ラング。臨時大佐であるが、これは褒め過ぎだろう。が、マールクの語った戦略構想は五人を驚倒させたのである。

「そんなことができるのですか？」

穏やかなネイでさえ思わず口調を鋭くし、ローナク、ドレスン、ラング、ヤンデキフィティは声もなくこの平凡な容貌の青年を見つめている。

マールクは穏やかに受けた。

「できなければ負けだ。わたしは死にたくない、だから早くいくように全力を挙げる。協力したくなかったら申し出て欲しい。一人でも消極的な指揮官がいると、そこで破綻するからね」

ずっと前に見た映画の主人公に『負けると分かっているけど、戦わねばならない時があるのだ』という科白があつた。格好はいいが、あんな科白は、勝てるように戦いをデザインできなかった無能者の自己弁護でしかないではないか、とマールクは思うのだ。大体、一体誰が負けるとわかっていて戦争など始めるものか。まして、ロメイチェフ艦隊には四〇万人近い将兵が属している。四〇万の生命と、それに連なる家族の運命を、個人の趣味で断ち切る権利などあるわけではないのだ。

「とりあえずはそういうことだけど、納得して貰えたかな？」

内心とは別に、軍人的な堅い口調とはまったく無縁な調子で確認するマールクに、五人は一斉に敬礼する。最初、ネイを除いた五人の目にあつた疑念の色は消えたか、少なくとも薄らいでいた。

「ネイ……」

作戦会議室を退出する新任の指揮官達を見送りながら、マールクは淡い金髪の若者のほっそりした後ろ姿に声をかけた。

「悪いな、愚痴を聞いてくれないか……」

「ええ、どうぞ」

ネイは感じのいい微笑を浮かべて振り返る。マールクはちよつと苛立たしげに立体表示スクリーンのコンソールの前を動物園の熊よろしく歩き回った。

「……恐いんだよ。本当はね」

ややあつてマールクの発した言葉はネイを驚かせた。

「恐い……ですか？」

「うん、恐いんだ。たまらなく……」

「勝てるかどうか分からないから？」

「勝てるかも知れないとは思っているよ。怖いというのは、勝ち負けとはちよつと次元が違うんだ。我々が勝つてことは、どういうことを意味すると思う？」

マールクの言葉の意味が理解を生じるまで、ネイは数秒の沈黙を先行させた。

「ドレド艦隊二万、将兵は四〇〇万……彼らの大半を殺し尽くさなければ、わたしたちの勝利はありませんね」

「当たり前。それに四〇〇万人だけじゃないよ。ル・ラントにもドレドにも、何十億つという人口があるんだ。そのことを忘れちゃいけない」

以上、彼らの生命を断ち切ることでしかマールクは己れの生命を全彼らの運命さえ、自身の掌の上に乗っているのだとしたら……そう思ったとたんに、マールクは全身の血液が足の方へ逆流して行くのを感じたのだ。

「思わないようにしないと、溺れそうになる。パニックに掴まれそうになるんだよ。そのためには話をしているのが一番だ」

加えて、自分が本当にその役なのか、という疑問がマールクの脳裏

から離れない。もつとふさわしい人物がいるのではないか。

……戦争は大量殺人作業。殊に宇宙艦隊による艦隊戦闘では、一度の戦闘で数十万人単位の戦死者が出る……

自分が大量殺人作業に従事することをアリシアはどう思うだろう……ネイはふと、そう思う……しかし、家族と、そして隣家に住む巻き毛の女の子を守るのに他人の手を汚させるよりも自らの手を血に塗れさせる方を選びたい。

「たとえ他に誰かいるとしても、間に合いません。マールク中尉殿は舞台上上がっている人たちの中では最も適任ですから、役をこなして頂かなければなりません」

「あは……そうだね。遅れてくる真打ちよりも、間にあつて前座の方がましかもしれないね。まあ、でもなんでわたしがこんなことをやらなければならないのかねえ……」

「代役がいまさんから」

ネイは微笑んでマールクの愚痴を受け止めた。マールクは諦めたように軍帽を脱ぎ、褐色の髪を掻き回した。

「それは反論の余地がないねえ……」

「後方撓乱を行っている敵艦隊から母星への送信内容の解読が完了しました」

第四艦隊旗艦『ヴェルゲナンデイ』の情報先任参謀が艦隊参謀長シヤローン少将のもとに出頭した。

「驚くほどの量でしたが、ほとんどは私信でした。ただ……」

重大な情報がある、と前置きして、参謀はロメイチェフからローク中将へ宛てた通信文を示す。

「艦隊兵力の増援を求めています。会合宙点も指定されています」

「ロメイチェフは食わせ者だ。罠ではないのか」

「想定航路に偵察艇隊を派遣しましょう。罠なら罠でもいい。噛み破るだけのこと。ロメイチェフの艦隊を探し求めて航路上をくまなく探査できるほど我々の兵站は豊かではありません」

作戦先任参謀の主張をシヤローン少将は容れ、ウォーレンスタイン中将もそれを了承した。五次にわたる輸送船団をことごとく破壊されたために、彼らの作戦は著しく制約されることになっていたので。ウォーレンスタインは、七〇〇隻に及ぶ彼の艦隊を四分し、リュッヘル、トゥーゾフ、ダブーの三人の少将に指揮させて分進させ、会戦予想宙域で合流、ロメイチェフ艦隊を包囲撃破する戦略に拠ることにした。

九月三日、ウォーレンスタインはベルサリウス大将からアージャナ・ラインの突破を図る一二〇〇隻ほどの共和国宇宙軍艦隊が捕捉されたこととの通報を受けた。

「撃破の要なし。通過せしめられたし」

昂然としてウォーレンスタインは打電する。

増援艦隊は、彼の艦隊をロメイチェフの本隊へ案内してくれることだろう。ロメイチェフ艦隊は多く見積もっても二五〇〇。合流を許しても四〇〇〇にはならない。二分の一以下の劣勢に変わりはないのだ。

「おそらく、ワルステート・ジャンクシオン宙域でロメイチェフの艦隊と遭遇することになりそうですね」

シヤローン参謀長の見解は、ウォーレンスタインも全面的に首肯するところだった。ワルステート宙域は、ドライバオム宙域から三〇〇光年余りの青色超巨星と白色矮星の連星系で、ドレドから母星へいたる航路は、この宙域の外縁でルートⅠからルートⅢに分岐する。航路

上の要衝の一つと言ってよく、“ジャンクシオン”の異名を持つ。

「分進合撃戦術に理想的な宙域を向こうが選んでくれたわけですな」

「しかし、ワルステートも主星の不安定な恒星系だ。メーレン会戦同様、宙域内の戦闘となるといささか厄介ではあるな」

「大軍に戦術なし、と言います。三〇〇〇やこれらのロメイチェフ艦隊がこうるさく策動したところで我が艦隊を撃ち破ることなど不可能事です」

「だいいがな」

ウォーレンスタインはブリッジ上部のビュー・スクリーンに視線を転じることで、参謀長との会話を打ち切った。

「……」

アリシアはコンソールに表示された数字の列に視線を据え直した。

突然、情報処理センターを満たしたどよめきにアリシアは反応しなかった。彼女の見つめる情報表示スクリーンは、惑星アージュナの衛星軌道を離れたドレド艦隊の一部が急速に母星へ接近してくる旨を表示している。

“敵の主力三個艦隊約一万三〇〇〇、母星周辺宙域へ機動攻撃を敢行。

我が本国艦隊はナキャソ・ラインでこれを迎撃、その大部を撃退することを得るも、一部大気圏内空襲部隊の侵入を許せり。母星防空戦闘準備を請う”

「一体何をしとるんだ！」

憤激の叫びがアリシアの後で上がっていた。“巡回”中のドロク中將が口汚くドロク中將の“愚将”ぶりを非難していた。

「何の為の本国艦隊かつ！」

防空戦闘の指揮を要求する声はどこからも上がらなかった。ドロクもワシエックも戦闘を指揮できる意思も能力もないことは明らかだったが、敢えてそれを指摘すれば、危険な前線へ飛ばされるのが落ちなのだ。

「たかが一万くらいの敵艦隊ごときにうろたえおって」

『敵機動部隊、約一〇〇。メルトウ州シエリ市上空に到達……第三四防空基地より、対空戦闘の許可を求めてきています』

ドロクは一言“許可する”と喚けばよかったのだ。が、第三四防空基地の司令官は致命的な失策を犯した。

“許可が得られなければ、独断にて戦闘を開始する”

それが病的に肥大し切った参謀本部の自尊心に痛烈な一撃を浴びせた不要な一言。

ターク参謀総長はヒステリックな悲鳴じみた応答で応える。

“参謀本部よりの直接命令がなければ、戦闘に突入してはならない。背反すれば、軍法会議に訴追されるであろう”

上空に迫るドレド機動部隊にまでは参謀本部の威信は届かない。

五〇〇の巡航艦隊を与えられ、追撃に移っていた本国艦隊副司令官ドウリユー・ラ・マーク大佐は、旗艦のブリッジで怒声を発した。対空ミサイルと戦闘衛星を駆使して防空戦闘を展開するはずの第三四防空基地は沈黙を守り、ドレド機動部隊は乗じて大気圏内用の艦載機群を放ったのだ。

「いかん、やられる。なぜ迎撃しない。自殺ではないか！」

マークの来援は一瞬遅かった。いや、第三四防空基地が対空ミサイルと戦闘衛星を駆使しての迎撃戦を展開してさえいれば、ドレド機動部隊の攻撃は遅延し、マークの追撃部隊との間で理想的な挟撃戦が実現されたであろう。

シエリ市の悲劇を増幅したのは、退避命令発令の遅延である。参謀本部は第三四基地に戦闘禁止命令を出すときには驚くほどの手際の良さを示したが、シエリ市民への退避命令が必要であることを指摘した参謀はいなかった。シエリ市民五〇万のうち、五万人余りがそれでも救われたのは、第三四防空基地が辛うじて警報を発したからにほかならない。

ドレド機動部隊は、マーク部隊の接近を知ると固執せずに艦載機を収容してさっさと撤収していった。それでも数隻の巡航艦から、防空基地に艦砲を叩き込むことを忘れなかったのはさすがと称するべきか。

ドレド艦隊の機動攻撃は、ウォーレンスタイン艦隊の後方出動に呼応した陽動作戦だった。圧倒的な兵力を動員してローク艦隊を釘付けにし、少数の空母機動部隊をはなつて母星を急襲させる。

「共和国政府と参謀本部の阿呆どもは狼狽してローク艦隊に母星の固守を命じましょう。ウォーレンスタイン提督の不在を衝かれる恐れは大幅に減ることになりますからな」

作戦を立案したファウム・シャペル中将の指摘通りになった。

共和国政府は、“むざむざと敵艦隊の侵入を許したローク艦隊の犯罪的怠慢”を“厳しく叱責”し、母星固守を厳命する一方、“的確な指示を下して敵艦隊を撃退した”参謀本部の“判断力の素晴らしさ”を美辞麗句を連ねて讃えたのである。

政府と癒着し、政府の敵を公共の敵として攻撃することに自らの存在意義を見出していたマス・メディアもこぞってローク中将を非難し、本国艦隊司令官の更迭をさえ主張し始めるに至っていたのである。

「やっつけられるか、くそっ」

ローク中将の罵声は当然のものだったろう。

シエリ市民の死傷者四〇万余。第三四防空基地は半壊し、一万人

の基地要員の三分の一が失われた。大戦争にはありがちな、ささやかな“事件”に過ぎなかった。

この時は誰もがそう思っていたのである。

九月七日、ウォーレンスタイン艦隊は三本のルートの合流点……通称ワルステート・ジャンクションに達していた。

予めジャンクションに配置されていた無人哨戒衛星が大艦隊の接近をロメイチェフ艦隊に通報する。

「客人たちが到着しました……三方向から包囲合撃を図る模様です」クリュッペル中尉の声が緊張を孕んだ。

「増援艦隊を二五〇〇隻ほどが追尾しています。距離は約五〇〇光秒。その後方に約二五〇〇の部隊が一〇〇〇光秒の距離をおいて追従しています。さらに……」

左翼方向からは一五〇〇隻、天頂方向からも一五〇〇隻が、会同予定宙点に対してそれぞれ二〇〇〇、ないし二二〇〇光秒の距離に迫って来ている。ロメイチェフの本隊は会同予定宙点まであと五〇〇光秒……集中包囲網の中に自ら首をつっこもうとしているかに見える。

「これは我が艦隊の壊滅を意味するなあ……」

ロメイチェフは無遠慮に評し、艦橋要員が顔色を青ざめさせる。

「ピンチはチャンスと二人連れですから……」

マールクがにこりとして応じる。

「我が艦隊を壊滅のピンチに曝さないと、ドレド艦隊を落し穴に落とすわけにはいきません」

「できれば、二度はやりたくない作戦だな、そうは思わんか？」

「思います。もっと楽に勝てるだけの兵力を用意するか、それとも戦

争なんかしなくて済むようにしてほしいもんです」

「それは言うなよ」

苦笑し、ロメイチェフは艦隊の進路変更を命じたが、それはこれまでの艦隊運動の常識から言えば不可解な指示だった。

航路を天底方向へ変更、全速で前進し、天頂方向に旋回しつつ増援艦隊の後方空間を指向せよ。

「これでは敵主力の二隊に挟撃される態勢になりますが……」

「図上ではな……」

豪胆な提督は艦長の疑問に微笑で応える。

「しかし、実戦ではそうはならん。我が天才参謀がそう仰せだ。指示に従え」

“敵艦隊、想定合流宙点に達せず……現在、全力を上げて敵の新航路を探索中なるも、依然成功を見ず！”

ウォーレンスタインが予想外の報告に愕然となったのは、予定戦場までの距離を一〇〇〇光秒以内に詰め、『……全艦将兵に告ぐ。勝利は疑いあるなし。奮励し、努力せよ』と訓示を結んだ直後、九月七日母星標準時八時五五分。

凶報は踵を接してウォーレンスタインのもとに報じられた。

「天底方向、距離五〇光秒に未確認艦隊約二五〇〇！」

「確認急げ、全艦戦闘配備！」

では増援艦隊そのものが囷だったのか……ウォーレンスタインは共和国宇宙軍艦隊の戦術を悟って愕然とした。一二〇〇隻もの艦艇をむざと遊兵に甘んじさせるとは……

「敵艦隊です、ロメイチェフ艦隊です！」

「戦闘準備、砲門開け！」

叫びが狼狼の響きを帯びて交錯する。戦闘開始を二時間以上あとに予定していたところにいきなり敵艦隊に懷に飛び込まれたのであるから、将兵達が浮き足だつのは当然だった。首将のウォーレンスタインですら動揺から立ち直れないでいるのだから……

「敵はうろたえている、一気に射程につっこむぞ」

戦闘集団を率いるヒースクリフ・ローナクは大きく腕を振って叫ぶ。双眸が華麗な碧い焰を宿して兵達を圧倒した。

「メル、最初の三発を叩き込んだら突撃しろ。格闘戦だ。旗艦を最初に殺れば、敵の艦隊は崩壊するぞ」

“了解……”

「主砲、副砲、全力斉射、連射三連……撃てえっ」

光の槍が虚空を貫き、ウォーレンスタイン艦隊の先頭集団を粉々に撃砕する。集中された膨大なエネルギーの奔流は防禦シールドを貫通し、装甲を撃ち砕き、動力炉を、核融合宙雷を誘爆させて、燦然たる核融合爆発の閃光を巻き起こす。

「突撃、全速突撃！」

メル・ヤンデキフィティ麾下の軽捷な格闘戦艦艇が踵を接するようにウォーレンスタイン艦隊の艦列に突入した。螺旋状の航路を描きながらウォーレンスタイン艦隊を掻き回し、エネルギーの槍を投擲し、獐猛な宙雷の制御を解き放つ。

「我々の番らしいぞ。行けえ！」

ドレスンが吠え、すでにしたたかな打撃を被っていたドレッド艦隊に痛烈な第二撃を浴びせかけた。

「うろたえるな……！」

ウォーレンスタインの叱咤も効果はなかった。両翼をローナク、ド

レスンの巡洋艦艦隊に突破され、前衛集団はヤンデキフィテイの格闘戦艦艇に攪乱され、統一した艦隊指揮はとくに失われていたために、ドレド艦隊は個々の艦艇ごとの勇戦にたよる以外になかった。鮮やかな艦隊運動を見せるロメイチェフ艦隊の前にはさしたる効果もなく、個々に追い詰められ、片端から破壊されていく。

会敵一時間にして、ドレド艦隊からは整った戦闘隊形も完全に失われた。

「そろそろ、頃合だな。とどめを刺すぞ」

ロメイチェフの指揮振りは熟練した職人のものだった。同意を求める司令官の視線に、マールクは肯定的な頷きを返す。

「どうして頃合とお分かりになるんですか？」

「貴官もそう思ったんだろうが？」

「ええ……だから一層……」

「前にも言ったが……貴官は天才なのさ。ふむ、貴官にも戦機が見えるのか……貴官は戦略だけでなく、戦術眼も中々のものらしいな。

なあマールクよ、俺もいつ戦死するか分からん……その時は、お前にこの艦隊を任せるよ」

「閣下……」

「が、まあ、さしあたりはこの敵に勝つことだ」

ネイス・ミュッケルの巡航戦艦部隊とロメイチェフ直率の大型戦艦部隊が整然たる大口徑主砲射撃を叩きつけ、ついでラング直率の艦載機集団がウォーレンスタイン艦隊の中枢に躍り込む。

ウォーレンスタインは旗艦の周囲が炸裂する閃光と焰に取り巻かれるのをまのあたりにした。核融合宙雷が艦腹で炸裂し、『ヴェルゲナディ』は激震に見舞われたビルよろしく激しく動揺する。

「閣下、この艦はもうだめです。退去をお願いします」

艦長のトニー・ドルセット中佐が悲痛な声を上げた。四基の動力炉の内、二基までが火災を起こし、誘爆は時間の問題だと言う。

剛勇をもって知られたウォーレンスタインも蒼白な表情で頷く。

「他の戦艦に移乗する。シャトルを用意させよ」

だが、ロメイチェフ艦隊はウォーレンスタインの脱出を許さなかった。戦艦『シムス』の主砲射撃がシャトル・カタパルトを吹き飛ばし、超高熱の焰を『ヴェルゲナディ』の艦内に吹き込んだのだ。

超高熱の衝撃波の直撃を受けて瞬時に炭化した死体と化した搭乗員はむしろ好運だった。白熱する装甲に叩き付けられて生きながら焼かれ、飛来する金属、セラミックスの破片に手足を吹き飛ばされた兵達は、傷口から、口から血のシャワーを吐き散らしながらのたうちまわった。飛散した装甲の破片で腹部を切り裂かれた兵士の傷口からは、血に塗れた内蔵が飛び出して灼熱したフロアの上で白煙をあげ、苦痛に耐えかねて狂気のようにのたうち回る彼らを灼熱の爆風と閃光が薙ぎ倒した。

「助けて、だれか、だれか！ 母さん……」

年若い兵士が泣き叫ぶそのうえを、焰と煙に追われた戦友たちが駆け抜ける。骨の碎ける音は耳を聳する炸裂音にかき消された。

突然、一切の色彩が純白の閃光の中に個性を失った。ヤンデキフィテイ麾下の駆逐艦の放った宙雷が断末魔の『ヴェルゲナディ』にとどめを……この場合は慈悲深い……刺したのだ。

“敵旗艦撃破を確認、組織的な抵抗は終わりました”

戦場を支配していたECMがおさまり、ミュッケルの端正な姿が旗艦のスクリーンに現れた。

「くくろうだった……さてと」

ロメイチェフは視線を転じる。参謀長兼任作戦参謀は紙コップを大

事そうに握り締めながら司令官を見上げた。

「次だ。どれをやる？」

「このままの進路を保持しつつ、天頂方向の部隊を叩きましょう」

「妥当だな。兵達には飯を食わせておけ。寝てる暇はないだろうが……ふむ、会敵まで一時間の予定……か。俺は寝るぞ、よろしく頼む」

「は……」

ロメイチェフ自身、これほど勝てるとは思っていなかったのだ。勝てはするだろう。しかし、ドレッド艦隊も五年間にわたって共和国宇宙軍艦隊を撃破し続けてきた精鋭であり、一方のロメイチェフ艦隊の将兵は学徒兵、敗残艦隊の生き残りではない。勝てるにしてもかなりの苦戦を予想していたのだが、実際には兵士たち自身が呆氣にとられるほどあっさりとウォーレンスタイン艦隊の中枢部隊を殲滅してしまっているのだ。

「敵、約一五〇〇隻を完全破壊、三〇〇隻余りを大破させました。味方の損害は一〇〇までいっていません……大勝利ですよ」

「まだ終わってないよ。四隊に分かれてるドレッド艦隊の内、あと二隊くらいをいまの調子で撃破できたら大勝利だねえ」

たしなめるマールクに、クリュッペルは不審そうな眼差しを注いだ。

「全隊を叩かなくてもいいんですか？」

「四分の三やられたら、あとは逃げると思わないかい？」

「向かって来たら？」

「包囲するしかないだろうね。それで降伏してくればよし……ヒュー、まだ四分の一しか叩いてないんだ。先走りし過ぎだよ」

ウォーレンスタイン麾下のリュッヘル、トオーゾフ、ダブーの三少将の率いる各分艦隊はそれぞれ第二、第三、第四任務群と呼ばれており、天頂方向からロメイチェフ艦隊に向かっていたのはダブーの第四

任務群一五〇〇隻余りであった。

九月七日、母星標準時一〇時四九分、ダブー少将は“敵艦隊らしきもの約四〇〇〇、天底方向より急速接近、距離三〇光秒”の報告に思わず腰を浮かした。

「どこの敵だ……ローク艦隊が追尾して来たのか？　しかし、なんで天底なのだ。本隊のいる方向ではないか」

「いずれにしても敵です。戦闘準備を！」

「第一級戦闘配備、敵艦隊の座標を全艦に通知」

狼狽しながらもダブーはとにかく対応措置をとった。

「凸型レンズ陣形を取れ。密集して敵艦隊の包囲を撃ち破る」

「敵、来ます！」

ロメイチェフ艦隊の先駆、六〇〇隻の高速巡洋艦艦隊は、ローナクとドレスン、二人の猛将に叱咤されて最大戦速で突進、射程内突入と同時に長中距離射撃システムの全火力を解き放った。

凄まじい破壊力を秘めた光の槍がたてつづけに投擲され、両軍の前衛部隊を核融合爆発と超融合爆発の閃光で染め上げる。陣形変更のために急速移動中だったダブー艦隊右翼集団は、ローナクとドレスンの先制射撃にしたたかに撃ちすえられたが、猛撃に耐えて踏み止まると、報復の斬撃を閃かした。

ローナク、ドレスンの両部隊の行き足は瞬時に停止した。両部隊はダブー右翼集団の反撃に耐えかねて突進を停止し、次の瞬間には悲鳴を上げて逃げ崩れた……と見たドレッド艦隊はとどめの一撃を狙って、両部隊が後退した空間へ躍り込む。

「今です。二三三・二一・マイナス三三宙域に全力斉射。同時に最大戦速で前進」

『ブルーリッジ』艦上でネイス・ミュッケルは微かに微笑み、右腕

を閃かした。

一瞬に攻守は、そのところをかえた。勝利を確信して数分後に、ダブー艦隊は敗北に直面している自らを見出して愕然としたのである。

ローナクとドレسنが後退し、ロメイチェフとミュッケルの重火力部隊が両翼に突出する。正面からは、ダブー艦隊が振り下ろしたエネルギーの刃をかくぐつてヤンデキフィティの近接格闘集団とラングの空母艦載機集団が喉元に食らいつき、両翼から半包囲した戦艦集団からの火線がドレド艦を無慈悲に串刺しにし、輪状に切り刻む。

「後退、後退だ。後退して、隊形を整えろ！」

ダブー少将の必死の指揮も功を奏さない。辛うじて反転した後方集団も複数から集中する破壊力の豪雨の前に反撃もままならず粉砕されたのだ。急速後退したローナク、ドレسنの両部隊がそのままの勢いを維持しつつ戦場を旋回し、ドレド艦隊の後背に回り込んでいたのである。

ロメイチェフ艦隊の艦隊運動は神技というに近かった。会敵僅か四五分、ダブー少将は旗艦の周囲に一隻の味方もいないことに気づいた。

「敵戦艦、接近します！」

電子戦士官が救いを求めるように司令官をふりあおいだ。彼らの忠誠の対象は、指揮シート上で蒼白な表情を凍りつかせていた。

「何十隻という数です……」

「味方は……一隻もないのか？」

「敵ばかりです、閣下」

ダブー少将の分厚い肩がぐくりと下がった。

「降伏信号を打て、責任はわたしがとる……」麾下全艦隊に、降伏信号を発信させよ。連絡できる範囲でいいが……」

ロメイチェフは降伏申し入れを受諾し、ダブー艦隊次席指揮官のヴ

アン・ホーン准将以下の要員を僚艦に移して後、ダブー少将とともに旗艦を宇宙に葬り去った。ダブーは降伏後、ブラスターで頭を打ち抜いていたのである。

……降伏して部下の生命を保証してから、自らの戦闘指揮の拙さへの責任をとる。敗軍の将としては上での部類だろうな。俺もできたらそうしたいが、俺は死ぬのが恐いから、できれば負けたくないもんだ。

のちに、ロメイチェフはダブーの自決をそう評している。自らは戦わず、他人の犠牲ばかりを強いる共和国宇宙軍参謀本部の参謀たちとの比較が胸の裡を底流していたことは想像に難くない。

ロメイチェフはダブーの降伏を受けると、指揮シート上で軍帽を顔の上に載せ直して、もう一回寝るぞ、と宣言した。そして、困惑して艦の進路を問う旗艦艦長に向かって言い放ったのだ。

「そんなことはそいつに尋ね。そいつがみんな知っている」

ロメイチェフが指差したのは言うまでもなくマールクだった。

異変に先に気づいたのは予定通りに合流宙域に達したロメイチェフへの増援艦隊である。指揮官のレーメン・タール少将は凡庸を絵に描いたような提督で、増援艦隊指揮官などという危険極まりない任務を与えられた我が身の不運をばやいてばかりいる一方、部下には絶対服従を要求する参謀将校の典型だった。

二五歳になるセルティ・マックス大尉と二二歳のレイトウラント・シャブリ中尉は、このタール少将の幕僚チームの一員だった。が、ふたりともマールクと同じ学徒兵上がりであり、極端な秩序主義者であるタール少将は彼らを軍人とは認めていないようだった。

ところが、戦場突入し、合計七〇〇隻以上のウォーレンスタイ

艦隊に四方向から攻囲されるという窮地に陥った途端、タール少将は指揮官としての自覚も責任も投げ捨てて旗艦『ロートリンゲン』の司令官私室に閉じ籠もってしまったのである。艦隊主席幕僚のボック大佐も茫然としてなすところを知らなかったから、増援艦隊を追尾していたトオーゾフに積極的な意思さえあれば簡単に各個撃破の対象にできたに違いない。

マックスとシャブリにとって幸いなことに、ボックは才能にも意志力にも乏しかったが、この時期の参謀将校には希有のことに他人の意見を容れる度量には恵まれていた。と言うよりも、包囲される窮地に陥って初めて、演習^{シミュレーション}などでは常に抜群の成績を上げてきたふたりの部下をにわかにあてにし始めたのだ。

「予想宙域にロメイチェフ艦隊の艦影を見ず……か。どう見る？」

マックスは四歳年下の僚友に問うた。のちに良将と讃えられる彼にとつても、彼らを囿^こにしての各個撃破などという戦略構想は洞察の範囲外だった。

「我々は囿……だろうなあ。このままの速度で指定宙域に到着すれば、我々だけで袋叩きになるから、いつそ速度を落として、尻に食いついてる奴と一戦交えたらどうだ？」

「簡単に言うけどな、数でこそ一二〇〇と一五〇〇。ドレド艦隊^{れんちゅう}はより抜き^{マックス}の精鋭。我々は、寄せ集めでしかないってことを忘れてもらっては困る」

僚友^{マックス}の早口に顔をしかめながらシャブリは応じる。高等学校卒業後、コンピュータ・メーカーで数年のキャリアを積んでから大学院博士課程^{ドクター・コース}へ進むという異色の経歴を持つマックスは、しばしば言語中枢がスピード違反を犯すことで有名だった。

「じゃ、逃げ回ったらどうだ？」

「それも拙い。そんなことをしたら、それこそ各個に撃破されるだけじゃないか。なんとか、ロメイチェフ提督に合流できる策はないか？」
「そうじゃない。悲鳴を上げながら、一団になって逃げる。ロメイチェフ提督が畏を仕掛けたのなら、その内、悲鳴を聞きつけて救援に来て貰えるだろう」

「見捨てられたんだったら？」

シャブリは小柄な肩をひよいと竦めて返答を投げ返したが、それはマックスの予想したものと一語一句異なっていなかった。

「なら、死ぬしかない。心配するな、人間、二度は死なないよ」

「聞いた風な口を利かないでくれ」

“ウオーレンスタイン中将はすでに戦死、ダブー提督も包囲されて降伏の後、自決”

驚愕が、リュツヘル、トウーゾフ両任務群の神経回路を突っ走った。数にして四〇〇〇、ウオーレンスタイン艦隊の半ばが消滅し、今や勝ち誇るロメイチェフ艦隊は個々の任務群よりも遙かに優勢を誇っているのだ。

リュツヘル、トウーゾフ両少将とも戦術能力に於いては無能とは縁がなかったから、劣勢の挽回には直ちの合流が必須であるという認識を期せずして共有していた。

偶然^{偶然}の悪魔からの使者は、タール少将の増援艦隊だった。

彼らは生文で座標を打電し、ロメイチェフに救援を仰ぐと同時に速度を上げて宙域の離脱を図ると言う不可解な運動を開始し、トウーゾフを戸惑わせたのだ。

判断に迷ったトゥーゾフはリュッヘル艦隊との合流を忘れ、タール艦隊の尾撃という当初の任務に固執することになってしまったのである。

ダブー任務群を撃破したロメイチェフ艦隊はタール……正確にはマックスとシャブリ……からの悲鳴を無視して巨大な半円航路を描きつつ、七日一五時七分にリュッヘル任務群を天頂方向から至近に見下ろした……もつとも、それは重力の呪縛を免れ得ない人類の感覚上の相対位置に過ぎないのだが……

マールクの悪魔的な……とはドレド宇宙軍将兵が彼を罵った言葉だが……巧妙さは、自然なループを描きながら、しかもリュッヘル任務群を左側背から叩くポイントに艦隊を誘導したことであろう。

先制の猛射がリュッヘルを後背から叩きのめしたあと、本隊とミューケルの戦艦部隊が二方向に分離しつつ、リュッヘル群の上下両翼へ集中的な斉射を叩き込む。宙雷の軌跡が流星雨のようにドレド艦隊の艦列になだれ落ち、炸裂する弾頭と誘爆する動力炉の閃光が連鎖する火球の群を現出し、燦然たる破壊と殺戮のタペストリを織り上げる。

リュッヘルは挟撃を予想して予備隊を上下両翼部隊に投入して支えさせ、反転しつつ反撃を加えようと試みたが徒に艦列を混乱させ、ロメイチェフの突進を誘っただけに終わった。

上下両翼に予備隊を増援し、リュッヘル群がその中央部の密度を薄めた、とみるやローナクとドレスンは獲物に躍りかかる猛虎と化してドレド艦隊の真っ只中に突撃を敢行、動揺するところに艦載機の集団がなだれこんだ。

勇猛を謳われたリュッヘル任務群も瞬時に四分五裂、三〇分足らずで潰走状態に陥る。ロメイチェフは予備隊として握って置いたヤンデキフィティの格闘戦集団を放って徹底的な追撃にかからせ、一六時過

ぎ、ヤンデキフィティはリュッヘルの旗艦を捕獲して彼の任務群を事実上全滅させた。

“ワルステート会戦”において、ドレド艦隊の戦死傷者は約七〇万、捕虜約三〇万、喪失艦艇六六〇〇隻余り。一方のロメイチェフ艦隊の死傷者は約二万人、喪失または大破して戦闘力を失った艦艇は一三八隻。当のロメイチェフ艦隊将兵自身が呆然とするほどの完勝だった。会戦後間もなく、タール少将の増援艦隊とも合流し、捕獲艦艇を加えてロメイチェフ艦隊の兵力は四〇〇〇隻を上回った。

「凄いな……」

会戦終了後、ネイは『ブルーリッジ』の艦上で感嘆を新たにする。僅か二五〇〇隻に足らない兵力を風車のように振り回し、三倍近いウォレンスタインの艦隊を手玉にとったマールクの軍事的天才は驚嘆の一語に尽きた。もつとも、ネイ自身、神技のような艦隊運動を演出し、ダブー艦隊を初めとするドレド艦隊を壊滅させているのだから、ひとりマールクのみが感嘆の対象にされるべきではないだろうが。

しかし、同時に彼は心が冷えるのを感じる。

会戦後、彼が旗艦艦内を見回ったとき、彼の姿を見出した将兵は歓呼して彼を迎えた。『ブルーリッジ』も完全には無傷ではなく、艦腹の何箇所かを光の剣で切り裂かれており、三〇名余りの死傷者を出していたのである。それは、ネイが単なる……後にそう呼ばれるようになるが……智将にとどまらない陣頭の勇者でもあることを示していたのだが、同時に彼の目に宇宙戦の凄惨さをじかに映す結果になった。

超高速で四散する装甲の破片を全身に植え込まれ、あるいは瞬時に四肢を切断されてロボット義肢に替えられた重傷者……炸裂する核融

合弾、中性子砲弾に皮膚を灼かれて、全身を人工皮膚に覆われ、強烈な放射線に焼き尽くされた内臓を人工の臓器に交換されてサイボーグとかわるところのなくなった兵士など……ベテラン兵等には、全身の七割近くをサイボーグ化された者も数多いのだ。

彼らの姿は、繊細なネイにとつては正視に耐えなかった。それでも彼らは生き延びた。戦死したドレドの将兵五〇万人以上、ロメイチェフ艦隊将兵一万人以上が永久に家族のもとには帰れなくなったのだ。もし、自らすすんで軍人たるを志したのであれば、この巨大な殺人作業は彼の精神を押し潰したかもしれないが、マールクを初めとしてこの時期のロメイチェフ艦隊の指揮官には共通の諦めがあった。

マールクはしばしばこぼしている。

「真面目に勉強してたのに戦場に引つ張って来られて戦争をさせられてるんだ。こっちだって死にたくはない。死にたくないからって必死で頑張った結果にまで責任をとれ、ってんだったら、文句を言っただでさっさと戦争を止める工夫をするか、それとも自分で戦場に出て来て交替してくれればいいじゃないか」

もっとも、それはネイと二人きりになった時だけで、文章にもしなかったから、後世の歴史家は、マールクを“哲字も良心もない戦争屋”として格好の非難の的にするのである。

“我がナキヤソ駐留艦隊は共和国暦九月七日、ドレド第四艦隊七〇〇隻をワルステート宙域にて捕捉、これを壊滅せしめることを得たり。ウオーレンスタイン中将、ダブー少将、リュッヘル少将は戦死、トウゾフ少将は降伏。我が軍の損失は極めて軽微”

ロメイチェフの放った報告は共和国政府を狂喜させ、ドレド主力艦

隊首脳を恐慌に陥れた。

もちろん、通常のやり方では連絡などとれるわけではない。ロメイチェフは捕虜三〇万人、戦傷者十数万人をドレド本星へ帰還させることを条件に、通信中継艦の通過をベルサリウス大将に認めさせたのである。もともと四〇万以上もの捕虜を養う余力などロメイチェフ艦隊にはないのだが、大敗北に狼狽するドレド艦隊の心理に巧みにつけたのはマールクの巧妙さだったろう。

とにかく、生き延びた彼らはドライバオム宙域近くの基地に帰港した。もっとも、将兵はただ単に“隠れ家”と呼んでおり、事実、暗黒星雲の中を漂う直径二キロに足らない岩塊に繋留装置と倉庫を備えただけの簡易基地。多少の居住区は設けられていたが、将兵全員を収容することなどはしなかった。ドックもなければ、固有の火力装備もない。損傷艦は工作艦とドッキングして、時間をかけて修理するしかなかった。

「もし、一応基地と呼べる物を獲ろうとすると、ドライバオム宙域の中継基地しかないわけだな……」

オレーグ大尉が、“ワルステート会戦”でほとんどの備蓄物資を使い果したことを報告しながらそう呟いたのをマールクが聞き咎めた。

「ドライバオムにそんな立派な基地がありましたっけね？」

「ある……中継補給基地に使うってんで、小惑星を一個、誘導してきてドライバオム回廊のドレド側に定置させ、半分以上改装を済ませたところでこの戦争さ。宇宙軍が使ってたが、ドレドに奪取されたはずだ」

「規模は？」

「最大直径二七キロ、短径一八キロの回転楕円形。二〇個の大型戦闘衛星を周囲に配置してドライバオム要塞線を構築し、艦艇四万隻、兵

員一〇〇〇万を収容可能にする……予定だった」

「工事はどこまで進んでたんです？」

「表面を装甲で包み、内装を済ましたくらい、かな。おい、まさか本気で奪ろうってんじゃないだろうな？」

「奪れるでしょう……艦隊はないし、外部火力装備もないんでしょう？」

「馬鹿な……獲られたのは四年前だぞ。こんな要衝を無装備のまま置いておくと思うか……しかも、四年前にドレドに奪られてからドライバオム回廊から向こうの制宙権がないんだ。ドライバオム基地の装備状態を見た者は一人もない」

「じゃ、調べましょう」

口調は冗談めかしてはいたが、すでにこのとき、一年後の“ドライバオム回廊の会戦”の基本構想が彼の脳裏に描かれていたに違いない。

共和国暦七二三年一月一日

一〇月一〇日、レイヴェルゲン市民は3DTVの報ずる“ワルステート会戦”の大勝利に目を見張った。

“去る九月七日、ワルステート・ジャンクシオンにおいてミュトゥレイ・ロメイチエフ中将指揮下のナキヤソ駐留機動艦隊は、憎むべき侵略者集団、ドレド艦隊一万隻以上に対して決死的殲滅戦を敢行、完全撃破に成功した。これは自治政府を僭称するドレドの反逆者集団滅亡への輝かしい第一歩であり、我が光輝ある宇宙軍参謀本部が予見していた通り、少数をもつて大敵中に挺身、これを殲滅する戦略の真髓の輝ける実証である。市民諸君、ワルステートの完全勝利は奇跡ではない。我が輝ける参謀本部のある限り、ドレドは滅亡以外の選択は許されないのだ。諸君、我が伝統ある祖国にすべての才能と、労働と、そして諸君の血潮を捧げよ。報われる事を期待して、祖国に報じるのであつてはならない。無償の献身こそ、宇宙で最も貴重で尊いものなのだ。個人の小さな生命、財産、自由など、故国の栄光の前には何ほどのものでもないことを、我がル・ラント市民は自覚せねばならない！”

参謀次長ドロク中将の演説はアリシアに鳥肌を立てさせた。前線に出て戦ったのは徴兵、学徒動員で心ならずも戦場に出た将兵達であり、参謀本部のエリート士官達は母星の地下シェルターで書類の決裁をしていただけではないか。

“共和国圏は統一した政体によつて治められなければならない。ドレドが自治政府を僭称するのは共和国に対する重大な反逆である。これを鎮圧するは、国家における最も神聖なる大義を守ることであり、この戦いに赴くは共和国市民たるの神聖な義務である”

ヘンチェ共和国主席の演説も彼女には空虚にしか響かない。

すでに共和国宇宙軍は一〇〇〇万を越える犠牲者を出している。これでなお逆転勝利をおさめようというのであれば、今度はドレド宇宙

軍の将兵をそれに見合うだけ殺さねばならない。

そして、勝ったとして……

膨大な戦費を注ぎ込み、莫大な死傷者を出し、国土と社会を荒廃の極に追い込んで、何が得られるのか……いや、そもそも、共和国圏が統一された政体で統治されねばならないというのは誰が決めたのか。

ドレドの独立を認めても、共和国市民は何を困るというのだろうか……？

共和国の首脳は“お山の大将ごっこ”に興じているのだとは思えない。確かに、自分と家族の生命が完全に保証されていれば、為政者にとって戦争ほど面白い事業はないのではないか……アリシアにはそう思えるのだ。“ドレド戦役”が始まって以来、ヘンチェ主席、ターク参謀総長の演説を何百回聞かされたことか……しかし、この戦役をいつ、どのようにして終結させるのかについては、直接にも間接にも耳にしたことはないのだ。

「浮かない顔してる……アリシアらしくない」

アーテミシアが両腕にファイルを抱え込んだまま、にこにこしてアリシアの後ろに立っていた。

「ご機嫌ね、アータ。なにかいいことあったの？」

「アリシアみたいに難しいこと、考えないから。ね、聞いた？ ネイがね、大佐になるんですって」

「ネイが……？」

「うん。今度の“ワルステート殲滅戦”で、ネイが大活躍したから是非昇進させて欲しいって、ええと、なんつてったけなあ……」

「ロメイチェフ提督？」

「うん、そのロメイチェフ提督がね……参謀総長閣下と次長閣下がもうかんかん」

「アータ……」

アリシアはちょっと心配になった。ネイがこともあろうに大佐、などというの話はともかく、アーテミシアがどうしてそんな話に通じているのか。

「えへ、立ち聞きしちゃった」

ペロリと舌を出して肩を竦める。総長執務室に報告書を届けた時に、ターク大将の甲高い怒鳴り声を聞き、思わずドアの前で立ち止まってしまったのだという。なにしろ、頭の先から絞り出して来るようなターク大将の絶叫を聞くと、アーテミシアはガラスを爪で引つ掻いた音を耳にしたような気分になって、ゾーンとするのだ。

「ありがと、アータ。でも、他の人に言っちゃ駄目よ。どんな難癖をつけられるかわからないから」

「うん……ね、アリシア、この戦争に勝ったら、ネイは……」

「いわゆる“救国の英雄”かもね、嬉しい？」

アーテミシアは分厚いファイルをコンソールの上に置いた。ふっと笑顔が消え、グリーン・グレイの眸が不安定に揺れた。笑顔を絶やしたことのない彼女にしては珍しいこと……と思いながら、アリシアは思い当る。

「そんなのやだな。ネイがネイでなくなっちゃうみたいな気がする……ネイが軍人で、“きゆうこくのえいゆう”だなんて……」

『姉さん子』などという陰口を叩かれるほど内気で大人しかったネイに軍人としての才能が隠れているようとは、アリシアは夢にも思わなかった。しかし、ロメイチェフ提督が見込んで大佐に推薦するというのであれば、本物なのだろう。それにしても、もし、ネイが提督と呼ばれる地位を手にし、軍人としての最高権力に近付けるようになったとしたら……

それが残酷な一言であることをアリシアの聡明さは悟っている。だ

から、アリシアは内心を言葉の形に置き換えなかった。

「……ネイはあなたが見えなくなるかもね」

という言葉。

「あたしはやだな。ネイがすうつと偉くなっちゃって、あたしのことなんか見えなくなっちゃたりしたら」

「何を言ってるの、アータ。考え過ぎよ。英雄になっても、大佐になったって、ネイは、わたしたちが知っているネイだわ」

「そうかなあ……ほんとにそう思う、アリシア」

「そうよ。だから、焦ったりしないで、戦争が終わるのを待てばいいわ。いつまでも終わらない戦争なんてあつてたまるものですか」

こくと頷き、アーテミシアはファイルを抱え上げると自分のコンソールへ駆けて行く。駆けながら涙を拭いているのが、腕の動きから見て取れた。

アリシアは、ため息をついて黄金色の髪をかきあげた。

「一体、何様のつもりでいるのだ、ロメイチェフは」

ターク大將が激昂して、頭のとっぺんから怒声を絞り出したのは、昇進を求められた士官のほとんどが学徒兵の出身であり、彼の信奉する“参謀本部における階級絶対”なる図式に不遜な挑戦を試みるものだったからである。

タークを激昂させたのは、ロメイチェフからの上申だった。

ミュッケル、ローナク、ドレスンを分艦隊司令官待遇として大佐、相成るべくは准将に。ラング、マックス、シャブリの三人を大佐、ヤンデキフィティも中佐としてそれぞれ一個戦隊以上を指揮させたい。さらにロメイチェフ自身の幕僚であるマールク中尉を少将・艦隊参謀

長、クリュッペル中尉とオレーグ大尉はそれぞれ中佐に昇進せしめられたい。なお、ターグ少将、ボック大佐らは役に立たないので解任の上、本国に送還したい……

「一度や二度、勝ったくらいで常勝提督にでもなったつもりか！」

「しかし、ある程度は認めてやるべきでありましょう……」

肥満禿頭少将が宥めるように口をはさんだ。

「実際に彼らは功績を上げております。それも以寡撃衆の真髄をもつて。彼らの勝利、すなわち我が参謀本部の功績であります。閣下の功績こそ、最大のものであります。ロメイチェフは単に閣下の主張される戦術の真髄を、戦場に生かしたに過ぎぬのでありますから。彼らの功績を讃えるは、我が光輝ある参謀本部の栄光を明らかにする所以のものでありましょう」

「しかし、ロメイチェフの言いなりになる事には変わりはあるまい」

ドロク中将が非難するが、もともとワシエック少将が彼の腹心であることを知る者にとつては茶番でしかあるまい。ただし、ターク大將は知らぬ。

「では、半分だけお認めになればよろしいではありませんか。戦闘指揮官の功績は否定しようもありませんが、ロメイチェフの幕僚たちの昇進を拒否なされば、前線指揮官と幕僚との間を離間することもありますでしょう」

眼鏡の奥のタークの目が露骨な打算の、脂っぽい光を揺らめかした。

「なるほど、悪くないな。宜しい、貴官の案を採用しよう」

「智者だ、少将。ロメイチェフの横暴を逆手にとつて奴をつまづかせようとは」

ドロクは狡猾な微笑を閃かせるが、ワシエックは肉の厚い無表情さを崩そうとしなかった。

「ロメイチェフはいずれ自らの墓穴を掘るでありましょうが、ロークの方もそろそろ策を打つべきと思われます」

「良い策はあるか？」

「簡単です。戦法が消極的過ぎるとして、軍法会議に召喚すれば宜しいのです」

「よからう、任せる」

「ロメイチェフが敗北し、ロークが失脚すれば、“救国の英雄”の名は閣下の頭上に冠せられましよう。おめでとうございます、閣下」

「うむ……貴官らの忠勤は篤く報われるだろう」

信じ難いことではあるが、ターク大將は共和国宇宙軍の最終的な勝利を既定のものとして疑いもしていなかった節がある。

そのように装っていただけである、とする意見もないではないが、であればロメイチェフ艦隊の敗滅とローク中將の更迭がどのような惨事を招くかを最低限洞察できたであろう。少なくともドレド主力艦隊が母星攻略を諦めるまでは、両者の失脚を謀ることは控えたに違いないのだ。

温室的な環境のもとで、しばしば軍人は幼児退行を起こす。前線指揮官と参謀本部付き参謀将校とのローテーションシステムが廃止されて、すでに久しい。ターク大將を初めとする参謀本部首脳のひとつとどが、艦隊指揮の経験を持たなかった。そのような環境下で、ターク大將も戦争の実相を知らず、“無敵参謀本部”を無条件に信じ込んでいたようだった。

もつとも……彼の“有能な”二人の部下、ドロク中將とワシエック少將、はどうだったかわからないが……

一月、共和国政府は、ロメイチェフ中將を大將に進めるとともに、彼の要請に従い、麾下の指揮官の昇進を認める旨を公表した。即ち、ミツケル、ローナク、ドレスンの三人は一挙に准將の階級を与えられ、ラング、マックス、シャブリ、加えてヤンデキフィティも大佐に昇進した。大將だったマックスでさえ三階級の飛びこしであり、その他は何と五階級を一気に飛びこしたのである。

が、ロメイチェフ艦隊の將兵を訝しがらせ、同時に憤らせたのは、後方先任参謀のオレーグ大尉は少佐、情報先任参謀のクリュッペル中尉は大尉の肩章を与えられたが、肝腎の作戦先任参謀であり、艦隊参謀長を兼ねていたはずのマールクが完全に無視されたことである。

ロメイチェフは、マールクを初めとする彼の主要幕僚が冷遇された理由を記した政府が訓令を長い時間をかけて眺めていた。

「見ろよ、おい。参謀本部の方々はこう仰せた」

ややあつてロメイチェフは訓令を記した書類をマールクのコンソールの上に投げ下ろした。

『……マールク中尉は学徒動員兵であり、速成教育中の成績も極めて劣悪である。故に、同中尉が“ワルステート殲滅戦”において偉功を立てたとする貴官の主張には根拠が薄い。同会戦の大勝利は、以寡撃衆戦術の真髄を、優秀なる前線指揮官が完璧に実行してのけた結果であり、同中尉の戦略が功を奏した所以ではないものと考えられる……』

「対ドレド作戦部長のフォルター・ワシエック少將は中将閣下に昇進あそばされ、ターク総長閣下とドロク次長閣下は、それぞれ功一級共和国戦士章をお受けになるようだ」

その他、数十名の参謀将校が“ワルステート会戦”での“功績”に対して昇進、或いは受章するという。その数は、ロメイチェフ艦隊でのそれよりも遥かに多い。

「また以寡撃衆……か。いい加減にしてほしいもんだ」

マールクは茫洋とした表情を特に変えもしなかったが、ローナクやドレンなど血気盛んな指揮官たちは血相を変えた。

「馬鹿な……マールク中尉に功績がないってんだつたら、俺達になにがあつたつてんだ。俺は、こんな階級章なんかいらんど。突っ返してやる！」

准将の肩章をむしりとり、フロアに叩きつけるのを見て、マールクはおさまりの悪い茶褐色の髪を掻き回した。

「まあ、くれるつてんだから貰つとけばいいんじゃないかな。私は中尉でもかまわないから。その方が作戦も立て易そうだし……」

「参謀の無名性……か」

ロメイチェフは苦笑する。この作戦参謀は、参謀本部流の軍人教育では全くの劣等生だったくせに口にするのはいちいち理にかなつて……ということは参謀本部の主張が支離滅裂だということか、それともともとマールクが枠に填まるようにはできていないのだろう。

「無名性も結構だが、なんせ中尉じゃな、やりにくいだろう……この際だ、貴官を少将待遇にする。政府の言いなりになつていても勝てん。勝てなきゃ、死ぬしかない。それだけは御免だ」

「しかし、閣下、私は中尉で充分です」

「貴官は充分でも、兵がおさまらん。今度の勝利が貴官の功績であることをはっきりさせとかなと、兵が貴官の作戦に従わぬ。それでは、次の作戦で思わぬ失敗をすることにもなりかねんのだ」

それは事実だった。ロメイチェフの艦隊は決して精鋭ではない。艦艇こそ制式艦隊のそれだったが、将兵は寄せ集めでしかなく、それだけにメーレン、ワルステートと続いた大勝利のよつてきたるところを彼らの将帥に求めようというのは自然な感情だった。そして、ロメイ

チェフもさることながら、兵の多くはマールク作戦参謀に不敗の所以を求めようとしていたのである。ロメイチェフとしては、彼らの信仰に裏付けを与えてやらねばならなかった。

「心配するな。給料もちゃんと少将待遇のものを受け取れるようにしてやる」

「閣下、私は何も給料のことを……」

「少ないより多い方がいいだろう。いらなんだつたら、余つた分でこいつらに飲ましてやれ。いいか、マールク。貴官は、多分最高クラスの戦略的天才だ。が、それだけではまだ智将でしかない。兵に不敗の信仰を抱かせることができれば、貴官は名将になり得る。少将にすることで、貴官が名将であるという信仰を兵に抱かせることができるのだ。だから、黙つてマールク少将になることだ」

ロメイチェフは精悍な頬を笑み崩した。むしろ猛将と呼ばれるタイプのロメイチェフだけに、笑顔は奇妙に邪気がなく、人好きがした。もつとも、参謀本部の秀才参謀は彼の豪放さを極端なほど嫌ったが。

「貴官には不意かもしれんがな、とにかく軍人と呼ばれる立場になつちまつたんだ。諦めて兵の信仰の対象になることだ」

「はあ……そんなものでしょうか？」

不得要領なマールクに、ロメイチェフは哄笑して止めを刺した。

「そんなものだ」

アリシアにとつて十一月一日という日は不愉快の一語に尽きた。

この日、“ワルステート殲滅戦”戦勝祝賀式典がレイヴエルゲン郊外の国立競技場で行われ、ターク参謀総長以下の参謀本部幹部とランルサック・ヘンチェ政府首席、ブラウエン国防相らの政府首脳の軍国

主義賛美に満ちた長つたらしい演説を散々に聞かされたのだ。

それも、聴衆でいられるのならまだ我慢もできるが、アリシアは学徒兵代表”などという肩書きを押し付けられ、彼らへの祝辞を述べさせられたのだから疲労も募ろうというものだった。

しかし、彼女自身は、このときは気づいていなかったが、豊かな金髪を初冬の微風に吹きなびかせながら、響きのいいメゾ・ソプラノで祝辞を述べるすりりとした長身の少女は観衆の目を引き寄せて離さなかったのだ。

用意された原稿をやや逸脱して“前線で私達の家族は、私達を守ろうとして生命を賭けていてくれます”などという科白を連発したアリシアに、ターク参謀総長などは渋い顔をしたものだが、観衆の歓呼は儀礼ではなかった。

「……私の弟も、ロメイチェフ提督の艦隊に属して戦っていてくれます。後方の、安全な地下シェルターで、私は弟の無事を祈ることしかできません……」

アリシアのその言葉に、競技場は水を打ったように静まり返ったのだ。

「何故、あんな奴を選んだのだ……見栄えのよさは認めるが！」

ターク大將は苦々しくドロク中將に囁き、ドロク中將はワシエック“中將”を睨みつけたが、肥満禿頭の作戦部長は動揺しなかった。

「よろしいではありませんか。別に我が軍を非難しているわけではありません」

「しているに等しい！」

「前線將兵の善戦を讃え、後方の市民に参戦の意欲を持って、と促しているに過ぎません。気になさるほどのことでもありますまい」

ワシエックの予想は彼の上司を納得させたが正しくはなかった。共

和国市民に、アリシア・ミュッケルの姿を初めて強く印象づけたのは、この式典なのである。彼らの最大の敵手を、好んで公衆の強烈な印象に焼き付けたことを、彼らはまだ悟っていないかった。

ともかく空疎な式典は進められ、ターク大將とドロク中將に功一級共和国章がヘンチエ主席の手によって授与された。

“……共和国の政戦両首脳の間にかたい握手が交わされました。まさに共和国不滅、無敵共和国宇宙軍の崇高な流れを私達の心深くに焼き付けずにはいられない一瞬であります。憎むべき反逆者集団に懲罰の一撃を加え、宇宙の大義のよってきたるところを明らかにした、我らが偉大な政戦両略の指導者を拍手をもつて讃えようではありませんか”万雷の拍手と天を摩する歓声。熱狂のエネルギーが、澄み切った初冬の空に吸い込まれていくのを、アリシアは虚しい思いで見守った。弟は……ネイは、こんな連中の名誉を守ってやるために戦っていることを知っているのだろうか……

それにしても……アリシアの憂愁は尽きようもしない。

戦争とは、ただ単に宇宙艦隊を動かし、会戦を行うだけではないはずだ。ドレドは、母星の植民地政策に反発して、この戦争を起こした。

当然、共和国がドレド自治政府の独立を認めれば、戦争はドレドの勝利として終結するだろう。が、では、共和国の勝利としてこの戦争を終わらせるにはどうすればいいのか？

政略の指導者には、思案があつてしかるべきだった。ロメイチェフ艦隊の活動によつて、或いはドレド艦隊は母星の包围を中止して退却するかもしれない。その時点で講和すれば、共和国はこの戦争の敗者とならずに済むのではないか……もし可能ならロメイチェフ艦隊を共和国を挙げて支援し、ドレド艦隊に更に重大な損害を与えた時点で講和する……これでもいい。ドレド艦隊は三分の一を失い、一方ロメイ

チェフとロークは九〇〇〇を越える艦艇を擁している。倍以上のウォーレンスタイン艦隊を屠りさったロメイチェフの知謀をもつてすれば、不可能ではあるまい。

しかし……と、アリシアは更に憂鬱になる。

“宇宙の大義”、“無敵共和国宇宙軍”……何と空疎で実質のない言葉だろう。そもそも、戦争に大義などあるのか？ こんな言葉を、政府主席、参謀総長などが玩んでいるようでは、ロメイチェフ艦隊の奮戦も詮は虚しい。“ドレド戦役”は、ドレドの独立要求により始まり、共和国がこれを拒否したことから始まった。植民地が独立を要求することが“宇宙の大義”とやりに反するというのなら、ル・ヲントの歴史を彩る無数の独立運動はすべて大義に反する、ということになる。歴史が“大義”に反しているのに、どうして現在の共和国がそれに則っているなどと大言壮言できるのだろうか……アリシアは、彼らの精神構造そのものを疑いたくなった。

彼女は、両肩を重石でおさえつけられるような疲労を感じて、椅子に腰を下ろしたい、と思った。式典は今や最高潮に達し、参列者のことごとくが立ち上がって、彼らの“偉大な”指導者の名を叫び、拳を振り上げ、拍手を送っている。彼女一人、腰を下ろせば、異端児扱いされることは目に見えていた。

どうして、皆な、こんな式典に熱狂できるのだろうか……サファイヤ・グリーン眸の眸、鮮やかなエメラルド・グリーンと深いサファイヤ・ブルーとが交錯する美しい瞳が醒め切った光を湛えて、狂乱状態の観衆を冷ややかに眺めやう。

共和国における民主政治とは、煽動政治の同義なのだろうか……？ もうひとつ、アリシアを憂鬱にさせていたのは、アーテミシアだった。弟の大佐昇進を知らされて以来、あの屈託のなかったアーテミシ

アが奇妙にふさぎ込んでいるのだ。

ドレド機動部隊に空襲され、半壊した第三四防空基地への補充要員として、アーテミシアを含む数十名が指名されたのはこんな時だった。

「第三四防空基地ですって……地上基地よ、空襲されたら……」

「ネイが艦隊で守ってくれるもん。それに、こんなもぐらの穴なんかもうまっぴら。息が詰まっちゃう。それにね、准尉扱いで、だって……」

「アータ……あなた……」

なんてこと……とアリシアは前髪を細い指に絡めた。

「志願したのじゃなくて？」

「うん」

無邪気に頷くアーテミシアを前にアリシアは呆然とする。そうなのだ。自分だって、という反発から、アーテミシアは危険な任務を志願してしまったのだ。

“姉さん……アータのことを頼むね……”

言い残してナキャソへ赴いて行ったネイの言葉が、アリシアの胸に鋭い痛みを覚えさせる。

「アータ……駄目よ、危険過ぎるわ。志願を取り下げなさい」

「もう決めたんだもの。それに……何もしない、なんて言わないで。あたしだって、自分のことは自分で判断できるわ」

「アータ！」

「だって言われたんだもん！」

「何て？」

「あたしのことなんか、ネイからは見えなくなるって」

憤然と、言うにはやや語気が弱かったが、アーテミシアの言葉にアリシアは絶句する。

「誰に？」

「みんなに！こんな穴の中に隠れてたりしたら、絶対に“きゅうこく”のえいゆう”には似合わないって。あたしだって勇気あるもの。ドレドなんて怖くないわ！」

「そんなことないわ、アータ。話を聞いて」

「やだ、聞かない」

茶色の巻き毛が頑なに左右に振られ、アリシアは説得の言葉に窮した。ロメイチェフ艦隊は優れた将帥が指揮をとり、不必要な危険に曝されることはないだろうが、こと母星の地上防空基地となると話は違う。第三四防空基地そのものが適例ではないか。参謀本部はおのれの威信のために、平然と数万の市民を犠牲に供してはばからない。

だが、アーテミシアは首を縦には振らなかった。

「あたし、ネイを信じてる。だから、地上基地にだって行くわ」

いくらネイが天才的な軍人としての才能を備えていたとしても、時には手の及びかねることもあるのだ……と言おうとして、アリシアは諦めた。それを口にすれば、二重にアーテミシアを傷つけるだけだろう。

同じ頃、母星を数光時の彼方に望むアージュナ・ラインで、ドレド艦隊首脳はほんの二、三箇月前からは思いもかけぬ深刻な表情を並べていた。

「ウォーレンスタインまでが、ああもあっさり敗れるとはな……」

「それにダブー、リュツヘル、トゥーゾフ……いずれも我が軍に冠た

る優秀な指揮官だったはずだ」

「ロメイチェフ……よほどの名将か……それとも、よほどよい参謀がついているのか……？」

「馬鹿を言うな。共和国宇宙軍の参謀本部に何ができる。連中にできるのは演説だけではないか！」

ベルサリウス、シャペル、ダウン、リッツ、モローは青ざめた表情を見合わせていた。圧倒的兵力を擁し、母星攻略の寸前にまで達しながら、彼らは逆に窮地に置かれたのである。補給は滞り、母星攻略の資材どころか将兵の食糧すら底を突き始め、兵の不満は爆発寸前だった。

更にもう一個艦隊を派遣して後方保全に当たらせてはどうか、との声も上がったが、すでにウォーレンスタインが失敗している。ドレド自治政府は思わぬ大損害にうろたえ、場合によっては撤退も考慮すべきだ、としているが、ベルサリウスらにしてみれば、ここまで共和国を追い詰めて今更の撤退は肯んじ難いところだった。

「……一つ考えが有りますが、聞いて頂けますか？」

数時間もの討議でなお結論が出ず、一同が疲労の色を濃くし始めた頃、シャペルの幕僚の一人、ファーフという名の大佐が控えめに持論の公表の許可を求めた。

「宜しい、言つて見給え」

ベルサリウスが優れた将帥であるとすれば、部下の意見をよく聞き、それを容れる度量に恵まれていたことだろう。階級のみを笠に着て、部下の意見を一切受け入れない共和国参謀本部とは、その点で一線を画していた。

「ロメイチェフ、ロークの両艦隊の撃破を先行させるのです」

「もつともだ。首都を包囲しても、後方がこうも不安では話にならん。

で、その方策は？」

「アージヤナ・ラインを放棄し、総退却に移ります。総退却とみせて、縦深陣を施き、ローク艦隊を誘い込み、これを撃破します。しかるのち、全力を挙げてロメイチェフの艦隊を粉砕すれば、母星は手を上げざるを得ないでしょう」

「そううまくいくかな……」

モロー中将は懐疑的な表情を示した。

「ロークはなかなかの手腕の持ち主だ。そんな見え透いた罠にかかるかな」

「ロークはかかりますまい。しかし、参謀本部はかかるでしょう」

ファークは辛辣に指摘する。

目の前が敵が退いていく、それも半ば潰乱状態となつて。

「……目の前の敵と戦わぬは武人の恥……この言葉はしばしばお聞きになったことか、と思います」

嘲笑の小波がドレド艦隊の将星たちの間で揺れ、ベルサリウス大將は我が意を得て大きく頷く。

「なるほど、大軍が目の前を退いて行く。寡を以て衆を撃つ……参謀本部のお好みのメニューを揃えて見せてやるわけだ。宜しい、貴官の作戦を採用する。考えてみれば、なにも好んでロメイチェフやロークを相手にせねばならぬ理由はなかったわけだ。いささか、勝ち馴れて、わざわざ手強い相手にぶつかる愚を犯していたようだ」

しかし、一万数千隻、三〇〇万近い大軍であるドレド主力艦隊は、新規の作戦を起こすにしても、準備期間と、ある程度の兵站の充実を必要とした。六次に亘る大規模な輸送船団はロメイチェフ艦隊によつ

てことごとく覆滅されてしまったため、ドレドそのものが恒星間高速輸送船の極端な不足に苦しむことになっていった。細々と必死に掻き集めた低速輸送船での補給は続けられていたが、三回に二回までロメイチェフ艦隊に捕捉され、蛇口からの細い水流を巨大なプールにため込むに似て、はかのいかない作業だった。

一方のロメイチェフ艦隊も「ワルステート会戦」で手持ちの補給物資をぎりぎりまで使い切っていた。

『……食糧。液体水素、及びヘリウム。艦艇修理用の装甲甲鉄。補充の宙雷、艦載機、ミサイル、電磁フランクス砲の劣化ウランウム弾頭。医薬品、輸血用の乾燥血漿など、最低限度二二〇〇万トン……』

オレーグ少佐からの意見具申により、ロメイチェフが発した補給の要請も、あつさり却下された。もちろん、共和国政府部内には補給もなく戦えるわけではない、とする良識派も存在してはいたのだが、

「補給を要求するのは敗北主義の表れである」

という参謀本部の鼻息に吹き飛ばされてしまったのである。

「……なんで、補給を受けるのが敗北主義なんかねえ……？」

さしも剛腹なロメイチェフが政府からの返電を前に、暫くは声もなかった。

『貴艦隊はル・ラント共和国の誇り、共和国の希望である。市民は貴艦隊の勝利を確信している。願わくば、貴艦隊からの連絡は勝利のそれのみならんことを』

「補給も与えずに勝てれば安上がりだわな、確かに……しかし、人間は腹が減る。特に戦争くらい腹の減る仕事はない……」

どうするかね、と問われて、マールクは頭を掻いた。彼とて生身の人間であつてみれば、無から有を生させることはできない。

「しょうがありません……ドレド艦隊の台所から頂きましょう」

この時期、マールクはすでにドライバオム宙域の中継補給基地奪取作戦を立てていたのだが、その為には充分な補給が不可欠だった。共和国政府が補給を拒否する以上、ドレド艦隊の補給線を襲い、掠奪物資で自らの台所を賄うしかない。

この作戦は、立案したマールクがいささか自虐的な気分で「ゴキブリ作戦」と名づけたが、ロメイチェフはその名称がいたく気に入ったようだった。

「だてに文学部の学生はやっていないというわけだな」

「別にこんな名前をつける為ではありません……」

得ることのできた奨学金が文学部のそれだったからだ、とはさすがにマールクは口に出さなかった。

とにかくある程度の補給物資が貯えられない限り、次の作戦行動は起こせないのも事実だった。

さらに、ウェスコット・ローク中将の本国艦隊も、

『ナキヤソ・ラインから二〇光秒以上離れて戦ってはならない』

という政府からの訓令に手足を縛られ、自らの判断で戦うことはほとんど不可能だった。慧敏なシャベルが機動部隊による母星空襲を繰り返したことで、不安を高めた市民の支持を失うことを恐れた政府が“勝利などどうでもよい、とにかくドレド艦隊を母星に近付けるな”としてこの訓令を発したのである。この為に、本国艦隊は少数での一撃離脱を行うドレド艦隊を徹底的に追撃できる機会を失い、しばしば歯噛みすることになった。

こうして、ドレド艦隊はアージャナ・ラインを動かず、ロメイチェフ艦隊は母星・ドレド間航路に姿を潜め、ローク艦隊はナキヤソ要塞に釘付けになったまま、新しい年、共和国暦七十四年が明けた。

ロメイチェフの艦隊は、後に“およそ軍隊らしからぬ軍隊”と呼ばれるようになるが、この時期にすでにその兆候を見せていた。

「新年じゃないか、今飲まないでいつ飲むんだ？」

ローナク准将が強硬に主張し、他の新任の提督達も同調したために、全将兵にある限りの酒が配られた。もちろん、すでに五〇万に近くあった全将兵にいきわたるほどのシャンペンなどあるわけではないから、ワイン、ウィスキー、ブランディから果実酒、リキュール、ビールなどある限りのアルコールが紙コップに注がれたのである。

「何がめでたいのかわからんが、ともかく新年はめでたいものと決まっているらしいから、うだうだ言わずに祝うことにしよう。乾杯」

ロメイチェフの訓示も、古参の士官達の眉を顰めさせるに充分だった。常時肩を怒らせ、眉をしかめていることが軍人としての形式美であると信じて疑わない士官は後継者不足に悩むことはあり得ないようだった。が、ロメイチェフはせせら笑って彼らの抗議を却下したものだ。

「酒がいらんのだったら飲むな。他の者がそれだけ飲める」

作戦行動に飲用アルコールはさして必要ではない。しかし、この乾杯でロメイチェフ艦隊の補給物資倉庫からは薬用以外のアルコールが姿を消したのも確かだった。

「早いところ、次の作戦をやってくれないもんな。禁酒なんて俺の趣味じゃない」

うそぶいたのはローナクである。

「准将だなんて結構な肩書きは貰ったが、毎日の酒にも不足するようじゃ大したことはないな。まあ、個室が広くなっただけが取り柄か」

そのローナクが、移り香らしい香水の薫りを微かに漂わせているのに気が付いたネイが姉にそっくりの綺麗な眉を寄せた。何故、それが取り柄になるのか、と問うのも億劫である。

「新しい旗艦は気に入ったわけ？」

「大いにね……そんな顔するな……戦争の真つ最中じゃないか。たった今の生活を楽しんで何が悪い？」

「悪いとは言わないけれど……」

「お前と違う船になったのもよかった。『ワールブル』に乗ってたところは三人に一人はミューケル中尉の方がタイプですって答えが跳ね返ってきたもんだが」

うんざりしてネイは会話を打ち切った。これ以上、この話題に固執していると、また殴り合いにもなりかねない。“ワルステート会戦”の直後、しこたまにアルコールを口にした弾みに口論になり、ローナクに殴り倒されたのだ。もちろん、ローナクとしては充分に手加減をしたのだろうが……さもなければ、目の下に痣を作っただけで済むわけではない。

そんなネイに、ローナクは好意と揶揄の入り混じった微笑を向ける。

ネイがアーテミシアに向ける思いは分からぬでもない……が、得たものは必ず喪われる。手に入らぬ苦しみよりも、手に入れたものを喪う衝撃の方が何倍も巨大で、堪え難いのではないか……

……俺は、得たものを喪うことを恐れる臆病者かも知れんし、ネイは喪うことの悲哀を知らぬだけなのかも知れん。

ローナクは肩を竦めて年齢に似合わぬ朔風めいた思いを胸の内から追い払った。

マールクは多忙だった。増援部隊を艦隊に組み込み、捕獲艦艇に乗員を割り振り、損傷艦艇の修理状況の報告を受ける一方で、アー ज्याナ・ラインのドレド艦隊の動向とドライバオム宙域に派遣してある偵察部隊からの報告を睨み合わせてドライバオム中継基地の奪取作戦の立案を行う。更には、新年祝賀の乾杯にはしっかり参加して自分用にシャンペンを確認する、というありさまで、この時期の彼の平均睡眠時間は三時間を超えず、それすら執務室のソファでの仮眠が多かった。

「副官をつけてくれ、とは言わないがねえ……」

睡眠不足で腫れぼったい目をしながら、マールクはぼやいている。

「サインするだけの書類なんて、もってこないでほしいよ」

「ぼやくな、俺だって同じだ。戦闘のない時の司令官なんて、書類の決裁役だ。戦争をしたいとはいわんがね。しかし、ほっといても書類はどんどん貯まる」

これはロメイチェフである。

マールクの顔をほころばせたのは、ドライバオム中継基地の武装状態についての報告が得られた時だった。資材不足からだろうが、この中継基地は軍事基地としての最低限の外装を施されただけで強力な防禦火砲装備がなされておらず、当然駐留艦隊もない。

「畏じやないだろうな……」

「そこまで予想していたとすれば、大したものですが……全艦艇のデータバンクの情報が一致しているそうですから」

「ふん……しかし、それにしてもしんどい戦さになりそうだな」

「今度は四〇〇〇対一万三〇〇〇……本国艦隊が加わってくれば九〇〇〇対一万三〇〇〇になって、ある程度数が合うんですが……」

「母星の守りが空になる、んだそうだ。本国艦隊は動員できぬ、と仰せだ」

「マールクは髪に手をやる。一対三、一対四などという戦いがいつまでもできるものではない。いつか破綻して破滅する。」

「負ければ前線指揮官の責任で、勝てば参謀本部の功績、ですか……」
本気で勝つつもりなら、もう少し勝つ為の条件を整えてくれないではないか、という正論は共和国政府には通用しないのだ。彼らは、そんなことをする義務があるなどとは夢にも思っていない。どころか、戦争そのものが政府の責任において行われることすら忘れていている。ドレドからの最後通牒を“前例のない書式だ”として“却下”した植民相ジェリコウ・シュジュケイを例に持ち出すまでもない。

「投げてやろうか、とマールクが思う所以である。」

「が、勝たねば俺達は生命がない……癪だが、戦わざるを得ないようだ。で、目処は立ったのか？」

「簡単に立てば楽なんですが……」

「マールクは説明する。」

ドライバオムの中継基地を包囲し、華々しく攻撃する。この中継基地をロメイチェフ艦隊が占領すれば、補給線は完全に遮断されるからドレド艦隊としては否応なく救援に赴いてこざるを得ないのだ。ロメイチェフ艦隊は、敵艦隊がドライバオム宙域に迫った時点で中継基地の包囲網を解き、ドライバオム回廊を巨大な異と化してこれを迎え撃つ。

「言うのは簡単なんですが……」

「……全くだ。本国艦隊に呼応して貰えれば、連中をドライバオム宙域に袋詰めにできるんだが……で、いつ始める？」

「まだ駄目です。物資が全くないんです……」オペレーション・コクローサ「ゴキブリ作戦」が順調に進んでもあと七、八箇月は動きがとれません」

「たった二、三回の強行補給船団を送ってくれば済むことなのにな」

ロメイチェフのため息になる。

「俺は思うんだが……いっそ、全軍降伏すればどうだろうと。政府と参謀本部の連中はさぞ泡を食うだろう……」

ロメイチェフの口調は冗談と言うには本音の酸味が強過ぎた。マールクはため息でこれに応えるしかなかった。

「できませんよ、閣下」

艦隊将兵の家族は母星にいる。家族を見捨てよ、などという命令は司令官の立場としては出せるものではない。いや、出せるが、将兵は肯んじまい。人間の忠誠心は祖国に対するものよりも家族に対するそれの方が遥かに強い。市民が国家組織の命令に服して、戦争と言う殺人作業へすすんで赴くのは、代償として国家が家族の安全を保証してくれるからにほかならない。その事実を無視して、国家への忠誠心が無条件のものと錯覚するから、“ドレド戦役”のような愚劣な戦争を平然と続けていられるのだ。

「ま、しょうがない。副官とはいわんが、書類の処理係りは何人かつけてやる。精々、頑張ってくれ。俺も生きて家族のもとへ帰りたい」

マールクは軽く目を見張る。ロメイチェフが家族のことを口にするのは初めてのことだった。

「家族がおられるのですか？」

「ああ、この歳まで独身ではおらんさ……」

豪胆な提督は珍しく照れた表情を見せた。

「貴官のような野暮天なら知らんが」

共和国暦七十四年 五月二十七日

七十四年五月二十七日、ベルサリウス大將は麾下の提督を集めて艦隊の出動を下令した。アージャナ・ラインを放棄し、無秩序さを装って総退却を開始する。ロメイチェフに先んじて行動を起こしたのは、特に彼の作戦を読んだからではなく、作戦行動に必要な補給物資が最低限度の充足を見たからに過ぎないのだが。

「作戦名か……」

作戦名を問うシャペルに向かって、ベルサリウス大將はにやりとして言い切った。

「作戦名は“愚者^{オベレシヨン・ブレイトラフ}どもの畏”」

膨大な数の艦艇がアージャナ・ラインからの離脱を開始した……との報告が複数の探查網からナキヤソのローク艦隊司令部のもとに届けられたのは二八日の早朝だった。

「総退却？」

ロークは、一瞬眉を顰めたがベルサリウスの意図を看破するまでに幾らかからなかった。

「退却を装って縦深陣を施き、我々を一気に撃破しようというんだろ。乗っけてはならん。見え見えの罠にわざわざかかってやる必要はない」

参謀本部への通報も待て……知れば、連中は追撃を主張して来るに違いない。

ロークは優れた将帥であり、部下をよく掌握していたが、重大なミスを犯していた。ロメイチェフは“メーレン会戦”後、艦隊に配属されていた参謀将校を全員更迭し……これはターク大將らを激怒させたが……その任に耐え得、かつロメイチェフの指揮に服する者のみを改

めて部署に配した。が、ロークはそこまでの荒療治ができず、ほとんどの参謀将校をそのまま任用していたのである。

これが大きな誤りだった。

この時期、艦隊派遣参謀は、参謀本部が艦隊を支配するための細胞と化しており、その忠誠の対象は艦隊司令官ではなく、参謀総長だった。彼らは参謀本部の威信を背景に司令官の指揮権に介入し、その意見を採用しない指揮官を参謀総長に訴えて更迭させた。“参謀が作戦を立て、司令官が裁可する”というのがロメイチェフ艦隊では常識だったが、他の艦隊では“司令官が作戦を立て、参謀の許可を頂く”と囁かれてさえたのである。

この時も、即座に要塞から参謀本部に向けて複数の通信波が放たれていることに、ロークは迂滑にも気づかなかった。

“ドレド艦隊はアージャナ・ラインを放棄、総退却。我が宇宙軍参謀本部の勇戦敢闘により、母星攻略を断念、ドレドへ後退を開始。旭日は燦として、我らが大義を照らせり”

彼らの送った報告の前半部は半ば正しかったが、後半は希望的な推測であり、最後の一文に至っては無意味な修辞でしかない。この時期の参謀将校の間で、報告を無意味な美辞麗句で飾ることが流行していたのだ。“敵後退中”とだけ記して艦艇数、方向などのデータを付し、“敵意図の推測……”として意見を述べておくべきところを……

ロークは精確な報告を作成し、先んじて政府に送りつけるべきだったかもしれない。もつとも、そうしていたところで、ヘンチェ政府主席は報告書の書式しかチェックしなかったであろう、というのが後世の一致した批評であるが……

「……ドレドはなすことなく潰走に移りました。これも、我が参謀本部の威信のしからしむるところであります。閣下、閣下はこの戦争に勝たれました」

冷静な聴衆がいれば、ドロク中将の報告は報告ではなく、歯の浮くような追従でしかないことに背筋のむず痒くなるのを覚えただろう。すでにこの時点で“退却”は“潰走”に置き換えられている。ドレド艦隊が潰走に陥らねばならぬような打撃など全く受けておらず、一万三〇〇〇以上のドレド艦隊の内、敗走を装っているのが二〇〇〇にも満たない部隊でしかなく、自己の都合に悪い事実には目を背ける、という参謀将校特有の特質から彼もまた自由ではいられなかったのだとする見方ですら、この時のドロクには同情的に過ぎるのではあるまいか。どう考えても、わざと無視していたとしか見られないふしが、確かにこの時にはあるのだから。

「大挙して大追撃を行い、ドレドの反逆者集団に正義の大鉄槌を下すべき機会を、我らは与えられたわけであります。我が宇宙軍が、大義の旗を掲げて一大追撃戦を展開すれば、ドレド艦隊など鎧袖一触、自ら降り来たって、我が軍門にひれ伏すでありますよう」

「うむ……直ちにロークに追撃を命じよ。ドレドの反逆者どもに、宇宙の大義の何たるかを思い知らせてやるのだ」

「閣下……」

対ドレド戦作戦局長であるワシエック中将が一步を進み出る。分厚い近眼鏡の奥に埋め込まれた小さな目に脂っぽい嗜虐的な喜びを湛えて。

「ロークは参謀本部命令に従いません。艦隊参謀からの報告によりますと、ドレド艦隊敗走の報告を部下に禁じたそうであります。これは、

ドレド艦隊撃滅の功績を我れ一人に独占し、“救国の英雄”の座をほしいままにせんとの野心の現れであります」

「なんだと……！」

鼻の下にたくわえられたタークの髭が神経質に震えた。声が自然に一オクターブ高くなるのは自尊心を傷つけられた怒りの故であろう。

「確かに、ロークが独力を以てドレド主力艦隊を撃砕すれば、元帥、宇宙軍艦隊総司令長官は間違いのないところであります……」

将校の一人が無遠慮に発言し、タークは眼尻を釣り上げてその参謀を睨みすえる。

「貴官は何か、ドレドの反逆者を支持するのか！」

論点の完全なずれた怒声を叩きつけられ、くだんの将校は呆気にとられた表情になって総長を見上げる。総長執務室での総長のデスクは一段高いステージの上であり、タークは常に部下に見上げられる格好になるのだ。部下に見下ろされることを、彼は極端に嫌ったのである。

「そ、そんなことはありません、閣下」

「不愉快だ、下がれ。二度とその青二才面を見せるな」

とんだとばつちりをうけたその将校は、喚き散らす参謀総長を背に、失望のため息をついて執務室を歩み出る。彼は第二作戦部局……対エイリアン部と呼ばれる……局長パーセルズ少将の副官だったが、少将は副官を庇おうとすらしらない。いや、それよりも、できの悪い古典劇を見せられたような後味の悪さに彼は捉われていたのである。

フェレスレット・ラーンク少佐は二七歳。優秀な成績で士官学校を卒業し、将来を嘱望される若手士官であり、国家に対する揺るぎない忠誠心を持った若者だったが、この日、まのあたりにした醜悪な茶番劇は、彼の価値観そのものを揺るがせるに充分だった。

“国家は賢明な人物と、重厚な装置によって運営されている……と

いうのは、時に市民の幻想でしかない……”などと論じた歴史作家を、これまで彼は憎悪していた。が、その憎悪は急激に温度を下降させ、賛同が取って代りつつあったのだ。

ターク大將は、己れの自尊心をしたたかに傷つけた生意気な部下を許さず、ラーンクを大尉に降等した上に、マーシャル少将の副官を解任、本国艦隊の軽巡洋艦『サンジュアン』副長に転属させてしまったのである。が、タークの期待に反してラーンク“大尉”は特に未練も見せずに前線に移っていった。数年後、彼が“ラーンク准将”としてドライバオム宇宙要塞防禦司令官となるのは、歴史の記すところである。

「宜しいではありませんか、閣下。ロークが参謀本部命令に従わぬと言うのであれば、彼の罪状を問うよい機会であります」

颯爽とした声が辺りを払う。デスタリヴァ・ドロク中将が人好きのする端正な微笑を浮かべて言い放ったのだ。

「これまでもドレド艦隊の小癪なる挑戦に対して積極的な反撃を行わず、我が宇宙軍の名譽を傷つけて来たロークには“救国の英雄”どころか国家に対する反逆者こそふさわしい……」

ドレドのシャペル提督の陽動作戦に乗せられた彼ら自身が、ローク艦隊の行動を束縛してきたことは都合よく忘却の淵に投げ込んで、ローク提督への弾効を続ける。

「彼を解任の上、母星に召喚し、閣下が全軍の指揮をとられるべきです」

「わたしが、か？」

「ドレドはすでに敗残の敵、この上に閣下の勇名を耳にすれば、なす

とくなく崩れ去るは火を見るよりも明らか……閣下、我々に用兵の真髓をお見せ下さい」

「う、うむ……」

「何を躊躇われるのです、閣下。勝利はすでに確定しております。ロークを処断しても、なおロメイチェフがおりますぞ。閣下が起たれねば、ロメイチェフに名をなさしめるは必定か、と。潰乱するドレド艦隊であつてみれば、ロメイチェフごときですら容易に撃破できましよう……閣下、ご決断を。ロメイチェフごときに名をなさしめ、宇宙軍の名譽を泥に塗れさせないで頂きたい！」

笑止……として見守る士官も何人かいただろう。事実、この時、総長執務室にあつて、のちにロメイチェフ艦隊に投じた士官も数人を算するのである。この時は沈黙を守ること自らの生命の安全を保証する道を選んだ彼らを、卑怯として責めることはできない。彼らの上司の演ずる茶番劇を茶番として指摘しても得るところはなく、ラーンク同様に的外れの罵声を浴びた挙げ句に危険な前線に放り出されるのがおちであるとするのなら……

「うむ、分かった。貴官らの期待を裏切るわけには行かぬ。わたし自らが本国艦隊の指揮をとり、ドレドの反逆者どもに正義の大鉄槌を下してくれよう」

「よく決断下さいました。後世の歴史家は、閣下のこの決断を指して“歴史的な決断”と称するでありますよう」

この点だけはドロクは誤らなかつた。確かに、“後世の歴史家”は、この時のタークの決断を指して“歴史的な誤断”と称しているのだから。

ル・ヲント共和国宇宙軍参謀本部が、参謀総長ヴィレックス・ターク大将の名をもって共和国政府にウェスコット・ローク中将の解任を

要求したのは、実に五月二八日。ドレド艦隊後退が報ぜられて僅か数時間後のことだつた。

“該要請が容れられぬにおいては、参謀本部は独自の判断に基づき、断固として必要と見做される処置をとるものとする”

というのは参謀本部が政府を脅迫する時の常套手段だつた。

ローク中将を解任したのでは母星を守れなくなるではないか、とする意見も政府部内にはあつた。主に財政担当者から上がった声で、五年に亘る戦争の莫大な出費が彼らに危機感を抱かせていたのは確かだつた。が、彼らの声は余りに小さく、また“聖戦”を盾にとる軍部の恫喝の前には沈黙するのが常だつたから大勢を動かす力にはなり得なかつた。

五月二九日、共和国政府主席ランルサク・ヘンチェはローク中将を本国艦隊司令官職から解任し、後任として参謀総長ヴィレックス・ターク大将を任命することを決定した。参謀総長の後任はデスタリヴァ・ドロク参謀次長がこれを兼任するものとする……

この命令を受け取つたローク中将はたつぷり二分以上、命令書を見つめていたが、やがて副司令官のマーク大佐を呼んだ。

「なんなんです、この命令はっ？」

すでに五〇歳に近い老練な大佐は普段は温厚な表情を激怒に歪めた。

「敗ける、死ぬ、ドレドの連中に名をなさしめろ……一体、母星の連中は何を考えているんだ。そんなにドレドに勝たせたいのか、それとも我々の生命などただも同然とでも思つていやがるのか。こんな見え見えの罠に何でかからねばならんのだ！」

「……大佐、頼みがある……」

「は……？」

マーク大佐の頭に団体で昇つていた血が、司令官の冷静な声で一部

帰郷する。

「本国艦隊の壊滅はこれで避けられなくなった」

「なら、こんな命令など拒否なさい」

年齢から言えば、マーク大佐のほうが中将よりも年上である。マークは新任少尉時代に上官の参謀少佐を殴り付けて下士官に降等され、その後、文字通りの叩き上げとして大佐にまで昇った。官僚化し、硬直した共和国宇宙軍では滅多にない存在だが、戦闘に対する勘に優れ、ロークの信頼が篤かった。

「上官ではなく、政府を殴り付けろ、というのだな」

「そうです。我々は虫けらではない。コンピュータのディスプレイで表示される数字の一部ではない。生命を持った人間であることを思い知らせてやらねば、連中はいくらでも思い上がる。大体、ターク大將などに艦隊が指揮できるものですか。知ってますか、奴はこれまでにべで三〇〇人足らずしか兵を指揮したことがないんですぞ。それも、実戦部隊ではなく、参謀本部のオペレータ達だ」

「分かっている……」

ロークは疲れた微笑で副司令官の怒声を遮った。

「が、我々は共和国宇宙軍の軍人だ。共和国政府の命令には従わねばならん」

「こんな理不尽な命令でも、ですか？」

「そうだ」

司令官の声に妥協を拒む厳格さを聞き取って、マークは頑丈な肩を落とした。

「では、閣下……小官が閣下に従って解任を願ひ出ることをお許し下さいますか？」

「許さん」

ロークは紅茶色の髪を短く刈った頭を左右に振る。

「貴官は残れ。そして、できる限りの兵力を脱出させ、ミュトウレイと合流するのだ。それから補給艦には積める限りの補給物資を積み込め。ミュトウレイには参謀総長閣下のくだらん演説や一〇〇個の勲章より、一トンでも多くの補給物資と一人でも多くの兵力が必要なはずだ……貴官にばかり負担をかけるな……すまんと思っている」

それなら本国艦隊全てを率いてロメイチェフ艦隊に合流すればいいではないか……とマークは思ったが、口には出せなかった。少なくとも「民主国家の軍隊」の軍人たることを自らの矜持とするロークに向かつては……

「そうだ、ミュトウレイに土産を持って行ってくれ」

ロークはデスクから一本のウィスキーを取り出して副司令官に託する。

「三〇年ものだ。逸品だよ……それから、はは、頼んでばかりだが、もし貴官が生き残ったら、俺の家族のことも頼む。娘が去年、士官学校に入ったばかりだ。私に似たから美人じゃないが、軍人としては一流になれるだろう」

「しかし……閣下……」

「負けるのだ」

中将の声は辛辣さを増した。

「参謀本部や政府の連中が敗戦の責任を自分でとると思うか？」

マークは総毛立つのを実感した。本国艦隊はほとんど確実に惨敗し、その結果、母星は無防備となる。いつもなら前線指揮官が敗戦の責めを負わされて軍法会議に引き出されるのだが、今度の場合、指揮官はターク参謀総長閣下である。彼が軍法会議に召喚されることはあり得ない……とすれば、血迷った政府がマークなり、或いは前任者に責

任を転嫁することは十二分にあり得ることだった。

「そういうことだ」

「しかし、それでは余りにも……」

包囲されてすでに一年、劣勢な艦隊と乏しい補給に耐えて母星を守り通したローク中将に報いるに、共和国は軍法会議の被告席をもつてしようというのか。

「これが民主国家というものなら……」

「おっと、それ以上言うんじゃない。我々は国家に忠誠を誓った。たとえ、報われなくとも、な。さあ、大佐、もういいだろう。艦隊の動準備にかかってくれ。私は司令官室をターク閣下に引き継ぐ準備をせねばならん」

「は……」

マークは、その生涯で三人の異なった司令官に副司令官として仕え、その内の二人とは死別することになるのだが、この時がその最初だった。

「武運を……お祈りします」

敬礼する彼に、ローク中将は頬笑んで答礼した。それが、マークが見た最後の中将の姿だった。

どうせ無駄とは思ったが、マーク大佐はターク大将に面会を求めた。ドレドのベルサリウスは本国艦隊の突出を予想して罌を張っているに違いない。好んで、罌の中に首を突っ込まなくとも戦い方は幾らでもあるではないか。

ドレド艦隊は大兵力を笠にきて、包囲殲滅を狙って来る可能性が高い。ならば、包囲にかかって来る敵艦隊の両翼を叩き、各個に撃破することもできないではない。事実、ロメイチェフは、そのやりかたで

勝っているのだ。

だが、ターク大将の肥大し切った自尊心はマークの忠告を容れる度量を持たなかった。彼は、ひどくうるさげに手を振り、大佐の言葉を遮ったのである。

「どうせ、戦いが恐ろしいのだろう。正面から堂々と反逆者どもを撃破してこそ、我が宇宙軍の大義を銀河宇宙に知らしめる所以ではないか。そんなに戦いが恐いのなら、後方に下がっておれ。卑怯者はわたしの幕僚には必要ないのだ。卑怯者に二五〇〇もの兵力は多過ぎよう。余分はわたしが貰うことにする」

薙蛇だった。マークは指揮下に置いていた二五〇〇の艦艇の内、一〇〇〇隻をターク大将直率に引き抜かれたのである。可能な限りの兵力を脱出させ、ロメイチェフに合流するという目論みの半ばが、これで潰えてしまったのだ。

「以寡撃衆が大将閣下の用兵の真髄ではないのかな？」

そう皮肉るのが、マークとしては最大の抵抗でしかなく、もちろん、その皮肉すらターク大将の耳に入れる者はいなかった。タークら、参謀本部の幹部に忠告を試み、かえってその怒りを買って前線に送られ悲惨な最期を遂げた者は枚挙に暇がない。生命を賭して、敢えてもの忠告を試みる士官は、すでに払底して久しかったのだ。

同じころ、母星の地下一〇キロに築かれた巨大シェルターでは、ドルク“新”参謀総長が数名の参謀将校とともに祝杯を上げていた。逸品のシャンペンが何本となく音高く抜かれ、最高級のクリスタル・ガラス製のシャンペン・グラスがきらめき、ワイン漬けの鹿肉のロールトが芳香を漂わせる。

「これで閣下が宇宙軍における最高の地位を確保されることになったわけであります。お目出度うございます」

ワシエック中将が代表して祝辞を述べる。

「うむ」

ターク大將への忠誠心などみせかけに過ぎない。タークに艦隊を指揮できるわけはなく、いざれ大失敗をして部下に見離されるだろう。身の程知らずのタークが失敗すれば、降格させるか軍から放り出せる。そうすれば、ドロク一派が宇宙軍の主流を占めることを妨げるものはなにもない。

“暴戾な反逆者集団の侵略から共和国を守った救国の英雄”の名はデスタリヴァ・ドロクにこそ冠せられるべきである。他の誰にも、この名はふさわしくない。

ただし、無能な官僚司令官が指揮する本国艦隊がまともな戦闘を行うことができるか否か、までは彼らの視野の及ぶところではあり得ない。もともと、本国艦隊が全滅しても、厚い岩盤と装甲に守られた彼らの安全は保証されているのだから、特に気にかけるべき事柄でもなかったのかもしれない。

司令官私室で仮眠をとっていたベルサリウス大將がけたたましい呼び出し音で叩き起こされたのは六月一〇日の深夜である。罌を張つてすでに一〇日以上が過ぎ、そろそろ限界かと思われたため、この日、ベルサリウスは母星を放置しての本格的な後退に移るべく、準備命令を発したばかりだった。一一日標準時六・〇〇時を期して罌を解除し、全艦隊がドレドへの帰還航路をとることになっていた。ロメイチェフ艦隊が挑戦してくればそれもよし。一戦し、粉碎し去る。

「なんだ？」

「偵察部隊より報告、七面鳥はオーブンに飛び込みました！」

興奮を抑えた低い声がスピーカを震わせ、ベルサリウスは僅かに残っていた眠気を顔から吹き飛ばした。

「全艦隊に通報、後退準備令を解除。第一級戦闘準備」

「命令受領、そして了解」

五分後、旗艦『フェキア』艦橋に参集したシャペル、リッツ、ダウン、モローらを前にベルサリウスは最終的な指示を与えた。

「我々の勝利とドレド共和国の独立は確定した。本国艦隊を完膚なきまでに粉碎し、共和国の最終的な戦意を砕いてしまえ」

諸將に冷水の入った紙コップが配られ、さすがにベルサリウスは一瞬苦笑した後、それを掲げた。

「残念だがシャンペンもワインもない。祝杯は勝利を得て後、我らが故国で上げるとしよう。自治共和国万歳、ブロージット！」

「ブロージット！」

諸將は和して冷水を乾し、全身に戦意をみなぎらせて各自の旗艦に散る。六月一〇日標準時二三時〇八分、“ダート恒星系外の殲滅戦”と呼ばれる戦いが始まったのである。

ナキヤソ要塞を突出した本国艦隊を、母星系外縁部で迎え撃つたのはユイ・モローのドレド第五艦隊の一部、約一〇〇〇隻である。

ベルサリウスはモローの第五艦隊を二分し、一部を陽動部隊として前面に置き、突出する本国艦隊と軽く戦わせつつ後退させ、その一方でシャペル、ダウン、リッツの三個艦隊を三方向に展開させて一挙に包囲網を完成させるべく、艦隊を配っていた。

無論、ベルサリウスの戦略構想など、ターク大将の洞察するところではない。彼にしてみれば、会戦とは勝つものであり、まして自分が前線に立つ以上、ドレド艦隊は自ら白旗を掲げて降伏するだろうとさえ公言してはばからなかったのだ。

「敗残の敵だ、恐れることなどあるか、蹴散らしてしまえ」

ターク大将は怒鳴ったが、それ以上の指示は与えなかった。というより与えることができなかった。地下シェルターで行うコンピュータ・シミュレーションであれば、敵艦隊の動き、意図、兵力は自由に知ることができるが、実戦では曖昧で矛盾した報告が複奏して入って来るのがむしろ常識であり、ロークやロメイチェフはその中から戦機を見抜く勘に恵まれていたのだが、タークは、相互に矛盾した報告を行う電子戦オペレータを怒鳴りつけるだけだった。

「何故、もっと正確な報告をせんのだっ！」

「これが精一杯であります。小官は偵察部隊からの報告をそのまま閣下に伝えております。小官が徒に報告を潤色したように仰有られるのは心外であります！」

「黙れ、貴官が任務に忠実であれば、このように矛盾した報告を行うわけがないではないか……それともロークの命令なら聞けるが、わたしの命令では不服と言うのか！」

不服だ、と怒鳴り返したい気分を、オペレータは辛うじて抑えて黙然と敬礼する。

その間にも、艦隊前衛は司令部的確な指示もないままに無秩序な遭遇戦に傾れ込みつつあった。

熱線砲が火蓋を切り、宙雷が発射され、中性子砲を初めとする重粒子砲が鮮烈な光の槍で宇宙の闇を引き裂く。核融合爆発と超融合爆発の火球が両艦隊の前衛部隊を覆い尽くすかに見え、やがてドレド艦隊

は砲撃戦一方から格闘戦部隊、更には艦載機集団を繰り出しての格闘戦にもつれこむ。

「敵艦載機、多数、急速接近！」

電子戦オペレータが豊かな音量を示して叫ぶ。

約一五〇機のドレド艦載機が俊敏な運動性を誇示しつつ本国艦隊に肉薄し、至近距離からの対艦ミサイルとビーム射撃を反復してくる。当然、本国艦隊も艦載機を放ってドグ・ファイトに応じなければならない。

旗艦艦橋要員は、“艦載機を発進させろ、突撃艇部隊、突撃せよ”という命令を期待して指揮シートを振り仰ぎ、そして呆気にとられて困惑の視線を絡み合わせた。

「……」

ターク大将は蒼白な表情で指揮シート上に硬直していたのである。

“ブリッジ、ブリッジ！ 指令を請う、指令を請う”

「航宙母艦部隊から連絡、艦載機発進の許可を請うと言っています」

「司令官閣下！」

複数の叫びが交錯し、タークの頭上で交差するが、それらは全て虚しく宙に吸い込まれ、硬直状態の司令官は何らの反応も示さない。

「司令官閣下、指揮を、指揮をお願いします！」

オペレータの一人の怒声に、タークは反射的に怒鳴り返すが、オペレータは期待していたそれと全く異なる反応に失望の舌打ちを隠さなかった。

「君ごときの指示は受けん！」

それがタークの返答だったのだ。

「なら、さっさと指示を出せ、この馬鹿野郎」

遂に耐え切れずに、オペレータが血相を変えて怒鳴り返す。“参謀

本部の威信”など、何度も戦場に立ち、しかも実戦の異常心理に支配されている前線士官には通用しなかった。

「な、なんだと……誰に向かって……」

「大将だったら給料分の仕事をしろってんだ。前衛が崩れかかっている。手を打つのは指揮官の任務だろうが。俺達を殺す気か！」

大将は戸惑いを露わにした表情でオペレータを見つめる。こんな戦いは予定になかった。戦わずに敗走する敵を追い散らして完勝の凱歌を上げるはずではなかったのか。

「どうしろ、というのだ……？」

オペレータは血走った目で司令官を睨みつけ、歯ぎしりしてコンソールに向き直って怒鳴った。

「こちら艦隊旗艦、各級指揮官は任意に迎撃を行え！」

ドレドの“歓迎部隊”は一〇〇〇隻ほどでしかなかった。彼らの任務は本国艦隊と偽装戦闘を行い、罠のただ中に誘い込むことだったが、戦い馴れた彼らは早くも本国艦隊の異常を察知していた。

「宇宙軍本国艦隊に戦意なし。総攻撃可能と認む」

ベルサリウスは看破した。

「司令官を代えたな……ロークを更迭し、参謀本部のお偉方でも後任に据えたんだらう。包囲作戦に移れ、一隻も余さずに撃ち取ってしまえ！」

ユイ・モロー中将指揮する“歓迎部隊”は巧妙に後退を開始し、統一指揮を失っている本国艦隊が無秩序に突進に移る隙を衝いてダウンとリッツ、シャペルの部隊が三方向から逆進する。

「見ろ、反逆者どもは後退したぞ。追撃だ、追撃しろ」

モロー艦隊の後退に、タークは失っていた顔色を一気に取り戻していた。彼の定義によれば、敵艦隊は後退しなければならない。これま

でのドレド艦隊の動きこそ異常だったのだ……

「い、いかん、包囲される。追撃を止めて後退しろ。旗艦に警告電を打て。後退の要有り、と打つんだ！」

戦闘情報スクリーンからドレド艦隊の意図を悟ったマークからの警告は、しかし、旗艦のオペレータまでしか届かない。

オペレータの報告を、タークの右の耳から左の耳へ聞き流した。

「敵は後退しておる！……後退の必要などない。勝っている時には勝つものなのだ。戦いの大義は我らにある。進め、進め！」

後退している敵こそ最も注意すべきではないのか……オペレータは怒鳴ろうとして、肩を疎めた。無駄であることを悟ったのだ。

一日標準時三時三二分、ベルサリウスは、獲物が十分に深く、罠の中に踏み込んだことを確認し、旗艦『フェキュア』艦上で大きく腕を振った。

「攻撃開始！」

シャペル、リッツ、ダウンの三個艦隊が同時に砲門を開き、モロー艦隊もみせかけの退却を中止して猛々しい牙を剥出しにして左右に展開した。

瞬時に本国艦隊の周囲の空間でエネルギーの暴風が荒れ狂い、煮えたぎった。この時のドレド艦隊総兵力は約一万六〇〇〇隻、対するに本国艦隊は五〇〇〇隻、三倍以上の火力が、包囲下においた敵に苛烈なまでの集中砲火を叩きつけたのだ。

それは、“三時三二分の十時射撃”として後に知られる事になるほど凄まじい一点集中射撃だった。過密なまでに集中されたビームは戦艦の防禦シールドをやすやすと貫通し、一艦を破壊してなお収まらずに他の数艦を粉碎し、炸裂する宙雷弾頭は純白の火球のネックレスを綴り上げた。エネルギーの暴風は本国艦隊の防禦陣形を突破し、ター

ク大将の座乗する旗艦を奔流の只中に巻き込み、翻弄し、噛み砕く。膨大な破壊力の飛沫が八方へ飛び散って、直衛艦を五彩の焰に包み込み、無数の閃光の破片と化して四散する。旗艦の直衛艦が三つに折れ砕け、エネルギーの鮮血を撒き散らしながら爆発、めくるめく純白の火球が旗艦のスクリーンを満たした。

「な、な、なんだ、何だ、これは！」

荒れ狂う破壊力の嵐に突き上げられ、激烈な動揺の中に取り込まれた旗艦の指揮シートから、ターク大将は不様に転げ落ちていた。

「包囲されました……」

「艦尾に被弾……二番、三番動力炉、作動停止。一番、出力四〇パーセント低下、四番、出力六〇パーセント低下。主砲動力、供給停止」

ブリッジの中を悲鳴と怒号が渦巻くが、それを受けて的確な指示を下すべき人物の姿はない。

旗艦艦長ニシ中佐は冷やかな目で不様に床に這った大将を見下ろし、ひょいと肩を竦めた。

「この艦はもう駄目です……もって、あと一〇分ですね」

「だ、脱出だ、シヤ、シヤトルを用意しろ！」

中佐も最早、侮蔑の表情を隠そうともしない。

「無駄です。シヤトル格納庫も破壊されました。脱出は不可能です。せめて潔く、最期をお迎え下さい」

「こ、降伏信号を……！」

「不可能です」

奇妙なほど冷静な声で電子戦オペレータが、ターク大将のあがきに最後のとどめを刺した。彼は内心で妻と、生まれたばかりの息子に別れを告げながら、殊更に冷静な口調を装ったのである。尊大さを絵に描いて額縁と名札までつけたようなターク大将の顔面に、絶望的な恐

怖の表情が広がるのを、このオペレータはむしろ小気味よげに見つめていた。

「通信システムも破壊されました、一切の信号の発信は不可能です」

包囲され、集中射撃的となつて次々に粉砕されていく僚艦の姿を、マーク大佐は戦艦『トライエル』のブリッジで見つめていた。一年以上、二万のドレド艦隊に頑強な抵抗を続けて来た本国艦隊が、僅かに五時間に満たない戦闘で無残にも壊滅していくのだ。指揮官が代わった……ただ、それだけのことで、本国艦隊は精強な獅子の集団から、猟師に追われて逃げ惑う臆病な羊の群と化したのだ。

「やれやれ……惨憺たるものだな」

「副司令官閣下……どうなさいますか？」

問う幕僚の一人に、マークは無感動な視線を投げ、そして、それがターク大将の不興を買って左遷されたフェレスレット・ラング大尉であることに気がつき、半ば白くなった眉の端を跳ね上げた。

「貴官ならどうする？」

「逃げるか、降伏するか、です」

「ほう、戦わんのか。最後の一兵まで戦え、というのが、参謀本部のありがたいお言葉ではなかったかね？」

「あの参謀本部に従え、とおっしゃるのですか。この期に及んでも？」

「はは、からかって悪かった。降伏するのはどうも性に合わん。逃げることを考えるでしょうか」

武骨な肩を、マークは不器用に竦めて見せた。

その間にもドレド艦隊の攻撃はますます苛烈さを増していた。すでに戦略レベルでの勝利を確保しており、彼らはそれをさらに戦術レベ

ルで確立することを望んだのに対し、全滅の窮地に立たされた本国艦隊の各艦艇は、それでも絶望的で必死の抵抗を続けていたのである。戦場を支配する破壊と殺戮の暴風はかえってその勢いを増し、より多くの艦艇とより多くの将兵を、その犠牲の祭壇に要求した。

しかし、すでにベルサリウスを初めとするドレド艦隊の首脳は詳細な指示を下すのをやめている。この戦場での勝利は確定している以上、戦術的な勝利は中級以下の指揮官の追求に任せておけばよい。

旗艦から旗艦へ通信が飛び、短い協議が行われた結果、ロメイチェフ艦隊を敵とした戦略が決定された。

「……母星を灼く。共和国政府は焦ってロメイチェフを呼び返すだろう。それをアージャナ・ラインで捕捉し、粉碎すればよい。目の前で最後の艦隊を叩き潰されれば、いかに目の見えぬ共和国政府も講和を受諾するだろう」

「……しかし、政府と参謀本部は首都地下のシェルターに退避しているようだぞ。あの大シェルターは一〇キロ以上の地下に構築されていると聞く。一〇〇〇発や二〇〇〇発の熱核ミサイルでは一〇キロの岩盤は貫通できぬし、それにそんな大量の対地ミサイルの備蓄もない」

「やりようはあるさ……」

歴史上で難攻不落を謳われた要塞が陥落しなかったことはほとんどない。大体、首都地下シェルターは、もともと二〇〇年以上も前に対戦略核戦争退避用に建設されたものだ。当時は文字通りに難攻不落であつただろうが、それをまだに金科玉条としている参謀本部の思考の硬直性は笑止の極みだった。

「……数年前に廃棄された宇宙コロニーがあるだろう」

ベルサリウスは麾下の提督達に作戦を披露した。

放棄された宇宙コロニーは直径五キロから二〇キロ、全長は一〇キ

ロから五〇キロに及び、総数は一〇〇基を越え、母星の衛星軌道上を巡っているのだ。これらを軌道から外し、母星の地表に落下させる。厚さ一〇キロの岩盤といえども、総重量数兆トンのコロニーに直撃されて、なお難攻不落を呼号しておられようか……

「なるほど……合理的な作戦ですが……」

どこからそんな作戦を思い付いたのか、と訝しむ老将シヤペルに向かって、ベルサリウスは幾分照れたような表情になった。

「古い子供向けのアクション・ドラマにそんなプロットがあつたのを思い出してな。工兵に実現性を問うところ、可能、という返事だった。それだけのことだ」

警報が会議を中断させた。マーク大佐の直率部隊が脱出行動に移ったのである。

マーク大佐は直率部隊を巧妙に進退させて敵艦を局所的な逆包围に置き、八方から集中射撃を浴びせる、という戦術でドレド艦隊に思いのほかの出血を強いながら、一隻でも多くの友軍艦艇を收容しようと試みていた。

が、一日標準時七時過ぎになるとマークの努力も限界に達していた。他の戦線はほとんどが崩壊し、獲物を求めるドレド艦隊の数は逐次増加して彼の抵抗線に穴を穿ち始めていた。マーク部隊からの集中射撃でドレド艦隊に穿たれた穴は数瞬の後には埋められたが、苛烈な応射で切り破られたマーク部隊の戦線は縮小の一途を辿るばかりだった。

が、マーク大佐がドレド艦隊に報いた戦術は、巧緻にしてしかも苛烈を極めたものだった。

「戦線を全面的に後退させよ、艦隊を球形に組み直せ」

マーク部隊は急速に後退を開始し、追撃するドレド艦隊との間に一時的な間隙を生じた。ドレドの前線指揮官が無能ではなく、能力と、それ以上に戦意に溢れていたことが、この際はマークの術中に陥る原因となったのである。

マーク部隊の後退速度は、ドレド艦隊の予測を越えて迅速を極めた。このため、最前線の部隊が交錯し、一時的な過密状態を呈して各級指揮官が麾下部隊の掌握に手間取ることになった。

それが、ドウリュー・ラ・マーク大佐の狙っていた一瞬だった。

「全艦斉射三連の後、最大戦速にて突撃！」

ドレド艦隊の戦線の一角で閃光の渦が炸裂した。約二〇〇〇に達するマーク部隊が最後の最後に集中した凄まじい砲火は、過密状態になったドレド艦隊の艦列をずたずたに切り破り、しかもマークの巧妙さはモロー艦隊とダウン艦隊の境目にその全火力を集中させたことだった。ダウン艦隊はロック艦隊との交戦での傷がまだ十分に癒えておらず、一方モロー艦隊は新編成であつて他の三個艦隊よりもやや脆い。

ダウンは怒鳴り、モローは部下を叱咤して、戦線の再編成に全力を上げたが、間一髪及ばなかった。

集中的な砲撃で僅かに穿ったドレド艦隊の戦線上の亀裂に、マークは持てる全ての兵力を一気に叩きつけ、遂に退路を確保した。モローとダウンは、リッツ艦隊の増援を受けて退路の遮断を試み、その三割以上の艦艇を撃破、ないしは包囲して降伏させたが、マーク自身の率いる兵力の中核を捕捉しきるには至らなかった。

ベルサリウス大將は、予備隊として控置しておいた高速巡洋艦三個集団を放って追撃を行わせたが、マーク大佐の柔軟でしかも堅固な防禦陣を突き崩すことはできずに追撃を断念することになった。

「まあいい。これで母星はがら空きになった。逃げたところで彼らは明日はないのだ。深追いを避けよ」

“敵艦隊ワープ……”という報告は徹底的な追撃命令を期待するものだったかもしれないが、ベルサリウスは追撃を取り止めさせた。彼らがロメイチェフと合流したとしても、いずれロメイチェフ艦隊そのものの命運が尽きてしまうのだ。ここで無理押しして、無用の損害を出す必要はなかった。

「艦列を整えよ。ナキャソ・ラインに進出し、母星空襲の準備にかかろぞ」

ロメイチェフ艦隊が、ドライバオム宙域にほど近い“隠れ家”を出たのは、この“ダート恒星系外縁の殲滅戦”より僅かに前だった。

兵力は四二〇〇隻、六五万人余り……とは言え、ロメイチェフらにとって真にあてになる兵力は三四〇〇隻ほどでしかなく、ロメイチェフなどはあとの八〇〇隻余りを露骨に“埋め草”など呼んでいた。実際、それらはドレドからの捕獲艦艇であり、搭乗員も未訓練の新兵が多く、精々陽動か連絡にしか使えそうにもなかったのだから、指揮を任されたマックス大佐は渋い表情を隠しようもなかった。

「……が、君の任務は重大なんだ」

マールク“少将”は穏やかな口調で説明する。

「機動力には劣るが、君の部隊は強大な火力を持っている。それを充分に生かしてほしいんだよ」

「まあ、確かに火力部隊であることは認めますがね……」

大型戦艦の集団だとしても言うのなら満足もするが、とマックスは苦笑するしかないらしい。戦艦もいるにはいるが、極く少数で、大部分

は大口径熱線砲装備の砲艦、それに宙雷改装の超融合宇宙機雷が相当数ではない。成程、火力は強力かもしれないが、防御力と機動力についてはお寒い限りだ。防禦の方は補助艦種であるシールド艦を敷き並べることで何とかカバーできないでもないが……

「うん、まあ、君が必死で動かなければならないようでは、次の会戦は多分負けだ」

「成算は？」

マックスは容赦なく問う。彼は、まだマールクの指揮に接していない。

マールクは軍帽をとって髪を掻き回しながら、その軍帽を右手でくるくると回す。

「四倍からの敵と戦うんだよ、成算が立つと思うかい？」

「では、成算もなく戦いに臨まれるわけですか？」

「いや……そんなことはないさ。成算はある。でも、そんなに高い勝算はない。それだけのことさ」

四、五倍の敵と戦わなければならない、ということ自体が負けではないのかな……というのがマールクの感想だった。

「兵力を沢山持っている者はますます強くなり、兵力が枯渇している方はますます枯渇する……それが戦争の原理みたいだよ」

「まるで資本主義経済の基本原理の講義ですね」

マックスも、元大学生の生地を見せる。マールクは我が意を得たりと大きく頷いた。

「うん、そういうこと。さて、そんな高級な話じゃないが、貧乏人が金持ち並みの財産を得るにはどうすればいいかな……もちろん、極く標準的な貧乏人を考えて見てほしいんだが……」

「ふむ……」

知らず、マールクの話術に取り込まれているマックスに、“参謀長副官”よろしく佇立していたネイとドレスンが顔を見合わせて微笑を交わす。

「例えば……宝くじをあてるとか、そうですね、もっと過激には、“大金持ち”を相手に強盗を働くとか……」

「本当に過激だなあ……」

「なに、もっと過激な連中もいますよ。今でも始終、“革命近し”とか何とか叫んでる連中とか……」

「あは……そこまで考えなくてもいいよ。君の意見は当たらずとも遠からず。強盗じゃなくて、詐欺を働いて、金持ちの財産を巻き上げる……さてと、賢明なる諸君。この詐欺の成功率は？」

「限りなくゼロに近いですね」

ネイが遠慮なく浴びせかけ、マールクは軍帽を会議室の天井に放り上げて破顔した。

「ご明答……まあ、そういうことだよ、マックス大佐。この際、我々は金持ちの鷹揚さにつけこんで、とんでもない詐欺に引っ掛けるしか、活路はないわけだ」

頷き、さらにマックスは問う。

「で、詐欺のネタは？」

「詐欺っていうのはね、マックス大佐」

マールクの口調はあくまで気楽さを崩さない。

「基本的なところはみんな同じなんだ。つまり、楽してとっても儲かるよ、という旨い話がある。ただし、儲かるためには条件がある、と来る」

「まず投資なり、準備なり、入会金なり……」

「うん。ここで、ドレド艦隊にとって旨い儲け話はロメイチェフ艦隊

の殲滅。探さなくても我々が隠れ家から出てくるってことだ」

「つまり……」

マックスはうなつた。

「ただし、戦場は我が艦隊が選択した宙域で、というのが……」

「はいご名答。成功率は高くないが、要するに路傍でのたれ死ぬか、詐欺に失敗して刑務所入りするか、それとも大成功して一山当てるか……そういったことさ」

ひどい例えだ、と呟いたのはドレスン准将だが、マールクのもの例えの極端さにはすでに十分な免疫を得ている彼だったから、この場合には、僅かに注釈を加えるに留めることにした。

「刑務所入りはありません。失敗すれば死刑ですから」

「確かに……」

実際、冗談でも飛ばしていなければ、四倍から五倍に達する敵艦隊との決戦を前にした緊張感に、まともな人間なら耐えられるものではなかっただろう。

マールクは本国艦隊の壊滅を知らなかった。もちろん、

『……もし知っていたとしたならば、マールクは苦しい選択を強いられたことであろう。母星の破滅を見捨ててまで当初の作戦を貫徹するか、それとも母星の危急を救う為に、敢えてドレド艦隊に勝算のない正面決戦を挑むか。翻って言えば、ベルサリウスの失敗の最大のもの、情報封鎖を厳格にするの余り、情報そのものを武器として用いることを忘れていた点にあらう……』

などという批評は結果論でしかないのだが。

六月一三日、ドレド艦隊はモロー艦隊の一部をもってナキャソ要塞

を封鎖、他の大部分を母星衛星軌道上に展開させ、事実上の包囲態勢を完成させた。

ドレド自治政府のユージン・ヨセフスタート主席は、統制のとれた包囲作戦により共和国政府の戦意を挫かせ、流血を見ずしての講和成立を希望して、その旨をベルサリウス大将に訓令していた。熱核ミサイルによる絨毯爆撃、或いは宇宙コロニーの落下による地下シェルターの破壊も結構だが、数億の流血を強いることになり、かえって共和国に徹底抗戦の意志を固めさせてしまわぬとも限らない。

「……数箇月も包囲を続ければ、共和国市民が不安に耐えかねるのではないのか」

ヨセフスタートは、しかし、戦勝した軍隊の危険さを過小に見積もっていたようだった。敵国首都の至近で勝利を得た軍隊が、その突進を停止して政略に従った例は皆無に近いとさえ言えることは共和国そのものの歴史が物語る。極めて傑出した政治・軍事の指導者のコンビを得て、初めて突進する軍隊の勢いを止めることができるのである。

ヨセフスタートもベルサリウスも優れた政治家であり、軍人であったが、歴史にその希少価値を主張できるほどではなかった。

六月一四日、不気味に遊弋するドレド艦隊に、遂に共和国宇宙軍の方が暴発してしまったのである。

シエリ市郊外にある第三四防空基地の将兵たちは、さきにシャペル艦隊の空襲を受けて大損害を出した記憶を呼び覚まされ、真っ先にパニックに陥った。

「また、参謀本部の連中が反撃を禁止して来るぞ……その前に攻撃して、連中の命令を封じろ……」

「俺達は“参謀本部の威信”とかのために戦いもせずに犬死にするのは御免だ！」

「撃て、撃ってしまえ」

共和国宇宙軍の将兵が、パニックに驚掴みにされて右往左往するのを、アーテミシアは呆然として眺めていた。基地の戦闘情報センターのリーダー・スクリーンは数百のドレド艦を捉えていたが、彼女自身は別段の恐怖を覚えない。むしろ、友軍将兵の血相の変わった表情や、怪鳥の叫びに似た怒号の方が恐かった。

「……早く、早く救けに来てよ、なにしてるの、ネイったら……ネイ、あなたどこにいるの……」

耳を塞いでコンソールの上に顔を伏せながら、それでもアーテミシアは、ネイが艦隊を率いて救けに来てくれることを疑わなかった。

しかし、二三時一分、第三四防空基地は遂に対空火器の砲門を一斉に開いた。数百発の核弾頭ミサイルが閃光の尾を引いて夜空に舞い上がり、ついで基地の敷地全域から正視し難い光の帯が吹き伸びる。続いて、同基地からのコントロールを受けていた四個の大型戦闘衛星も、装備された中性子砲の斉射をドレド艦隊の中央部に叩き込んだのである。

警戒はしていたものの、ドレド艦隊にとってこれは明らかに機先を制された一撃だった。

たちまち、十数隻のドレド艦艇が爆発し、数十隻が損傷を被った。致命的な損傷を受けた艦は母星引力圏に引き込まれ、小型艦は大気との摩擦で粉々になって時ならぬ流星雨を現出させる一方、大型艦は一部分分解したものの大部分は燃え尽きずに地表に落下、動力炉の爆発が格納庫内の核融合、超融合弾頭を誘爆させた。

戦艦『ジョフォール』は中性子弾頭ミサイルの直撃を受けて搭乗員が全滅した。全長四五〇メートルを越える巨大な巡航戦艦は後部動力炉の爆発で母星地表へのベクトルを与えられ、偶然のサイコロの弾き

出した目に従って首都レイヴェルゲンの北に落下した。

レイヴェルゲン北の閑静な住宅街であるシェールキツヒで、ネイとアリシアの両親は凄まじい轟音に庭に飛び出し、そして信じられない速度で落下して来る巨大な戦艦をまのあたりにした。

ふたりが自らの運命を悟る時間があつたかどうか……次の瞬間、閃光がレイヴェルゲンの町並みを覆い尽くし、続いて轟音と衝撃波がなにもかもを薙ぎ倒した。

『ドレド艦隊、地表爆撃を開始……』

更に事態を悪化させたのは、政府主席ランルサク・ヘンチェのもとに届けられた誤報だった。

「母星を、母星を灼くとは……貴様たちは、それでも共和国の市民なのかっ！」

母星……という言葉で、ドレド艦隊将兵を心理的に縛ろうとしたヘンチェは、その言葉が長年にわたる共和国政府の無為無策によって貧窮に喘ぎ続けたドレドの将兵たちの怒りを撃発させることになるうとは思ってもよらなかった。

「ふざけるな、母星が俺達に何をしてくれた？」

艦隊も全滅し、膝を屈して和を請うしかない状況にあつて、なお傲然と宗主国を気取ろうと言うのか……

瞬間にドレド艦隊はベルサリウスの統制をすら宇宙の彼方に蹴り飛ばした。

総攻撃の命令が艦隊を突つ走った。

「撃て！」

「撃て！」

何千という発射命令が解き放たれ、二万近いドレド艦隊から数十万本のエネルギービームが吹き伸び、数千発の宙雷が、中性子砲が、母

星の地表に降り注いだのだ。

レイヴェルゲンの南五〇〇キロの小都市シャトルウは熱線砲の集中放射を浴びて巨大なクレーターと化した。この町にはベイ・ドレソンの両親と二人の弟が住んでいた。

また、レイヴェルゲンの裏側にあたるヨーテンシュテルンでは、フアートウリック・ラングの弟が、落下して来る巨大な宙雷を死の直前に目撃することになった。

「やめろ、やめぬか！ 地表を灼いて何になる。いたずらに人を殺すだけではないか」

ベルサリウスの制止も、復讐に猛りたち、流血の宴に酔い狂った部下将兵には届かない。狙点すらろくに定めぬ乱射で、今や彼らは母星表面を覆い尽くそうとしているかのようだった。

第三四防空基地にも当然のように報復の猛射が襲いかかった。

パニックのあぎとに掴まれながらも、基地の将兵は必死に防戦し、少なからぬ損害をドレド艦隊に与えたが、それも一五日の朝日を見るまでは続かなかった。

戦艦『スターブレザー』の放った一撃が基地の動力炉を貫通して誘爆させ、駆逐艦からの熱線砲射撃が動力を失った基地に止めを刺した。

「……！」

戦闘情報センターを蔽っていた分厚いベトンと装甲のドームも宇宙戦艦の主砲射撃には長くは耐えられなかった。

閃光が視界を覆い、轟音が聴覚を麻痺させる。

アーテミシアが最後に目にしたのは、碎け散り、頭上に落下してくる分厚いコンクリートの塊だった。そして、息の詰まるような凄まじい衝撃と激痛を感じると同時に、一切の感覚がブラックアウトした。

ドレド艦隊の猛攻は、しかし、一五日の五時過ぎには終息した。ベルサリウスを初めとする艦隊司令部が必死になって叱咤し、攻撃の行き過ぎを食い止めようとしたのと、それにもともと全面攻撃を何日も続けていられるほど彼らの物資は豊富ではなかったのだ。

さらには、ドレド自治政府からの急報が彼らを愕然とさせたことも、思いのほか早く殺戮と流血の宴を閉じさせる役目を果たした。

ドライバオム宙域の中継基地がロメイチェフ艦隊に包囲され、攻撃を受けている。このままでは基地は陥落し、補給線は完全に遮断されてしまうだろう……

「見たか、貴官等が無意味な人殺しをしている間に、ロメイチェフは我々を本格的に乾し上げようとしているのだ。貴重な物資を浪費したばかりか、無用に人命を奪った愚劣さを反省するがいい」

ベルサリウスは好戦的な軍人の典型ではあったが、無用の殺戮を決してよしとはしていなかった、とはフアートウリック・ラングが戦後に敵将を評した言葉である。共和国宇宙軍は、戦後に自ら自己賛美に満ちた“ドレド戦役史”を編纂し、ベルサリウスを初めとするドレドの将帥を愚将の典型として描いたが、事実はそんなものではなかったのだ。事実、共和国の歴史家は一致して“ドレド戦役史”を、『歴史上の資料としても、また戦史としても全く役に立たない、ただの言葉の羅列』に過ぎないと酷評するに至るのである。

ともあれ、ベルサリウスは母星の包囲を放棄し、ドライバオムの中継補給基地を救援すべくダート恒星系を離れることになる。

アリシアが、シエリ市の国立病院に駆け付けたのは一六日のことだった。廃虚と化した第三四防空基地で収容された重傷者のひとり、アリシアを呼んでくれるように頼んだのだと聞かされ、彼女はすぐに思い当った。

「……アータ！」

巻き毛の頭を包帯で包まれ、ベッドに横たわったアーテミシアは、アリシアを目にして力のない微笑を浮かべた。

「アータ、あなたは馬鹿よ」

他に言うべき言葉が見つからず、アリシアはアーテミシアの病床の傍らで絶句する。包帯の下から見慣れた、愛くるしい緑色の瞳が微笑んでアリシアを見つめた。

「……あは、御免、アリシア……みつともないな……包帯だらけで、まるで……ミイラみたい」

擦れた、しかしまぎれもないアーテミシアの明るい口調だった。

「でも……でも、よかったわ。よく助かったわね。あなたにまでもしものことがあつたら、わたし、ネイに合わせる顔がないわ」

「……ね、知ってる、アリシア？」

「え？」

「テレビだとかさ、それに映画だとか……悪い奴は一発で死んじゃうのに……正義の味方の恋人なんかは……きつと、恋人に抱かれて“さよなら”って言うって……死ぬのよね」

「アータ、あなた、何を言ってるの。ふざけるのはやめて。怒るわよ！」

胸に凍りつくような恐怖を覚え、アリシアは顔色を変えた。思わず、彼女を案内してくれた看護婦を振り返り、その看護婦が痛ましげな表情でかぶりを振る意味を、戦慄に似た恐怖とも認識する。アリシアはアーテミシアの左手を握り締めながら思わず声を高くした。

アーテミシアのグリーン・グレイの瞳からは、すでに光が薄れかけていた。

「あはは……悲劇のヒロインにはなりそこねちゃった……だって……ネイが、敵をやっつけて……ここにきてくれなくちゃ……見せ場にならないもん……」

いつに変わらぬ陽気な口調。しかし、次第に弱々しくなっていく声が、かえって耐え難かった。

「止めて、アータ、お願い、やめて。アータ、元気を出すのよ。あなたには悲劇のヒロインなんか似合わない。ハッピー・エンドで終わらせて。アータ、わたしと一緒にネイを迎えに行こう、ね、だから、だめよ、アータ……アータ！」

「無理言わないでよ、アリシア……できの悪い脚本だけど……ヒロインとしては……ちゃんと……やらなきゃ……アリシアあ、ネイに言ってるね……死んじゃって……御免なさい……って。ごめん……アリシア」「いや、いやよ、そんな、そんな言葉は伝えないわ。馬鹿、アータの馬鹿。死んだら、許さない、ネイを悲しませたら、絶対に許さないから！」

激しく首を振るアリシアの金色の髪が、急激に暗くなっていく視界の中で一際鮮やかなきらめきを放つ。アーテミシアにはそれが夜空一杯に広がる星々の輝きのように見え、数年前の記憶を呼び覚まされた。

「……ネイがね……雲の向こうに行きたいな……って」

暗黒星雲に包まれた共和国圏ではまばらな星空しか見ることはできない。一〇歳を幾つも過ぎていなかった頃、ネイは暗黒星雲を超えて旅する自分を夢見て、その夢をアーテミシアに語ったのだ。

「ネイはね……きつと連れてってくれるって……ネイは、いつだって

……あの時のネイだよ……ね、アリシア……」

そうなのだ……アリシアは理解した。弟にとつて、アーテミシアは彼の夢を共有してくれる存在だったのだ。ほとんどの人間にとつて、夢を共有してくれる誰かしらと巡り合うことなど、それこそ夢でしかないというのに……

「ええ、だから、だから、アータ、しっかりと、ネイと一緒に雲の向こうへいくんでしょ、目を開けるのよ。返事をして、アータ！」

巻き毛の少女は微笑んだ。が、やがて、その微笑みは薄れ、消え去っていった。

全身が氷柱と化したような恐怖とともに、アリシアは、自分たち姉弟がかげがえのない存在をまたひとり、永久に失ったことを悟った。いつもの冷静さのかけらもなく、飛び去った魂を呼び戻そうとするかのように、彼女はアーテミシアの肩を激しく揺ぶった。

「アータ……アータ、だめ、死んじやだめ、目を開けて、アータ！ 逝かないで、お願い、アーテミシアッ！」

この大空襲の犠牲となったのは約一〇億、母星の総人口八〇億の約八分の一である。この空襲は、戦後、“ドレド戦役最大の悲劇”と呼ばれるようになったために、総人口の半ば以上が失われたかのような錯覚を抱かせるのだが。

しかし、一夜にして一〇億を超える死者を算した戦いは、ル・フントの歴史上でも皆無だった。更には負傷者は二〇億に近く、その後五年間に半数以上が死亡することになる。巨大な悲劇であることは間違いないく、しかも、地表の多くが核弾頭の炸裂によって汚染されたことは重大だった。

すでに、この時代には抗放射能薬剤が発明され、また放射能汚染除去についても基本的な技術は完成を見ていたのだが、ル・フント全域を覆った閉塞感と中世的な停滞が致命的だった。惑星ル・フントの衛星からマス・ドライバで土壌を運び、一方、汚染された母星の土壌を衛星に運び上げるといふ壮大な土壌交換計画、あるいは宇宙コロニーを再建して新たな居住地を求めようとする宇宙移民計画も立てられて共和国政府に提出されたのだが、ことごとく却下されるに至る。“金がない”、“時間がかり過ぎる”……そして“票にならん”……

「何故だ、戦争をする金はあるても、母星の放射能汚染を取り除く金はないと言うのか……！」

計画の立案者達の憤りは、しかし、共和国市民そのものの意見として政府を動かすには至らない。両計画を実施する費用は、“ドレド戦役”での戦費の十分の一でしかない、とする試算は、共和国のマス・コミによって黙殺され、その“非現実性”のみが強調されることになるからである。そして、“現実的解決策”の美名のもとに、七年後にシエルメス連邦との全面戦争になだれこんでいくことは、歴史の記すところである。

本国艦隊司令官交替という参謀本部演出の茶番劇は、母星空襲という悲劇に発展したが、悲劇は悲劇としては終わらなかった。

三〇億の死傷者……八人に三人が死ぬか傷つくかした巨大な悲劇をまのあたりにして、さすがに共和国市民の間からは政府を非難する声が上がりはじめていたのだ。

もちろん、多くのジャーナリズムは政府と参謀本部を弁護し、

「……究極のところ、市民に臨戦の心構えが足りなかった。戦うのは

政府の役割であるとして、自らこの聖戦に参加する決意に欠けていた共和国市民の無責任さが、今回の悲劇を生んだのである……」

と強弁した。が、実際に、ほとんどの共和国市民が空襲で家族を失い、そうでなくとも住むべき家を失ったのである。しかも、ジャーナリズムは“共和国宇宙軍の希望の星”ヴィレックス・ターク大将の本国艦隊司令官就任を“ドレド艦隊壊滅への狼煙”として大々的に扱っていた。本国艦隊は、ターク大将が司令官となつて一か月とせずに壊滅してしまつた。そして、本国艦隊の壊滅こそは、今回の悲劇を招いた最大の原因ではないのか……

「……ターク大将が参謀総長であつたからこそ、一年もの長きに亘つてドレド艦隊の攻撃に耐えられたのである。大将は称賛されるべきであり、非難されるべきいわれはない」

政府と参謀本部は大手のジャーナリズムの全面的な強力を得て、詭弁を弄し続け、彼らを非難する市民を“聖戦を愚弄し、敵国のスパイに踊らされている”と攻撃していたが、それでも何かしら市民の不満を鎮める策を打つべき時に来ていることを悟つてはいた。

「宜しいではありませんか……」

口癖のようなフレーズを繰り返しながら、ワシエック中将はドロク参謀総長に具申した。唯一の競争相手たるターク大将は破滅し、ドレド艦隊は退いて、彼らの地位が安定したことに改めて祝杯を上げた後である。

「この際です、ロークを葬ってしましましょう」

「どうやるのだ？」

「軍法会議です。本国艦隊の大損害は、ロークが余りにも消極策を固

持し過ぎて、ドレド艦隊を撃滅できる機会を失したことに由来しますから、その罪、万死に値します」

ワシエックは“壊滅”という言葉を使わなかつた。

「ロークにはいささか、人望が有ります。予備役編入ではこころもとない。この際、将来の禍根は除くべきですし、また信賞必罰は武門のよつてたつところですよ。ロークの罪は厳しく問い、ターク大将の功績は高く称賛して、市民どもの不満を宥めてやればよろしいでしょう」

ワシエックは言う。ターク大将を元帥に進め、“悲劇の名将”として無数の賛辞を送り、国葬をもつて遇する。マス・メディアを通じて、繰り返し繰り返し、ターク大将の“功績”を讃え続ける一方で、ローク中将の“犯罪的怠慢さ”を報道させれば、市民とて自然に洗脳されてしまうものだ。そして、彼らの抱く不満は政府からそらされ、ロークとその家族に集中されることになる。政府という抽象的存在を攻撃するより、ロークの家族という具象を攻撃する方が、一般市民にとつても気が楽だろう。

「……市民は政府への忠誠心を必ず抱いております。政府への非難は、自らの忠誠心に対してうしろめたく思うところが必ず有りますから、政府以外に非難の対象を発見すれば、易々として矛先を転じましょう。それに、ロークに罪があるのは否定できません」

ドレド艦隊を撃破できなかったのは許し難い、その点だけでも罪を問うべきだ。

肥満禿頭の中将は、すだれ状に禿げ上がった頭を見事に上気させて熱弁を揮い、ドロク中将は我が意を得て頷いた。

「宜しい。貴官の主張を容れよう。ロークの罪を問う」

六月二〇日、共和国政府はヴィレックス・ターク大将を元帥府に列せしめ、生前に遡って共和国宇宙軍大臣の地位を与え、更に共和国最高榮譽大授章……共和国の最高勲章……を贈って、その死を悼んだ。

「……一人の勇者が、尊い生命を祖国に捧げた。市民諸君、彼は、諸君の祖国を守る為に自らの生命を捧げて逝ったのだ。ひとりの人間として、これほど崇高で、気高い行為が他にあるだろうか……わたしは敢えて断言する。ないのだ。祖国を失って、何の自由か、何の権利か……諸君、最早、ドレドの反逆者達との共存などという迷妄から覚め給え。彼らは、我が共和国最高の戦士、ターク元帥を初めとして、共和国に忠誠を誓う諸君の父を、夫を、恋人を奪い去ったのだ……元帥が諸君らに今も呼びかけている声が聞こえないか。ドレドを倒し、宇宙に我らが正義を打ち立てよ、という、その叫びに、諸君はなにゆえに耳を閉ざそうとするのか。

さあ、諸君、共和国の万歳を唱えて、勇士を送ろうではないか。共和国万歳、ターク元帥万歳！」

二二日、ターク元帥の国葬が行われ、ドロク参謀総長の雄弁に、観衆は熱狂して総立ちとなって万歳をうたい上げ、拳を振り回してドレドの反逆者の打倒を叫んだ。

アリシアは……このときも、学徒兵代表としてターク元帥への弔辞を述べることを求められたのだが、結局は国葬の会場にも行かずに済んだ。断ったのではなく、不可抗力で……この日、健康な彼女にしては何年振りに四〇度を越す高熱に苦しめられながら、病床でドロク中将の演説を聞く羽目になっていたのである。アーテミシアの死に続いてシェールキツヒ地区の壊滅と両親の死は、気丈な彼女にとっても大き過ぎる衝撃だったのだらう。幼い頃には、よく熱を出すネイを看病するのが彼女の仕事の一つだったものだが……

熱に浮かされて夢の迷路をさま迷いながらも、アリシアはドロク中将の空疎な美辞麗句を遠く耳にしていたのである。

ドレド艦隊の重厚な縦深陣を辛うじて突破したマーク大佐が、何回かのパルス・ワープの後に一息をいれ、麾下の部隊の再編成にあたる余裕を得たのは一七日、タークの元帥への昇進が報道された日だった。

「ターク“元帥”だと……」

マークは睡眠不足と敗北感からくる憔悴の著しい顔に呆気に取られた表情を浮かべた。執拗に追撃を試みて来るドレドの高速艦隊をかわして逃げ回り、漸くワルステート・ジャンクションを越えるまでに約五日、その間にとった睡眠時間は一〇時間に満たず、士官食堂のテーブルに着いたのは二、三度でしかない。

「あの馬鹿司令官が元帥……」

一将功なつて万骨枯る、とは言うが、これは極め付けの茶番としか思えない。奴が……最早、マークは他の呼び方を使いたくなかった……奴が元帥というなら、本国艦隊の将兵は全員三階級特進、功一級共和国戦士勲章授与によつて報われてもまだ過小でしかあるまい。

マーク部隊は一四〇〇隻足らずでしかなかった。その内二〇〇隻ほどはかなり重大な損傷を受けており、戦闘参加は不可能でしかない。

「母星へ戻れるのですか？」

報告を取り纏めたランク大尉が問うのに、マークは“可能だと思ふか”と反問する。若い大尉は首を振った。

「自殺行為でしかありません……大佐、意見を述べても宜しいですか？」

「ロメイチェフ閣下の艦隊と合流しろ、と言うのだな」

マークは機先を制した。ラーンクはさして意外そうでもなく頷く。

「参謀本部が茶番劇を続けたいというなら、母星で勝手にやらせておけば宜しいではありませんか。もう充分につきあいました。これ以上は、御免です」

「貴官も参謀本部の一員だったはずだが……」

大佐の口調はほろ苦い。

「貴官は参謀総長閣下への忠誠心と、今の意見とのおりあいをどのようにしてつけたのか聞きたいものだ」

「参謀本部の一員だったからこそ、その内側をみてしまう羽目になったのです。知らなければ、小官は参謀本部と共和国宇宙軍に対して絶対的な忠誠を尽くしたでありましょうし、大佐に対しても母星への帰還を具申したと思います」

「今は違う、と言うのか」

元参謀少佐は、苦い微笑で大佐の疑問に報いた。

「自分の忠誠の対象の正体を見てしまったのです。自分が忠誠を尽くす国家が選りすぐった人物によつて運営されていることを確信できている間は、小官は軍人としての矜持に賭けて国家に報じましょう。しかし……」

ターク大將が独善と自尊心に肥大しきった官僚でしかないことを、ラーンクは知ってしまったのである。

「降格と左遷、個人的な恨みの要素もないとは申しませんが」

「冷静な判断だな……ラーンク大尉、母星に別れを告げてやれ……これより安らかなる良心をもって、我はいけにえに赴く……とな」

ラーンク大尉は敬礼をもってマークの命令に応えた。

しかし、茶番劇は悲劇をもってその幕を閉じなかつた。マーク大佐は単に脱出しただけでなく、多数の情報収集用無人衛星を散布して離

脱していったのだが、数日後には更に驚くべき情報を手にして愕然とすることになった。

ドレド艦隊の一斉反転と、そして予想していないこともなかつたにしろ、ローク中將の軍法会議への召喚である。

本国艦隊司令官交替という茶番劇に発した一連の事態は、ローク中將の軍法会議召喚に至つて醜惡なクライマックスを迎えた。

「……これほどの無能が、これほどの悲劇を招いたことは、我が光輝有る共和国宇宙軍の歴史上にも希である、と小官は敢えて断言致しますよう」

検事役を務めた参謀少將の一人は、芝居がかったポーズでローク中將の“罪状”を告発した。

「元本国艦隊司令官、ウェスコット・ローク中將……ひとりの司令官の無能さが、ドレドの反逆者集団をしてほしいままに振る舞わせ、あまつさえ母星を灼き払わせ、何らの罪もない市民の虐殺を招いたのです。あります。およそ、軍人として、これほどの犯罪がほかにあり得ましょうや？」

ローク中將は、しかし、独善のインクと倨傲のペンで書かれた醜惡な笑劇の台本を、そのまま甘受する意図はさらさらなかつた。彼は、参謀本部によつて犠牲の羊たることを強いられることを予想しており、不名誉な死を覚悟していた。

「つらいことになるだろう、お前には」

召還を受けたその日、彼は妻と別れのくちづけをかわしたあと、極端なほどに無口な長女の琥珀色の眸の放つ問いに答えてやつた。

「私は間違つたことをして罪を問われるのではない……わたし自身の誤つた選択の償いをつけにいくのだよ」

「……？」

「それに値しない国家と軍に対して忠誠を誓わなければならない軍人などになったことだ。お前が軍人としての人生を選んだことをとやかくは言わない。しかし、辛いことになるだろう。それだけは済まないと思っている」

ロークの長女、クリースは、父によく似た切れが長く濃い眉を閃かせて、両親の表情を窺い、両親に共通する表情を見出した。琥珀色の瞳を見る見る涙に潤ませながら、しかし、彼女は気丈にも父に頷いてみせたのだ。

ローク中將は、猛然として参謀本部に喰ってかかった。政戦略の不在、前線参謀の無能ぶり、補給に対する軽視、参謀本部の独善、そしてこの軍法会議そのものの欺瞞性……本国艦隊を叱咤してドレドの大艦隊をアー ज्याナ・ラインに釘付けにした猛将の獅子吼は検事役の参謀少將を縮み上げらせ、でっちあげの証人達を完膚なきまでに論破し、判事団をして制止の言葉をなからしめた。

もちろん、ロークは所詮は戦術的な勝利でしかないことを充分に弁えていた。すでに判決は決しているはず。ならば、吠えるだけ吠えて参謀本部と政府の無能さを鳴らし、市民の関心を僅かでも促してみようではないか。そうすれば、この愚劣な戦争の終結を僅かでも早められよう。

が、明敏なロークでさえ、共和国内で進行しつつあった政府とジャーナリズムの親密な癒着ぶりまでは明確には察していなかったのだ。フアクシミリ・ペーパーも3DTVも、参謀本部の主張は細大洩らさずに報道するその一方で、彼の反論の一切を無視し、一行の記事、一言の論評さえ行わなかったのだから、ローク中將の意図は空回りするしかなかったのである。

二か月後の共和国暦七一年九月九日、軍法会議は結審し、一〇月

一日に判決。判決は銃殺、罪状は国家への反逆。そして、控訴すら認めずに翌二日、刑は執行された。更に三日には中將の夫人が一〇歳の長男とともに夫のあとを追う形で服毒自殺を遂げ、一連の茶番劇に悲劇の終止符を打つことになる。

共和国曆七十四年 六月三〇日

恒星系ドライバオムは数百太陽質量という白色超巨星二つと、同じく数百太陽質量を誇る巨大なブラックホールによる三重連星系であり、恒星系内にはブラックホールが超巨星から引き出したプラズマの帯が複雑に渦巻きながら高速で回転して凄まじい電磁放射を行って、電子戦システムの大部分を使用不能に陥れている。ばかりでなく、この巨大な三重連星系の複雑な軌道要素は、重力圏を錯綜させてワープ航法を不可能に陥れている。複雑怪奇な巨星引力圏と、渦巻く水素プラズマの中に、直径四万キロ足らず、全長三〇天文単位というトンネル状の航路帯が確保され、“ドライバオム回廊”と呼ばれていた。

ミュトゥレイ・ロメイチェフの率いる四二〇〇隻の艦隊がドライバオム回廊にさしかかったのは六月一二日のことである。

「こりゃあ、凄いな……」

剛毅さでは知られたロメイチェフが、実際にドライバオム回廊の前にして洩らした言葉がそれだった。ドライバオム宙域の見せる自然の猛威と悪意の凄まじさはほとんどの人間の想像力を越え、さらにはそれを描写する人間の能力をも凌駕する。ロメイチェフとて何度となくドライバオム宙域を通過して母星とドレドとを往復した経験は持つ。しかし、そのロメイチェフにして嘆声を隠せないのは、造物主の悪意が人間の卑小な感覚に“馴れ”を許さないがゆえであろう。

このドライバオム宙域の隣接恒星系レーゲンボーゲンの外縁部にドライバオム宇宙要塞がある。“ドレド戦役”開戦後一年目にドレドが奪取し、中継基地として使用していたが、共和国宇宙軍艦隊が余りに早く敗退したために、本格的な要塞化工事は中止されたままである。要塞固有の火力設備はなく、宇宙港と艦艇整備のための工廠だけが辛うじて完成を見ていた。動力供給用の核融合炉と超融合炉は二〇基の設置予定の内、五基のみが稼働し、現在の駐留兵力は約一五万。五〇

○隻ほどの警備用艦艇が置かれているだけだというのが、マールクらの得た情報だった。

「……宇宙軍の当初の計画は、このドライバオム宇宙要塞を主要塞として、補助要塞と戦闘衛星を配備したドライバオム・ラインを形成、一〇〇〇万の兵力と四万隻の艦隊の駐留を可能にするというものでした。主要塞だけでも五〇〇万、二万隻の駐留が可能となります。完成すれば、ですが」

「奪取のか？」

「囲みます……強攻しても奪取できると思いますが、情報が一〇〇パーセント正しいという保証ありませんし、また攻める以上、損害が皆無というわけにもいきませんから……ドレドの主力艦隊を撃破してしまえば、要塞は手を上げるしかありません」

六月一五日早朝、ヒースクリフ・ローナク准将の高速巡洋艦艦隊四〇〇隻を先頭に、ロメイチェフ艦隊は恒星系レーゲンボーゲンに現れ、ドライバオム中継基地の警報装置をけたたましく鳴り響かせた。

ドライバオム基地からは一〇〇〇隻余りの駐留艦隊が突出し、ヒット・アンド・アウェイによってロメイチェフ艦隊の前衛集団に打撃を加えて素早く基地内に退却しようと試みた。ドレド宇宙軍の首脳は確かに無能ではなく、ロメイチェフ艦隊のドライバオム基地攻略を“有り得ること”と予測して、基地の防備の強化に意を用いていたのだ。

艦隊は倍増され、不十分とは言え、艦載砲を転用しての要塞火器の設備も開始されていた。

要塞駐留艦隊のビューローライン准将は巧妙な戦術的後退を行い、ロメイチェフ艦隊を要塞砲の射程に誘い込もうとしたのだが、ローネクとドレسنは、彼の予測を遥かに超えた速度で突進して中央を突破してのけた。分断され、崩れかかるビューローライン艦隊の側面へロ

メイチェフとミュッケルの戦艦部隊が夥しいビームと宙雷の集中射撃を注ぎ込み、ビューローライン艦隊は一时间足らずの間に三分の一の兵力を失って基地に退避する。

「オーケイ、今だ……」

ヤンデキフィティが隷下の部隊に下令し、強襲揚陸艦が、後退する駐留艦隊に踵を接して要塞にとりつく。局所戦用の超融合爆弾で要塞壁面の破壊を試みるが、頑強な装甲を貫通できずに工兵の驚愕を誘った。

「後退しろ！」

ヤンデキフィティが怒鳴り、ミュッケルがささず援護の射撃を叩きつける。数千本のエネルギービームの豪雨を要塞の防禦装甲は弾き返したが、急増の砲塔や銃座が白熱して碎け散り、急速後退する揚陸艦群を狙撃する火力は著しく減殺された。

「驚いたな……これほど頑丈とは思わなかった。我が宇宙軍の設計にしては上ではないか？」

これはロメイチェフの感想である。

「ええ。装甲を強化したのはドレド宇宙軍でしょう」

「強攻を続けるか？」

かぶりを振ることで、マールクは司令官の質問に応じた。

「強攻し続けるふりを続けます」

「了解だ。詐欺のネタを相手に本気で出資を強いられるのは馬鹿馬鹿しい」

「外壁と防禦シールドの強度の正確なデータが得られました。第一回の攻撃も無駄ではなかったと思います」

「そういう見方もできるな。続けてくれ」

ロメイチェフ艦隊はビューローライン准将が感嘆するほどの鮮やか

さで艦列を組み直し、あつと言う間に基地を包囲してしまった。同時に、艦隊の全力を上げての砲撃が基地外壁に食らいつく。

頑強な装甲外壁がこの砲撃で貫通されるといってもなかったが、未完成の要塞を守る守備隊は悲鳴を上げて救援を求めた。悲鳴を上げさせるために、わざと華々しい攻撃を反復するのがマールクの作戦だとも知らずに、ビュローライン准将が発したSOSが母星空襲での流血に酔っていたドレド主力艦隊の背をしたたかに叩きのめし、驚愕に陥れたのである。

“ロメイチェフ艦隊、ドライバオム回廊を突破……ドライバオム中継基地を包囲攻撃中。至急、救援されたい”

ドレド艦隊は来るだろう。来ざるを得ない……マールクは、その点を心配してはいなかった。そして、ドレド艦隊がドライバオム回廊に殺到して来るだろう時期と、これを迎え撃つタイミングについてもほとんど分単位での計算を終えていた。

……が、だとして、果たして勝てるのか、と問われれば、マールクは窮したに違いない。ベルサリウス大將指揮下のドレド主力艦隊は少なく見積もってさえ一万五〇〇〇を越え、しかもドライバオム基地にはなお数百の艦隊が控えているのだ。それに較べてロメイチェフ艦隊は四二〇〇隻でしかない。ドライバオムという特殊な宙域を味方につけてさえ、四倍の敵と戦うことを考えると胃が痛くなる。

理想的な戦略として、本国艦隊と呼応して、ドレド艦隊がドライバオム回廊に入り切ったタイミングを捉えて回廊の前後を封鎖する作戦も、夢想しただけでなく実際に計画してはある。この作戦が成功すれば、ドレド艦隊は大艦隊の利点を生かすこともできず、戦わずして降

伏するしかないのだが、共和国政府は彼の再三の要請をことごとく無視している。諦めるしかなかった。

「これで勝てないなら、誰にも勝てないよ」

マールクはネイを相手にぼやいて見せた。もともと飾り気の全くないマールクだが、中でもネイに対しては、彼は言葉を飾らなかった。柔らかな色調の金髪と、感じのいい翠色の目をしたこの青年を、マールクは単に前線指揮官としてだけでなく、友人として全幅の信頼を置くようになっていたのだ。

「マールク中尉殿に不可能なら、誰にも不可能でしょう……」

後、ネイはマールクを“閣下”と敬称するようになるが、この時期は“中尉殿”と呼ぶのが普通だった。

更に後年のことになるが、参謀本部の怒りと嫉視にもかかわらず、ネイはマールクを唯一の上官として、他の将官を“閣下”と敬称せずに通すのである。

「言ってくれるねえ」

マールクは不精髭の目立つ顎を撫で回して苦笑した。

「そんな風に言われると、私が偉いように思えるじゃないか」

「中尉殿は超一流の戦略家です。将兵はマールク中尉殿を信頼して、無条件で指揮に従おうとしています。期待に応えて下さいませんか？」

「応えたいね」

手にした紙コップを傾ける。ミルクもすでに底を突いていたから、コップの中身は冷水でしかないが……

「中尉殿は紅茶は好きですか？」

ふ、とネイが話題を転じ、マールクはちよつと怪訝な顔になる。

「紅茶、ね。ああ、好きだな。ミルクか、それがなければブランディをほんの少し浮かせたのがあれば最高だね。もっとも、私はいれるの

が下手だから、いい葉があっても旨い紅茶には中々ありつけないけどね」

レイヴェルゲン大学の近くに紅茶の旨い店があったんだが、もう潰れてしまっただろうな……と、マールクは頭痛、というより胃痛の種を束の間、忘れていた。ネイのエメラルド・グリーンの眸が微笑を浮かべていた。

「姉が紅茶をいれる名人です。一度、招待しましょう」

「それは光栄だな……」

マールクは肩を竦めて軍帽を被り直した。

「名人のいれてくれた紅茶を飲むために戦う……か。ワインを手に入れるため、というよりはよっぽど説得力がありそうだ」

殊更に気軽な口調は内心の葛藤を隠している。

実のところ、マールクには深刻極まるジレンマがあったのだ。

生き延びるために戦う……それはいいだろう。しかし、彼が生き延びるためには何百万もの犠牲者が要求されるのもまた事実なのだ。すでにメーレンから始まって、彼の作戦指導の元に戦場に倒れた敵味方の将兵は一〇〇万を優に上回る。負傷して手足を、目を、或いは内臓のほとんどを失い、“手を返してくれ、俺の足を返してくれ!”と絶叫する兵士を、彼は何百人となく目にしてきた。そうまでして、何故、自分達は戦わねばならないのだろうか？

“正義の戦いである”と参謀本部は叫び、政府は“銀河に我が大義を知らしめよ”と唱える。宜しい、では、その正義なり大義が、これほどの流血と犠牲とを払うほどの価値あるものなのか……しかも、歴史上、当事者が“聖戦”とか“義戦”とか唱えた戦争に限って、何故、その戦争をしなければならなかったのか、戦争が終わってしまうと分からなくなるのがつねであることを考えると……

マールクは思考を停止させた。余り考え過ぎると、彼が戦うことなく戦死してしまえばすべては事無く納まる……そんな結論が出てきそうなのがして恐くなったのだ。彼は死にたくなかったから……

……まあ、いいさ。ネイの姉さんに紅茶をご馳走して貰うために生き延びることにしよう。

それに、ネイの姉であれば、話相手としても退屈せずに済むだろう……などと考えるあたり、マールクは、ヒースクリフ・ローナクなどが彼をさしている“野暮天”でしかないのだろう。

大会戦というものがいつもそうであるように、“ドライバオム回廊会戦”もいつから開始されたのかは判然としない。

ドライバオムの中継基地へロメイチェフ艦隊が襲いかかったのは六月一五日であり、ドレド艦隊がアー ज्याナ・ラインを引き上げたのが二三日。そして、“未確認艦隊ドライバオム宙域に接近”の報告にマールクが愕然としたのは二一日午後のことである。

「早過ぎるな……こんなに早いとは思わなかった」

最大戦速でも、母星からドライバオムまで最低五日はかかるのだ。

それに、ロメイチェフ艦隊の基地攻撃を知って直ちに反転しようとしても、二万隻近いドレド艦隊は巨竜のようなものであり、そう身軽に方向を転換できるものではない。準備に最低七日、マールクはそう計算していたのだが……

「計算違いは日常茶飯事ですからね……」

「馴れたか、貴官も」

ロメイチェフはにやり、としてマールクに作戦開始の許可を与える。どことなく息子の成長を喜ぶ父親のような雰囲気があった。

ネイス・ミュッケルの高速戦艦艦隊とマックスの砲艦部隊合わせて一二〇〇隻がまず基地の包囲を解き、シャブリ大佐指揮下の少数部隊を基地の抑えに残してロメイチェフ指揮の本隊二八〇〇隻がこれに続く。ミュッケルの指揮する前衛部隊がドライブオム回廊を高速で突破して、母星側の宙域で展開し、ロメイチェフの本隊は三重連星系の只中に入り込み、ブラックホールの危険宙域ぎりぎりに姿を潜める。

が、『クレーストルランス』との通信が完全に不可能になる直前、ミュッケルの旗艦『ブルーリッジ』が、接近する未確認艦隊からの通信波をキャッチしたのだ。

「本国艦隊副司令官ドウリユー・ラ・マーク大佐……？」

「そう言っておりますが……」

主席幕僚のミュアン大尉は、ネイの表情に動揺を認めて眉をひそめた。

「本国艦隊の増援を、共和国政府が認めたのでありませんか？」

「いや……」

怯えた少年の表情がネイの顔を横切ったが、彼はその理由を説明しようとはしない。

「とにかく、急ぎ『クレーストルランス』と連絡をとって下さい。味方であれば、戦う必要ありませんから」

『ブルーリッジ』から中継を受けたロメイチェフ、マールクの二人ともが共通の表情を浮かべたのである。それは増援を受けたことに對する喜びではなく、最悪の予想の的中を悟った苦々しさのそれだったのだ。

「作戦展開を解く、マーク大佐の部隊を收容しつつ、ドライブオムの基地を再度包囲する……」

「全滅……だつて？」

ロメイチェフの唸り声が作戦会議室に満ちた。旗艦に参集した前線指揮官が一斉に顔を見合わせる。彼らはいずれも若く、従つて母星に家族を残している者がほとんどだった。

「よりによつて本国艦隊の司令官を替えるとはなあ……」

「どうなさいですか、閣下？」

「隠すこともできない。全艦隊將兵に事実を知らせてやれ。情報の不足は、流言のもとだからな」

クリュッペル大尉に、ロメイチェフは無造作に言い放つ。

「さて、貴官ら、貴官らが辛いのは分かる。すぐにも母星へ帰り、家族の安危を確認したいことと思う……が、ここは堪えろ。不本意なこととは知れている。貴官らのほとんどが軍人を志したわけではないことを俺は知っている……が、貴官らは今や提督であり、大佐殿であるわけだ。部下たちは、貴官らの顔色を見て無理にも安心しようとするものだ。連中を安心させてやれ。それでもなお、兵たちが戦意を失えば、その時はしようがない」

「降伏……ですね」

「そうだ。責任は俺が負う……負けた時に部下の代わりに死刑台に立つのが指揮官の役目だからな」

「しかし……閣下」

マールクの声も表情も深刻そのものだった。

「なんで、こんな連中のために、恐い思いをしてまで戦わねばならんのですか？」

共和国政府には戦争を勝とうとする意思がないのだ、としか思えない。前線部隊が幾ら敢闘しても、政府が彼らの努力を片端から無駄にしてしまう。さしものロメイチェフも呆れ返つて、評する言葉に窮し

てしまっていた。国家に対する市民の忠誠心は、国家が家族の安全を保証することに由来する。それすら保証する能力を失った国家は、市民に対して忠誠心を要求する資格をも欠くことになるのだが、共和国政府の首脳はその程度の常識すら弁えていないらしい。

「生きるためだ」

ロメイチェフの回答は簡潔だった。

「共和国政府は、自らが貴官らの忠誠心に値しない存在であることを、このような形で示して見せたわけだ。従って、連中に忠誠を尽くすために戦わねばならぬ理由など、最早ない。が、俺たちはドレド艦隊に最大の損害を与えてきたから、降伏しても俺一人を銃殺しただけで満足してくれるとは思えん。貴官らには、選択の余地もないわけだ。

家族を案ずるのもいい。しかし、今は貴官らに休息を与えるわけにはいかん。解散後、直ちに中継基地の包囲に戻る」

彼の指示は冷酷にさえ響いたかもしれないが、指揮官としては当然のものであったし、異を唱える者もなかった。

「では解散する。マールク中尉、貴官だけ残ってくれ。話しておくことがある」

「さてと……」

一人残ったマールクに、ロメイチェフは顎をしゃくって見せる。司令官私室に副官兼参謀長を伴った大將は、執務デスクの引き出しから、魔法のようにブランディの瓶を取り出して見せた。

「司令官のささやかな特権だ、チューリップ・グラスなんぞという代物はないが、酒の方は逸品だ」

紙コップにたっぷり注がれたブランディをマールクは素直に受け

取った。味覚音痴と言われるほど食事には文句をつけない彼だったが、酒だけは不味いものより旨いものの方が好きだったから。

「俺は貴官とは違って多少の軍事教育を受けた……」

「……」

「いや、誤解するなよ。自慢してるんじゃない……士官学校の教育など下らんかったが、貴官にとつてもものの役に立ちそうなことも教えてくれたんでな、この際、伝えとくのも悪くはあるまい」

「はあ？」

マールクは白い紙コップの中の琥珀色の小波をちらと見下ろす。

「戦争は利害を争うための国家的なビジネスだ。早い話が、今次の戦争はドレドが独立を求めて、一方共和国がドレドの独立で利益を失うのを嫌がったから起こった。従って、戦争は国家の運営者にとつての利害得失によつてのみ起こされる」

「市民の……ではなく？」

「そう見せかけねば、戦争は遂行できん。政府の連中がやたらに“聖戦”などとぼざくのは戦争が市民の利害、というより正義感によつて遂行されているとみせかけるためのさ。ところが、実際のところ、正義のための戦いなんぞ、子供むけの3DTV番組の中にだけしかないもんさ。大体、人殺しを大量にやっついて何が正義なのか、TVの脚本家どもにも尋いてみたいもんだがな……」

とにかく、マールク、戦争は利益、それも国家の中枢部に座る人間の利益のために行われる。そのことを忘れなければ、多分、正気で見られるだろう」

では、何故そんな戦争をするのか、という問いは彼ら二人のいずれからも放たれなかった。ブランディは、その芳醇な香りにもかかわらず、奇妙なくらい苦かった。

共和国暦六月三〇日、標準時二二時一三分。

ドライバオム回廊宙域の入口付近に潜んでいたセルティ・マックス大佐は、四・六光年離れた隣接恒星系スウェーデン外縁に派遣してあった偵察艦からの緊急通信を受け取った。

ドレド主力艦隊のワープアウトを確認。四個制式艦隊を中心に、総司令官直属兵力と思われる半個艦隊を合わせて約一万七〇〇〇、第二巡航速度で一路ドライバオムに向かいつつあり……

「来た……か」

マックスは呟き、通信士官に中継を命じる。緊張が衝撃波となって艦内を駆け巡り、戦い馴れたベテラン兵は乾いた咽喉をイオン飲料で湿してから宇宙服のヘルメットを手にとり、一方、経験の浅い新兵達は蒼白な顔を見合わせて立ち竦む。が、すでに一度は戦場に立ち、そして生き延びて来た経験が、無意識の内にも彼らを戦闘準備に向かわせた。宇宙服の気密を確認し、各自のヘルメットを掴んでそれぞれの持ち場へと駆け出していくのだ。初めて戦場に立った時は、なすすべもなく棒立ちになって、熟練兵達の怒号の対象となった彼らだったのだが……

が……と、マックスは唇を歪める。

マールクの作戦では、彼らは最前線にありながらも直ちにはドレド艦隊とは接触しない。僅か一〇〇〇隻では半瞬で包囲され、次の半瞬で撃破されるだけである。マールクが言った通り、彼の艦隊が奮戦しなければならなくなったら、ロメイチェフ艦隊は敗北しているのだ。

ロメイチェフ艦隊は損傷艦まで合わせて五六〇〇隻。このうち、マックス麾下に一〇〇〇隻を割り、シャブリには三〇〇〇隻を与えて中継基地の抑えに当たらせているから、ロメイチェフが決戦に使える兵力

は僅かに四〇〇〇隻余りでしかない。ドレド艦隊の僅かに四分の一……確かにワルステートでは三倍近いウォーレンスタイン艦隊を完全に撃破してのけはしたが、奇跡は二度は続くまい。

「ロメイチェフ提督の所謂、天才参謀のお手並みとやらを拝見させて貰いたいもんだな」

マックスの呟きは悪意ではなかった。“天才参謀”クローネス・マールク“少将”が、その天才ぶりを発揮してくれなければ、彼らはおそらくは生きて七月を迎えることはかなうまい。マックスの呟きは、だから、“ドレド主力艦隊接近”の報を受けた瞬間に、ロメイチェフ艦隊の全将兵が共有したに違いない。

「来ましたね……」

『ブルーリッジ』の艦橋要員は、他の艦の将兵に較べるとやや運がよかった。彼らはすでにネイス・ミュッケル准将の神技のような用兵をまのあたりにしており、振り返って彼らの信仰の対象を視界に入れるだけで不安の小波は嘘のように鎮まっていたのだから。

淡い金髪の青年は何時に変わらぬ穏やかな表情でマックスからの報告を読み下した。

「ミュアン大尉、予定通り、出動します」

ミュアン大尉も今はネイに絶対の信頼を寄せている。了解、と応えて命令を伝達する声にも張りがある。

ネイの内心は、その穏やかな表情とはやや異なっていた。

ドレド艦隊による母星総攻撃の知らせは、彼の心を重く曇らせていた。首都レイヴルゲン・シェールキツヒの両親……地下基地に配属されたという姉アリシア……そして、望んで第三四防空基地のオペレー

夕に転属したというアーテムシア……一刻も早く母星へ帰り、彼らの安危を確認したかったのだ。いや、安危ではなく、その“無事”を……両親と姉とアータ……彼にとって最も大切な人たちが、彼の手の届かぬ所で死んでいった、などネイには耐えられない。

もちろん、ネイは自分の万能ならざることを充分に弁えるほどに聡明な青年だった。彼が母星にいたところで、二万隻のドレド艦隊を前に何ができたものか……しかし、手を拱いて彼らを死なせてしまったのではないか……家族に、そしてアータに万一のことがあれば、その後悔から免れ得ぬであろうことを、ネイは恐れずにはいられなかったのだ。

ネイの思いとは別に、彼の指揮する高速戦艦集団一〇〇〇隻と、ローナクの巡洋艦艦隊四〇〇隻は最大戦速でドライバオム回廊を突破する。彼の艦隊が回廊を突破したのが三二日標準時二三時一九分。そして、その僅か二時間後の三二日一時二三分、ドレド艦隊はドライバオム回廊に至る最後のワープを終えて、ミュッケル部隊の前にその威容を現したのである。

「距離八〇・一光秒……一五分後には主砲射程に突入します！」

「落ち着いて報告して下さい。今から声を張り上げていると肝腎のところまで声が出なくなりかねません」

ネイに穏やかにたしなめられ、電子戦オペレータは赤面して敬礼した。戦場に臨んでの彼の物静かな態度は麾下将兵の感嘆の対象であり、ネイに対する絶対的な信頼を深める所以でもあった。

が、彼の態度は別にして、彼とローナクの艦隊は最大戦速でドレド艦隊前衛集団に突進し、更にその後方からはドレスン艦隊六〇〇隻がドライバオム回廊の出口にさしかかっている。

「ロメイチェフ艦隊の前衛確認、約二〇〇〇。更に後方より約一〇〇

〇……」

「ドライバオム回廊を盾にとり、我々の通過を食い止めようとするわけか」

ドレド宇宙軍の宿将シャペルは白い眉を嘲笑に歪めた。

「馬鹿めが、たかが三〇〇〇で何ができるか……一気に蹴散らし、ドライバオム中継基地の駐留艦隊と呼応して挟撃してしまえ」

ドレド第一艦隊は翼を虚空に展開する。中央突破を狙うかのように直進するミュッケルとローナク艦隊は、巨大な双頭の蛇の胴目掛けて放たれた先鋭な槍の穂先だった。

「……！」

一時三〇分、シャペル艦隊の電子戦オペレータは驚愕の歌を合唱した。

槍の穂先が突然にぐにやり、と曲がった……というよりも、信じ難い柔軟さで艦列を組み変えたミュッケル艦隊とローナク艦隊はそれぞれ逆方向へ分離、二股の槍と化してシャペル艦隊両翼に躍りかかったのである。

「撃てえっ！」

ローナクが吠え、ネイはしなやかに右腕を振り降ろす。凄まじい破壊力を孕んだ猛獣は檻から解き放たれ、光の尾を引いてシャペル艦隊の両翼に襲いかかる。共和国暦六月三二日一時三五分、“ドライバオム回廊宙域の会戦”がこうして開始されたのである。

核融合爆発の純白の閃光が一瞬毎に脈動しながら拡散し、巻き込まれた艦艇は血しぶきの代わりにエネルギーをほとばしらせながら舞い狂う。薄れかける閃光を傲然と突破して別の戦艦が突出し、エネルギー

一の斬撃を叩き付け、宙雷の航跡で虚空を飽和させる。

ネイもローナクも、その目に緊張を孕ませる。敵の意表を衝いた先制の一撃を浴びせかけたとはいえ、彼らの兵力は一五〇〇隻にも達せず、シャペル艦隊の四分の一以下でしかないのだ。戦線の躍動に委ねたまま無秩序な戦闘に突入すれば、数瞬後には態勢を立て直したシャペル艦隊の猛撃の前に包囲され撃破されるだろう。

『ブルーリッジ』と『ロイヤルス』から命令が通信波にのって走った。

「小癪な、少数艦隊ではないか。一気に包囲して粉碎してしまえ。あの程度の敵に何を手間取っているか」

老練なシャペルは、両翼を拍撃されて狼狽する麾下の艦隊を激しく叱咤した。崩れかけた戦線を收拾して再編し、艦列を柔軟に変化させてミュッケルとローナクの艦隊を巧妙な凹字陣形の只中に誘導する。

が、ミュッケルとローナク、この二人の用兵の迅速さはさしも老練なシャペルの予想をすらはるかに上回った。ふたりは艦列を針のように収斂させ、陣形変更を完了しきっていないシャペル艦隊の両翼に文字通りの痛撃を浴びせかけた。一点集中斉射をもろに浴びせられたシャペル艦隊の両翼部隊は悲鳴を上げて艦列を崩し、すかさずミュッケルとローナクは全速突撃を叫ぶ。

ミュッケル艦隊はシャペル艦隊左翼部隊に、ローナク部隊は右翼集団に穿った間隙に最大戦速で躍り込んだ。

閃くビームと宙雷の炸裂する閃光とが視界スクリーンを満たし、見守るブリッジ要員の顔をまだらに染め上げる。

『突破しました……』

ネイのヘルメットのイヤ・フォーンでミュアン大尉の抑えた声が響く。

「予定通りにやって下さい、大尉」

ネイの声は普段と変わらない。ミュアンは頷くが、作戦はすでに戦術コンピュータに納められているから、改めての命令伝達は必要としない。

ミュッケル部隊はシャペル艦隊左翼集団を突破すると、右上方向に巻き上げるように進路を変更し、一方のローナク艦隊は左方向に旋回しつつ猛烈な砲火を叩きつけてドライバオム回廊に方向転換を完了した。

「なにをしている！」

シャペル中將は歯ざしりしたが、彼が初めてまみえるロメイチェフ艦隊の能動性と躍動性は彼の予想を遥かにこえている。

「追え、あの小癪な孺子どもを生かして帰すな！」

命令一下、六〇〇〇のシャペル艦隊は、後退するミュッケル、ローナク部隊を追撃して我先にドライバオム回廊になだれこんだ。三二日標準時二時一七分のことである。

「ミュッケル准将から連絡……敵艦隊は回廊に入場せり」

ドライバオム宙域では通信はものの役に立たない。高速の通信シャトルが『クレストルランス』にミュッケルからの報告を送り届ける。

ミュッケル、ローナク、ドレッスンの三人に率いられた約二〇〇〇隻は狭い回廊内で縦横に展開し、追尾するドレド艦隊の前衛集団に痛打を浴びせ続けた。時には輪状に展開して重層する射線を注ぎかけ、時には突出して至近距離からの短截な射撃を叩きつけて先を争って追撃するドレド艦艇をまばゆく輝く爆発の閃光で覆い尽す。怒り狂ったドレド艦隊が輻輳する砲火をもって報いると、膠着する素振りすら見せず

に回廊の奥深くへ後退する。鮮やかなタイミングであり、しかもドレド艦隊の指揮官達が彼らの戦術的後退に気づかないという点で、悪魔的なまでに巧妙だった。

二重の白色超巨星と二重の螺旋を描く白熱のプラズマを従えたブラックホールの放つ猛烈な電磁波の嵐は戦艦の電子戦システムのほとんどを無力化し、ドレド艦隊の前衛部隊にはベルサリウスはもろんのこと、シャペルからの指示すら伝わらない。必然的に五〇〇から一〇〇〇隻単位の戦闘集団での個別戦闘にならざるを得ず、しかも、戦闘集団指揮官の質はロメイチェフ艦隊が遥かにベルサリウスのそれを凌駕していたのだ。

「やつらどういふつもりだ……」

ドレド艦隊の前衛はシャペルの第一艦隊六〇〇隻であり、その後にはベルサリウス大将の直属部隊一五〇〇隻が、旗艦『フェキュア』を先頭に突進し、その後方にはリッツの第二艦隊三五〇〇、ダウンの第三艦隊三五〇〇が続き、殿軍はモローの第五艦隊二五〇〇だった。もし、ドライバオム回廊でなければリッツ、ダウンの両将が迂回運動を起こし、小癪にもシャペル提督を翻弄するミュッケルらを一挙に包囲できただろう。

それだけにベルサリウスの苛立たしきは強まった。通信も思うに任せず、時たま届く通信シャトルのもたらす報告は“友軍苦戦”とのみ伝えて来る。少敵と見て逸り立ったシャペル艦隊は我がちに突進して過密状態を作りだし、それを狙撃されて混乱に陥っているのだ。

「シャペルともあろう者が何をしている。速度を落とし、シールド艦と戦艦を前面に出して火力を集中させよ。この回廊さえ突破すれば、こちらのものではないか」

ベルサリウスの指示は的確なものだったが、この時白色超巨星の表

面で生じた小規模なフレアの息吹が側面を無秩序に横撃し、長大なドレド艦隊の列は少なからぬ混乱に巻き込まれた。

一瞬の隙を見出したベイ・ドレسنが僅か二〇〇隻の巡洋艦を率いて突撃し、迎撃砲火をかくぐって短距離砲撃の全火力を叩き込んで来たのはこの時である。回廊一杯に展開したドレسن直率部隊は太陽風の巻き起こした混乱の中、シャペル艦隊の中枢部にまで躍り込んで、破壊神の矛を振り回した。ドレド艦艇の防禦シールドがそこで過負荷になり、一瞬白紫色の閃光を放って崩壊する。なだれこんだエネルギーの奔流は金属の装甲を乱打し、半瞬の数十分の一でこれを突破する。出現した超小型の恒星の群は、ドライバオム宙域を支配する二つの超巨星に較べれば、ささやかでしかなかったが、シャペル艦隊は骨こそ断たれなかったものの深く肉を切り裂かれ、鮮血にも似た爆発光を吹き上げながら苦悶する。

シャペルですら、旗艦の周囲を爆発の閃光と指向性のエネルギーの乱流に包囲されて内心に敗北を覚悟したほどである。

が、ドレسنの兵力は僅かに過ぎた。そして、ドレسن自身がそのことを知っていた。ドレسن部隊は執着せず辛辣な一撃を与えて急速後退する。反撃を呼号するドレド指揮官の叫びは虚しく空を撃った。

共和国暦六月三二日一時三五分から二二時四五分までの約二〇時間の戦闘は苛烈を極め、双方ともまさに一瞬の油断も許されない激烈な戦闘に終始した。ミュッケル、ローナク、ドレسنの三人に指揮されたロメイチェフ艦隊は兵力の劣勢を巧妙な艦隊運動でよく補い、ドレド艦隊に悲鳴を上げさせ続けた。

が、ドレド艦隊は一万七〇〇〇隻以上の大兵力を誇る。この日の戦

闘で撃破されたドレド艦艇は一五〇〇隻に達したが、それも全体の僅かに十分の一足らずでしかないのだ。戦闘は両軍の指揮官も兵士もへとへとに疲れさせたが、ドレド艦隊には充分以上の予備隊がいるのに対して、ミュッケルらには交替してくれる部隊はなかった。僅かに、三二日二時から三三日三時にかけてシャペル艦隊とリッツ艦隊が前線を交替した際に二交替で休息をとれただけだった。

ネイは指揮シート上で仮眠しただけで『ブルーリッジ』の艦橋から離れなかった。決して頑健な体質の彼ではなかったが、よほどの疲労を感じない限りは艦橋を離れることはなく、それがまた彼に寄せる兵の信頼をいやすことになった。

「食事をお持ちしました……」

濟まなような声が、浅い眠りを破る。古くなったライ麦パンのコンビーフサンドウィッチとコーヒー・チューブを載せたトレイを、従兵が持つて立っていた。

「有難う」

パンは干からびてぼろぼろだったし、コーヒーは薄くてひどい味だった。ロメイチェフ艦隊の食糧庫はほとんど空に近くなっている。食糧だけではなく、各種の軍需資財ももういくばくもなく底を突くだろう。今度の作戦に失敗すれば、仮に全滅を免れたとしても、最早ロメイチェフ艦隊に再度の作戦を展開する余裕は全くないのだ。

「敵艦隊……前進を再開！」

オペレータの声が、ネイを我に返らせた。コーヒーを半ば残したまま、彼はトレイを下げさせる。ふと、アロシアのいれてくれた紅茶の味が懐かしかった。

激烈な戦闘は六月三三日三時二一分、急進したリッツ艦隊の前衛の一斉砲撃で再開された。

リッツ艦隊の斉射は整然とし、しかも統制のとれたものであり、拍撃を試みたローナク部隊の急進を一撃で停止させ、なおも集中された強大な火力はローナクをしてすら激しく舌打ちさせるほどのものだった。リッツは両翼からローナクを挟撃し、ついで中央部隊を突出させて中央突破を図る。

ドレスンが、しかし素早く反応した。最大戦速で突進したドレスン部隊六〇〇隻余りは、巧妙に計算された軌道を描いてリッツ艦隊の右翼部隊の前面を横切ると同時にその先頭に主砲の三連斉射を浴びせかける。

挑発だった。が、リッツ艦隊は見事にこの挑発に乗った。右翼集団はローナクへの包囲運動を中止してドレスン艦隊を追撃する。この間にミュッケルは天底方向の危険宙域を踏破して大きく迂回し、伸び切ったリッツ艦隊右翼集団と中央集団の境界部に躍り出た。分断されることを恐れて反転する右翼集団に、今度はドレスンが牙を閃かして襲いかかる。うろたえる彼らを、ミュッケルとローナクの艦隊が挟撃し、草でも刈るかのように薙ぎ倒した。

「なんて奴らだ……」

リッツは啞然とする。それでも無秩序な態勢のままに反撃に転じようとする麾下部隊の勢いを辛うじて抑え、艦列を整えなおしたあたり、リッツの用兵者としての非凡さを証明して余りあった。

強攻の無駄を悟ったリッツはベルサリウスの直率部隊から一〇〇〇隻の増援を受け、巨艦を前面に敷き並べてロメイチェフ艦隊の砲火に対する防壁を作り上げ、機動性に富んだ高速巡洋艦と駆逐艦、ミサイル艦を突撃させて出血を強いる作戦に切り換えた。これは大軍の用兵として正統なものであり、惜しみなく兵力を注ぎ込むリッツの前に、さしものミュッケルも付け込む隙を見出し得なかった。

「後退するしかなさそうですね……」

ネイの表情にも疲労の色が濃い。すでに三三日も半ばを過ぎ、三〇天文単位の長さを誇るドライバオム回廊も四〇〇〇光秒足らずを余すばかりである。

「……ドレド艦隊は、我々の作戦がドライバオム回廊を盾にとり、彼らを回廊宙域に封鎖することだと推測するだろうね……」

会戦直前に、マールクは彼に作戦の意味を解説してくれていた。

「君には艦隊の半分を指揮して貰うよ、ネイ。君のことだから分かってると思う。君に一番辛い仕事をして貰うことになるんだ」

「……それで？」

「できる限り、ドレド艦隊の回廊突破を遅らせてほしい。ロメイチェフ艦隊は散々に抵抗したが、遂に力尽きて回廊を明け渡した、と彼らが思ってくれる程度に、ね。回廊を突破してほっとした……しないかもしれないけれどね……その、ほっとした瞬間。この会戦の勝機があるとしたら、その時しかない」

ネイはマールクの戦略眼を何故か疑わなかった。マールクが……違う、と言えはばそうなるのだ。が、あと四〇〇〇光秒。約二二時間の激戦を戦い抜かねばならない。

ミューケル艦隊の凄まじい奮戦振りに二割を超える三五〇〇隻もの損害を出しながらも、ドレド艦隊は遂にドライバオム回廊を突破した。すでにカレンダーは繰られて六月の最後の日、三四日を二時間近く回った一時四八分のことである。

「リッツ艦隊、回廊宙域を突破しました。繰り返します、ドライバオム回廊宙域の突破に成功しました！」

旗艦『フェキュア』でオペレータが声を張り上げ、無数の歓声がそれに和した。小癩なロメイチェフ艦隊の息の根を止める機会が遂にやってきたのだ。

「よし、リッツに連絡、後退だ。ダウンとモローを前衛に出せ」

ダウン艦隊とモロー艦隊は合わせて六〇〇〇、しかもまだほとんど戦っていない精鋭である。狭い回廊宙域でミューケルにしたたかに叩きのめされ続けたリッツ艦隊は一旦後退させるのが至当だった。

が、猛将リッツは激怒した。

「なに、後退しろだと。冗談ならあとにしろ、と返信しろ。追撃を続行す、いいか繰り返せ、我、追撃を続行すだ」

シャペル艦隊が殿軍をモローと交替し、モローはダウンと合流して隊列を整えてから前線に向う。その間、リッツ艦隊は前進速度を緩めてベルサリウスの本隊の周囲に球形陣を展開して奇襲に備える……はずだったのだが、リッツは後退せずに猛進し、一方ドレド艦隊の後方部隊はまたしても生じた激しい太陽フレアに翻弄されて艦列の立直しに手間取っていた。

回廊出口から僅かに数光秒、危険宙域の縁に潜んだ『クレストルランス』でマールクが首将を見上げ、領いたロメイチェフは大きく腕を振る。通信シャトルが放たれ、フレアに玩ばれて動揺する艦隊の間をレーザー通信が駆け巡る。

ロメイチェフ、マールク、ラング、ヤンデキフィテイの指揮下にあるロメイチェフ艦隊主力約二三〇〇隻は予め厳密に予定された航路を辿って出口に程近い部分のドライバオム回廊に側面から乱入したのだ。三つの巨星のもたらす凄まじい潮汐効果が艦を揺ぶり、千切り飛ばされたプラズマの巨大な固まりが超高速で艦隊の進路を通過する。ひとつで優にガス状態星ほどのサイズがあり、巻き込まれれば艦隊など跡

形もない。顔色を蒼白にしていないう艦長は、おそらく一人もいなかったであろう。

が、ロメイチエフ艦隊は好運に恵まれた。錯綜する重力圏の潮汐効果で加速されたロメイチエフ艦隊は、回廊宙域突入と同時にベルサリウスの旗艦『フェキユア』を至近距離に捉えていたのである。それも、ベルサリウスの予想もしていなかった方向と加速度をもって……

共和国暦七二四年 六月三四日

「撃てえっ！」

ロメイチェフの怒号が光の剣と化して『フェキュア』に切り付け、一瞬に貫いた。『クレストルランス』だけではない。少なくとも一〇〇隻以上の戦艦、巡洋艦その他の艦艇の主砲がただ一艦に集中されたのだ。

ベルサリウスが事態を把握している余裕があったとは思われない。『フェキュア』の防禦シールドは一瞬の抵抗を示した後に敗北した。装甲は無効だった。凄まじい破壊力の濁流が何もかもを押し流し、碎き去り、有機物、無機物を問わずに原子に還元し去った。

「な、何だ、何があった？」

シャペルが愕然として指揮シート上に棒立ちとなり、数秒の沈黙の後に不意に事態の正確な理解の訪問を受けて両眼をかつと見開いた。

「謀られたか……」

「ど、どうなさいます、閣下……」

シャペルは疎ましげに、狼狽の色も露わな幕僚達を見下ろした。苦戦に追い込まれても、これほど狼狽を露わにしたことのない部下達を、彼は誇っていた。彼らをここまでうろたえさせたもの、それがロメイチェフの巧緻で、しかも熾烈な戦術なのだ……

「艦隊を下げよ、殿軍の位置につけ。命令なくして攻撃に移るな」

「は、しかし、友軍は……」

「わたしの命令がきけぬのなら、ロメイチェフの首を今直ぐとれるような作戦を立てて見せるがいい」

「は……」

「できまい。できぬならわたしに従え。勝ち戦のときの指揮は貴官らが立てればよい。しかし、この苦戦となった以上、わたしが指揮をとる。従え！」

白髪小柄な老提督が、巨人と化して幕僚を圧倒した。異論を唱える者はおらず、シヤペル艦隊四〇〇〇余は急速にドライバオム回廊の奥深くへ後退する。

一方、ドレド艦隊は乱戦の渦に巻き込まれていた。

リッツはロメイチェフ艦隊の突入に気づかないままに急進してミュッケル艦隊を追撃し、これを追って連絡を保とうとしたベルサリウスの本隊は圧倒的な横撃を叩き込まれて寸断された。ダウンとモローが慌てて艦列を前進させるが、総司令部を失った打撃は大きく、無秩序に躍進して過密状態となったところを、至近に迫ったヤンデキフィデイの格闘戦部隊から精確極まる狙撃を浴びせかけられて次々に火球に変えられていった。うろたえて、後退するところの側面に、今度はラングの艦載機集団が乱入した。

「艦載機だ、艦載機を発進させろ！」

遅い、どころか不必要な命令が走った。しかも、過密状態がかえって良好な通信状態を保証し、各母艦は至近に肉薄するラング艦載機集団の目前でカタパルト・デッキのハッチを開け放ったのである。

最初はかけはなれた数個の火球に過ぎなかった。ビームと対艦ミサイルは母艦の艦内に躍り込み、装備され、発進寸前の艦載機を誘爆に巻き込む。たちまち、火球は連なりあつて炸裂する光の帯となり、壁となつてドレド艦隊の艦列を覆い尽くした。

「なに……横撃された、だとう？」

リッツが事態を悟ったのは、後方宙域で無数に咲き乱れた核融合爆発によつてだった。

「は、ベルサリウス大将との連絡も完全に途絶しております！」

リッツは軍帽をとってフロアに叩きつけ、悪態をついた。前方を逃走するミュッケル艦隊は疲労し切り、彼の艦隊がもう一撃を加えれば崩壊するものと思われたからだ。

「反転しろ。反転して、小賢しいロメイチェフを前後から挟撃し、ドライバオムをやつの墓場に変えてやれ」

反転そのものは実に鮮やかだった。リッツは自ら殿軍を率いてミュッケルの反撃に対抗し、ほとんど被害を受けることなく反転を完了、最大戦速でロメイチェフ艦隊の後方宙域に殺到した。

思わぬ猛打を受けて、ロメイチェフ艦隊は左右に雪崩をうって潰乱する。必勝の念に駆られたリッツはエネルギーの刃を振るって突進を重ねた。しかし……

「後方より……敵艦隊！」

「何っ？」

リッツは色を失う。ミュッケルの用兵の鮮やかさは神技というに近かった。

ロメイチェフはリッツの突進に易々として回廊への道を開き、友軍艦隊との合流を許した。が、その後から殺到するミュッケル艦隊は、リッツを回廊の只中に封じ込めてしまったのだ。

「人的物的損害甚大なり、至急救援を請う！」

「戦闘継続不能……我、戦場を放棄す……」

四倍の優勢を誇っていただけに、一旦敗北の可能性に思いが及んだとき、ドレド艦隊将兵は明らかに浮き足だった。彼らが冷静であれば、彼らの兵力はまだ遙かに優勢であり、致命傷を受けたわけではないこととにすぐ思い当たっただろうが、旗艦を目の前で撃破されたことと、脱出不能のドライバオム回廊に封じ込められたことが、彼らの絶望を誘引したのである。

リッツもダウンもモローも、彼らの艦隊がドライバオム回廊の中に解け崩れかけるのをまのあたりにした。最早、彼らにすら打つ手はなく、“ドレドのアルマダ”の神話と、ドレド共和国独立の夢がはかなく潰え去ろうとするのを歯ぎしりして傍観しているしかなかったのだ。いや、それどころかロメイチェフ艦隊の砲火は彼らの旗艦をすら指呼の間に捉えようとしていた。

「マーク大佐に連絡。急進して止めを刺せ……」

どうやら勝ったか……ロメイチェフもマールクもそう思った。ドレド艦隊は大兵力の利点を生かすこともできずに潰乱状態に陥っている。ここに強力な一撃を叩き込めば彼らはドライバオム回廊の奥へ潰走してしまうに違いない。

マーク大佐の部隊は八〇〇隻余り。しかし、本国艦隊に優先的に配属された新型の高速戦艦を主力としており、火力はロメイチェフの本隊のそれに匹敵する。

命令を受けたマークは我が意を得て指を鳴らした。

「母星宙域の復讐戦だ。全艦、全速にて突進せよ」

マーク部隊は戦場を傲然と縦断し、ラング、ヤンデキフィティの両部隊にオーバラップしてドレド艦隊に殺到した。

戦況の変化は余りにも急激だった。

マーク部隊のオペレータがエネルギー前哨波と宙雷の群の急速接近を発見して回避を叫んだとき、ドレドの宿将ファウム・シャペル中将の凄まじい斬撃が彼らの側面を捉え、粉々に撃砕していた。

一旦、最後尾に下げた麾下艦艇を再編し、敢えてドライバオムの危険宙域を迂回突破してロメイチェフ艦隊の中央部を横撃する。ドライバオム回廊宙域とはいえ、危険宙域に宇宙船が全く踏み込めないわけではなく、現にロメイチェフがそれをやってのけており、シャペルの

老練な戦場勘も“回廊”の壁を易々と突破してのけたのだ。シャペルはロメイチェフほど好運ではなく、二、三〇〇隻が制御を失って白色超巨星やブラックホールの巨大重力圏の虜囚と化した。それでも四〇〇隻近い大部隊が電磁波とプラズマの嵐の中から猛然と躍り出してロメイチェフ艦隊の喉元に食らいついたのである。

攻守は瞬時にそのところを替えたかに見えた。

身をもつてシャペルの鋭鋒を受け止めることになったマーク部隊は、五倍近いシャペル艦隊から圧倒的な火力の集中を受け、支え切ることができずに雪崩をうって退避運動に移る。ミューケルカローナクなれば、巧みに後退方向を制御してシャペルをロメイチェフ隊の十字砲火の交差路に誘導することも可能だったろうが、本国艦隊の将兵はそこまで戦い馴れておらず、単純な後退の軌跡を宙に描く。そして、それは老将シャペルの予想した回避運動だったのだ。

シャペル艦隊は四方向へ展開、上下左右からマーク部隊を半包囲した。

熱線砲が吠え猛り、炸裂する火球がめくるめく光彩を放って四散する。中性子砲弾が殺人粒子の波濤を巻き起こし、誘爆する動力炉の閃光は見る者の網膜を灼き尽くす。

「計算違いにしてはこいつはひど過ぎる……」

ロメイチェフは吐き捨て、マールクもさすがに顔色を僅かに変えた。

「閣下、突撃命令を」

「うむ」

「あの艦隊に全軍を把握する余裕を与えるわけにはいきません。今のところ、あの艦隊は孤立した突出部隊です」

「おうさ……命令しろ、全力を上げて奴らを潰せ。奴を殺れば、ドレド艦隊は崩壊する。これはピンチではない、会戦の勝を一気に決する

決定的なチャンスなのだ。皆、奮え！」

ロメイチェフの直率部隊約一〇〇〇は回廊の天頂方向からシャペルの上翼へ殺到する。光の渦はしなやかに舞い躍り、そして一気になだれ落ちた。そして、ネイス・ミュッケルはとつさに掌握できた六〇〇余りを引きつれ、敵艦隊の右翼上方空間に躍り出る。

救援を知ったマークは踊り上がって反撃を叫んだ。あらゆる火器が一斉に咆吼し、破壊力の限りを尽くしてドレド艦を咬み砕く。

集中された火線は痛打となってシャペルの艦列を乱打した。核爆発が連鎖して生じ、シャペル艦隊の艦列に次々に空虚な穴が開く。それを封じる余裕を与えずに次の狙撃が襲いかかり、巨大なくさびを打ち込むように間隙を切り広げていく。

シャペルの反撃も猛烈だった。四方向に展開していた部隊を、扇を畳み込むように収斂させると逆方向へ旋回させ、ロメイチェフの本隊を半包囲の危機に陥れたのである。

戦艦『クレストルランス』も乱戦の只中にあつた。ビームが防禦シールドに食らいつき、狙撃された宙雷が炸裂して閃光が艦橋要員の顔色を漂白する。

「敵、大型戦艦……急速接近！」

ドレド戦艦『インヴィンシブル』は艦後尾を焰に包まれながらも共和国宇宙軍の艦列を突破しきつた。至近にロメイチェフの旗艦を捉えた『インヴィンシブル』の砲手は歓声を上げてありつただけのビームとミサイルの発射スイッチを叩きつけたのだ。

『クレストルランス』も応射した。火線と火線、ミサイルとミサイルが交錯し、半瞬後に炸裂する。『クレストルランス』の主砲斉射は『インヴィンシブル』の艦首部を吹き飛ばし、艦体を貫通した。一瞬の苦悶の後、巨大な戦艦は輻輳する核爆発の閃光の中に沈みさる。

『インヴィンシブル』の射撃も正確だった。

視界スクリーン、ブラックアウト。同時にエネルギーの奔流が『クレストルランス』をしたたかに蹴り上げ、衝き揺るがせる。

マールクはシートを放り出された。破壊音と悲鳴、怒号が交錯するのを聴覚が捉えていた。

「参謀長、参謀長閣下、ご無事でするか？」

肩を揺すぶられていやいや目を開く。幕僚のひとりがヘルメットのフェース・プレート越しに彼の顔を覗き込んでいた。

「ああ、なんとかね。どこも壊れてないようだよ。人間つてのは案外、頑丈なもんだな」

「司令官閣下がおよびです」

何を呑気なことを言っているのだ、という叱責が言外にあつた。マールクはひやりとしたものを胸に感じる。

「閣下はご無事か？」

「……それが……」

マールクは初めて血相を変えた。幕僚を突き退けるようにして指揮シートのところへ駆け付ける。

すでに、ロメイチェフは電動ベッドの上に横たえられていた。脇腹から鮮血が溢れている。飛来した破片にえぐられたのだ。

「おう、マールク。貴官は無事だったか……」

苦痛を堪えながらも、ロメイチェフの声は力強さを失っていないかった。

「閣下……」

「このごまだ。俺はもう指揮をとれん。貴官が指揮をとれ」

「……了解です、閣下」

「戦勝を期待する。して良いな？」

「閣下は、それを期待されるべきです」

「よろしい……以上だ」

時間的な余裕は余りなかった。マールクは艦橋から医療室へ移されるロメイチェフに敬礼すると直ちに通信士官のコンソールへ駆けよつた。

「通信システムの状況は？」

「かなりやられました……三〇分は受信しかできません」

「最も近くにいた艦設備のある艦はなんだ？」

「戦艦『ヴェルフオール』です」

移乗に要する時間は一五分、との返答を得て、マールクはためらいなく『ヴェルフオール』へ移った。

この間にも戦闘はますます激烈さを加えていた。ロメイチェフ艦隊の最精鋭、司令官直率部隊とミュッケル部隊は、司令長官の負傷にもかかわらず整然とした組織的攻撃の手を緩めようとせず、シャペル艦隊ももてるあらゆる力を注ぎ込んで包囲の環を閉じようと試みていたのである。

ネイは『グレストルランス』被弾の報告にも穏やかな表情を変えなかった。彼は、旗艦の損傷を部下達に知らせた上で、“司令部は健在なり。攻撃を強化せよ”と布告して部隊の掌握を強め、彼とマーク部隊を隔てるドレド艦隊への集中攻撃を強化させた。

三四日一六時三三分、ミュッケル艦隊は遂にドレドの頑強な艦列を切り破り、その只中に躍り込んで攻撃を爆発させた。砲雷撃が流星雨のようにドレド艦上になだれおち、閃光の中で葬送の歌を合唱する。

マーク部隊もすでに半数近くを失って疲労の極に達していたが、突破成功の報に歓声をあげて敵艦隊に斬撃を浴びせかけ、片端から屠りさつていく。

シャペルはこの局面での敗北を認めざるを得なかった。ロメイチェフ艦隊の分断は失敗し、逆に彼の艦隊の方が分断されてしまっていた。

「構わぬ、このままドライバウム回廊になだれこみ、回廊内の友軍と呼応して回廊の封鎖を一気に突破するまでのことだ。何も恐れることなどないぞ」

シャペルの命令は、一時的に気力を萎えさせていたドレド将兵を律する威力を持っていた。シャペル艦隊は陣形を崩れかけさせたままドライバウム回廊に殺到する。

これを迎え撃ったのがローナクとドレスンだった。彼らはシャペル艦隊の鋭鋒を巧みにそらしながら進路を回廊の外側にねじまげさせ、それと気づいて反転するドレド艦隊の混乱に乗じて艦列に突入し、荒れ狂う砲火を浴びせかけて薙ぎ払う。辛うじてシャペルが態勢を掌握し、艦隊の進路を整えたとき、今度は後方側背から猛烈な集中砲火を注ぎ込まれた。旗艦を『ヴェルフオール』に移し、戦艦部隊を再編したマールクが左右に展開しながら襲いかかってきたのだ。

さしもの名将シャペルも、マールク、ミュッケル、ローナク、ドレスンらの柔軟で機敏な用兵の前に対応に窮した。ロメイチェフ艦隊の勢いに押されるままに陣形を崩し、数万キロをドライバウム回廊へ後退する。

一方、リッツ、ダウン、モローらは、ロメイチェフ艦隊に翻弄され、狼り立てられて逃げ惑う羊の群と化していたが、それでもシャペル艦隊の接近は辛うじて知ることができたのである。

リッツが動いた。集められる限りの兵力を集め、一団となつてロメイチェフ艦隊の艦列に突入する。密集突撃が莫大な損害を出すことは、この会戦で証明されていたが、断固として突撃すれば、あるいは勝機を掴めるかもしれない。

対応する作戦案が戦術コンピュータに入力されていたわけではない。が、ラング、ヤンデキフィティらはマールクの意図を正確に理解し、リッツの突撃に対応した。

突撃する猛将リッツの勢いに恐れをなしたかのように、ロメイチェフ艦隊は上下左右に高速で離脱する。勢いづいたリッツ艦隊はさらに急進を重ねたが、四方向に離脱展開したラングらは安全圏ぎりぎりを超高速で迂回し、ローナクラと合流してシャペル艦隊の側面をしたたかにうちのめした。

シャペルが制止を叫んだ時は遅過ぎた。シャペル艦隊は完全に崩れたってドライブオム回廊に乱入し、そして決死の勢いで突進してくるリッツ艦隊と正面衝突してしまったのだ。砲手が“敵”の正体に気づいて恐怖に凍りついたとき、熱線砲のエネルギー・ビームと核砲弾、核宙雷は潰走してくる味方艦隊の前衛に襲いかかり、撃砕しきったのである。

一七時過ぎ、歴戦の老提督シャペルも乱戦の中で旗艦と命運をとみにすると、最早ドレド艦隊には統一された指揮系統はなくなった。リッツ中将も敗北を認めて回廊内への退避を叫び、ほとんどのドレド艦艇がこれに従ったのである。

「どうにか、終わったな……」

マールクは『ヴェルフォール』ブリッジで大きくため息をつくとき、軍帽をとって髪を掻き回した。六月三四日一八時二二分……まる二日半をこえる大会戦も、どうやら彼のデザインした通りに描き上げられたようだった。

「閣下……」

呼ばれて暫く、マールクは反応しなかった。重ねて“閣下”と呼ばれ、びっくりしたように振り返る。

「わたしのことか？」

「はい」

通信士官が困ったように頷くのに、マールクはまた髪を掻き回した。

「何だ？」

「『クレストルランス』から閣下へ入電しております」

「修理が終わったんだな、こつちのコンソールへ回してくれないか」

『クレストルランス』艦長のウェイガン中佐がスクリーン上に姿を見せていた。その沈み切った表情に、マールクは悪い知らせを直感する。

「司令官閣下に何かあったのか？」

「はい……」

中佐はうなだれ、“亡くなりました”と付け加える。そうか、と応えるマールクの口調もやや虚ろだった。

「……司令官閣下より伝言がありました」

「うん」

「会戦の勝を勝として収めることを期待する……それから……」

沈み切った表情に僅かに微笑を浮かべて、ウェイガン中佐はマールクの訝しげな視線に答えた。

「早く恋人を見付けろ、この野暮天……とのことでありました」

苦笑するしかないな、とマールクは思う。

「努力する、とお伝えしておいてくれ」

が、口に出してはそう応じただけだった。

潰乱状態で後退したとはいえ、ドレド艦隊はまだ絶望したというわけでは実はない。ドレド側の出口はロメイチェフ艦隊に固められたかもしれないが、母星側の出口は開け放たれている。一旦、この回廊を脱出し、母星を攻略すれば、この宙域での敗北も十分に償われるはずだ……リッツ、ダウン、モローらの脳裏にはそのような戦略が描かれていただろうし、充分に実現性の高い戦略でもあったのだ。

が、七月二日になって母星側出口まであと数百光秒に達したとき、彼らは絶望に近いものが彼らの前に立ち塞がっているのを認めて呆然とした。合計二〇〇万個に近い膨大な数の超融合核機雷が回廊一杯に広がって、彼らの退路を阻んでいたのである。そして、更にその後方にはセルティ・マックスの部隊一〇〇〇隻が大口径熱線砲の砲列を敷き並べている。

突破できないほど密に機雷が浮遊しているわけではない。が、一発で駆逐艦を粉砕する破壊力を持った超融合機雷の間を、前面に待ち構えるマックス艦隊と後方から迫るロメイチェフ本隊とから狙撃されながら、無事に通り返けられる可能性はゼロでないにしても高いものではない。悪くすれば、ほとんどの兵力をこの機雷原で失い、更に追撃されて殲滅的な打撃を被るかもしれないのだ。

絶望的な反撃は三回に亘って繰り返された。二度はロメイチェフ艦隊……すでにマールク艦隊と呼ぶべきだろうが……に向けて。そして、もう一度は機雷原に向けて。マールクは戦艦の火力でドレド艦隊の突撃を圧倒し、怯むところにローナクとドレスンを突出させて反撃の意思を徹底的に挫いてのけた。そして、マックスも機雷原を突破しようとするドレド艦に正確極まる狙撃を浴びせ、ある者は反転させ、ある者は超融合爆弾の炸裂の中に没せしめて突破を許さなかった。

こうして、ドレド艦隊は、マールクがロメイチェフ大将の名におい

て送った降伏勧告を受諾する。時に七月四日二時四〇分、六月三十一日一時三五分に会戦が開始されてより、実に六日と二一時間五分後のことであつた。

共和国暦七二四年 七月二一日

のちにマールクはこの戦いを回顧してこう言っている。

「……ピンチだということは分かっていた。だが、同時に敵にとってもピンチだということはもつとよく分かっていた」

七月七日、マールクは転じてドライバオム中継基地を再度包囲。主力艦隊全滅を知らされた基地駐留艦隊司令官ビュローライン准将は戦うことなく降伏し、ドライバオム回廊は完全にマールクらの手に落ちたのである。

“ドライバオム回廊宙域の会戦”は終了した。そして、“ドレド戦役”の帰趨を決定的にした戦いとなったのである。

七月一日。

マールクは司令長官代理として全艦隊の中級指揮官以上を集め、ロメイチェフ大将以下の戦死者の宇宙葬を行うとともに、全将兵に対して母星への無制限パーソナル・コールを許した。

「宜しいのですか？」

ネイは危惧の色を翠の目に浮かべて問うたものである。もし、ドレド艦隊の母星空襲で多くの艦隊将兵の家族が死傷していた場合、彼らの戦意は望郷の念に取って代られるのではないか。そうならば、ロメイチェフ艦隊もまた、内側から崩壊せざるを得ない。

が、マールクは友人の危惧に無造作な返事を投げ返した。

「構わない」

ドレドは戦争の主導権を握る力を永久に失った。艦艇は再建できるかもしれないが、この会戦で失った将帥とベテランの将兵、貴重な人的資源は一、二年で再建できるものではないのだ。ドレドは戦争に勝つ手段を失った。たとえ、ここでロメイチェフ艦隊が兵士の造反で崩壊しても、戦争はなしくずしに停止する。あとは政府の仕事ではない

か。

「私は貰つてゐる給料以上の仕事はしたよ」

ロメイチェフは手を打ってくれたが、宇宙軍の軍事内局は先例と慣習、それに規則を振り回してロメイチェフの要求をことごとく蹴り飛ばした。それで、マールクはこの時期に至つてもまだ中尉のままだったのだ。

「あとは政府がやればいい……彼らの好きな“先例”とやらに則つてね」

それより……と、マールクは話題を転じた。母星との回線が確保できた。家族とコンタクトをとつた方がいい。

「ええ……」

穏やかな青年は、彼らしくもなく怯んだようだった。

恐いのだ、とネイはいう。もし、家族や……

「家族や……何だい？」

「え……いえ、何でもありません。通話室に行つて来ます」

実際、恐かった。丁度空いた通話室に入り、超光速通信回路のスイッチに伸ばす手が小刻みに震えるのを抑えられない。

そして、彼は恐れが正鵠を射ていたことを知った。レイヴェルゲン・シエルキツヒの自宅が呼び出しに応じない。間もなく、合成音のアナウンスが入り、レイヴェルゲンは空襲で壊滅状態でありステーション・コールはほとんど不可能だ……とのこと。

「……この住所に住んでいた誰かとコンタクトをとれないのか？ せめて生死くらいはわからないだろうか」

“……暫くお待ち下さい”

束の間の、しかし骨の凍るような沈黙。ほんの数分だっただろうが、彼には数時間も過ぎたような気がした。

“お待たせしました……参謀本部付きのアリシア・ミュツケル少尉とコンタクトがとれました。回線をお繋ぎします”

ネイの心臓が跳ね上がる間もなく、スクリーンが明るくなり、アリシアの姿が浮び上がった。

“ネイ……”

「……」

意思に反して、ネイの声帯は言葉を紡ぎ出そうとしなかった。アリシアも同じらしく、漸く彼女が言葉を繋いだのは、それから更に数分の時が流れてからだだった。弟との再会を喜んでいうには余りにも憔悴し、苦悩に満ちた姉の姿に、ネイは最悪の知らせを予感した。

“ネイ……御免なさい”

聞き慣れた姉のメゾ・ソプラノは、このときは擦れ切った低音だった。

「……シエルキツヒ……は？」

“……撃墜されたドレドの戦艦が墜ちたの……シエルキツヒの一派は……全滅。それに……”

アリシアにとつても次の一言を押し出すのには内心に激しい苦痛を覚えないわけにはいかなかった。

“それに、地上の防空基地も……ほとんど”

「……」

顔色が変わつただろうか、とネイは思う。いや、もう変わるような顔色は残っていない……

「第三四防空基地も？」

姉が頷くのを視界に入れまいとして、彼は慌てて視線をそらす。両親ばかりか、あの陽気な巻き毛の女の子がもうこの世にいない……そんなことを信じたくなかった。自分は何の為に戦ってきたのか……

痛烈な思いが胸を噛む。共和国宇宙軍は“祖国を守る”のではなかったのか。何百万と言う兵士が生命を賭けてまで戦い、その結果が家族の全滅だというのなら、彼らは何を守ったというのだ？

それでも、ネイは辛うじて次の一言を紡ぎだす。

「……でも、姉さまが無事でよかった……」

ドレド艦隊は壊滅した。もう、二度とこんな悲劇はおこらないだろう……だからといって死者が甦るものではないことを、ネイは充分に承知してはいたのだが、それでも言わずにはいられなかった。

“そうかしら……”

アリシアはゆつくりと首を振り、豊かな黄金色の髪を揺らめかす。

“本当に、もう二度と起こらないと思う？”

「どうということ……姉さま、何を考えているの？」

負けるべき戦争だったのだ、とアリシアは言い切った。政府も軍も硬直し、勝てるべき要素は何もなかった……が、勝ってしまつたのだ。敗戦は、少なくとも敗戦国の市民の大部分には深刻な反省を促すだろう。何故、敗れたのか。何故、自分達は家族を、恋人を、友人を失わなければならなかったのか……戦争は高価に過ぎる。我々は戦いに疲れた。しばしの休みをとり、失われた人々を偲ぼうではないか……と。

しかし、戦勝となると事態は全く逆行する。勝ったが故に、全ての反省は忘れられる。戦勝国の多くが、まもなく敗戦の憂き目を見ることになったばかりか、時には亡国の嘆を見る羽目になる原因は、この無反省にあるのだ。勝つたのは、彼らが正義の味方だったからではなく、また無敵であつたからでなく、ただ、戦争の途上で犯した過失が敵よりも僅かに少なかったから……ただ、それだけに過ぎないのに。

“少なくともわたしは何もできなかったわ、今度の戦争で……だから、ネイ、もうこれ以上、共和国が馬鹿なことをするのを喰い止める、そ

んな立場に立ちたいの”

ネイは啞然として双子の姉の輝かしいサファイヤ・グリーンの双眸を見つめていた。彼は漸く言葉を紡いだが、どのくらいの時間が流れたのかは、彼も彼の姉も意識していなかった。

「それじゃ、姉さまは……？」

“ええ、議員に立候補することを考えています”

「でも……」

“大勢死んだのよ。選挙に関する規定も改訂されたわ”

下院議員の被選挙権年令は二〇歳以上に切り下げられ、上院議員は二二歳以上に。アリシアはこの年一九歳、来年には下院議員への被選挙権が生じる。それに、“ロメイチェフ艦隊の智将”としてマス・メディアに喧伝され始めているネイの名声を利用すれば……

しかし……

「無茶だ、姉さまが議員だなんて！」

ネイは叫んでいた。共和国政府や宇宙軍首脳の腐敗振りは、前線の艦隊将兵には堪え難いものだった。しかも、共和国政府を侵食しているのは、政治家が賄賂をとる、などという単純な腐敗ではなかった。

今次の戦争で前線将兵が散々苦しめられてきたように、今の共和国政府は完全な無責任状態に陥っているのだ。戦争とは、前線の将兵が任意に行うもの、と規定し、国家の責任において戦争を遂行するなどという意識はかけらほどもない。そんな世界に、何故アリシアが好んで足を踏み入れねばならないのか……

人の気配に、ネイははっとして振り返り、そして、ばつの悪そうな表情で佇むマールクの姿を見出した。

「マールク中尉殿！」

「あは……悪い。立ち聞きするつもりはなかったんだ、と言って信じ

て貰えるかな」

“構いませんわ、マールク……中尉？”

アリシアも視界にマールクを捉えたようだった。僅かに微笑み、真つすぐな視線を褐色の髪 of 青年に注ぎ込む。マールクは居心地が悪そうに、帽子をとって髪に手をやった。

「はじめまして……ええと、そのクローネス・マールクです」

マールクは素直な感嘆の表情を浮かべて、アリシアの美貌に視線を据えていた。アリシアは決して絶世の美女というわけではなかった。顔かたちの端麗だけを問題にするなら、彼女以上の美貌の女性は何枚にいとまあるまい。しかし、彼女の裡にある何かしら非凡なものが、マールクに強烈な印象を与えたのは事実だった。

ロメイチェフ艦隊を勝たしめたのはこの人だ、とはネイが姉にマールクを紹介した言葉である。本来なら少将になってもおかしくないこの人をいまだに中尉のままに放置しているのだから、宇宙軍の硬直振りは極限ではないか、と彼は姉を説得しようと試みていたのだ。

“わたしはこれ以上の戦争を止めたいのです、ミスタ・マールク”

マールクも好戦的な軍人ではない、と一瞬に見てとつたらしいアリシアは勁烈な光を湛えた瞳を弟からマールクに転じていた。

「大変な人生を選択されることになりますよ」

母星をドレドの“侵略”から救った智将ネイス・ミュッケルの姉として権力の座に近付くことも、或いは平凡な一女性として生涯をおくことも思いのままではないか。それでも敢えて反戦を唱え、政府や軍部から“非国民”の罵声を浴びる至難の道を選択するのか……その問いを放ったマールクの表情は峻厳を極め、ネイに言葉を挟まなかった。

“ええ”

アリシアはきつぱりと頷く。

“何もできずに……大切な人たちを、手をこまねいて死なせてしまいました。あんな思いは一度でもう沢山。二度と、そして誰にも味わってほしくありません”

マールクはネイを振り返った。灰色の目はいつもの柔和な光を取り戻している。

「そういうことだよ、ネイ。君の姉上も散々に考え抜いてのことだと思っ」

“ええ……”

ネイは肩を落とした。

「じゃあ、お邪魔虫はこれで消えるよ」

待つて下さい、と呼び止めたのは姉弟が同時だった。ネイはマールクに家族がいらないことを知っている。そして、アリシアは、この風采の上がらない青年に何かしら好感を抱いたようだった。

“……宜しければ、もう少しわたしたちの話相手になってください”

両親を失い、友人の多くを失った。弟と二人切りで話していると、つい自分が悲劇のヒロインにでもなったような錯覚に陥ってしまったて恐いのだ、と。

マールクとて否やはなかった。彼我双方あわせて四〇〇万が会戦し、一五〇万の死傷者を算した“ドライバオム回廊宙域の会戦”の直後である。夥しい流血への嫌悪感を洗い流すべきアルコールもない今、アリシアとネイの姉弟との会話は、マールクに人間に戻ることでできた蘇生の思いを抱かせたのである。

“ドレド戦役”はこの後、なお三年近く続くが、その勝敗は“ドラ

イバオム回廊宙域の会戦”で決していた。マールクはこの会戦の全勝を背景にドレドとの和平交渉を政府に望んだが、全く無益だった。彼は、なお三年に亘ってドレド宇宙軍と戦い、夥しい流血と引き換えに“常勝提督”の名声と大将の地位を手にするようになるのだが、もちろん、そんなものは彼の望んだものではあり得なかった。

もともと、彼と同時に参謀総長デスタリヴァ・ドロク中將は大将から更には元帥の地位を手にし、フォルター・ワシエック中將も大将に昇進して“救国の英雄”の名声をマールクと分け合い、共和国市民の歓呼を浴びるのである。

同じ頃……

ル・フント母星から約一万光年を隔てたシエルメス連邦母星で、一五歳の少年の論文が宇宙考古学界に一大論争を巻き起こし、その少年の六歳違いの弟は憧憬の目で兄の姿を見つめていた。

“銀河系大戦”、或いは“前期銀河系大戦”の開戦は共和国暦七二〇年一月二一日、連邦暦五六九年一〇月一日のことである。

少年はレーフラム・トゥリユー・ネレイド。マールクはもちろん、彼も数年後に迫った彼らの運命的な出会いを微かな予感としてさえ感じとってはいない。